

# 松田栅默

---- 第92·93次調査概要 ----

1993 • 3

秋 田 県 教 育 委 員 会 秋田県教育庁払田柵跡調査事務所



外郭南門と角材列 (東から)



1 外郭南門(北から)



2 外郭南門と内郭の丘陵(南から)



外郭南門 (西から)



1 外郭南門門柱(南側東2)



2 同 上(北側東2)



角材列開口部(西から)



角材列開口部の最終段階河川跡 (東から)



1 SA1028角材列西端部 (西から)



2 同 上(南から)



1 SA1028角材列(北から)



2 同 上



1 SA1027角材列(南から)



2 同 上(北から)



1 橋 脚



2 橋脚下部

国指定史跡払田柵跡は、管理団体である仙北町による環境整備も 順調に進捗し、見学者も年々増加していることは喜びに堪えないと ころであります。

平成4年度の調査は、第4次5年計画の4年次にあたり、「ふるさと歴史の広場」事業に伴って、外郭南部の低地において調査を実施しました。

第92次調査は、外郭南門を含む外郭線を東西約100mにわたって 広く調査しました。従来の知見を追認する一方で、外郭線角材列に 長さ27mもの開口部があることが初めて判明しました。

第93次調査では、外郭南門と内郭南門との間に大きな河川敷が存在し、橋脚が発見され、大路の幅を推定することができました。さらに払田柵跡では初めての漆紙文書が出土するなど、極めて大きな成果を挙げることができました。

本書は以上のような成果を収録したもので、古代城柵官衙遺跡の研究上、資するところがあれば幸いに存じます。

最後に、調査ならびに本書作成にあたって御指導・御助言を賜りました、文化庁、奈良国立文化財研究所、国立歴史民俗博物館、宮城県多賀城跡調査研究所、秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所に心から感謝申し上げるとともに、史跡管理団体仙北町、同教育委員会、千畑町教育委員会ならびに土地所有者各位の御協力に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成5年3月5日

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所 所長 冨 樫 泰 時

# 例 言

- 1 本書は秋田県教育庁払田柵跡調査事務所が、平成4年度に実施した第92次・93次調査の 概要報告である。
- 2 漆紙文書の釈読、墨書土器の判読は国立歴史民俗博物館平川南教授に依頼した。
- 3 外郭線角材の年輪年代測定は、奈良国立文化財研究所光谷拓実主任研究官に依頼した。
- 4 花粉分析・樹種鑑定はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
- 5 土色の記載については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』1976(昭和51)年 を参考にした。
- 6 実測図は国土調査法第 X 座標系を基準に作成した。実測図及び地形図中の方位は座標北を示し、磁北はこれより N 7°30′00″Wである。詳細は『払田柵跡調査事務所年報1977』を参照されたい。
- 7 遺構には下記の略記号を使用した。
  - SA 柱列・角材列、 SB 掘立柱建物跡、 SL 河川跡、 SD 溝、 SK 土坑、 SX 橋脚・その他の遺構

# 目 次

第1	〕 はじめに
第2	き 調査計画と実績
第3	章 第92次調査
第4	章 第93次調査
第5章	<b>5</b> 自然科学的分析
第6	5 調査成果の普及と関連活動
	挿 図 目 次
第1図	払田柵跡調査実施位置図4
第2図	第92次調査実施位置図
第3図	第92・93次調査遺構配置図7・8
第4図	第92次調査遺構配置図9•10
第5図	S B 57外郭南門跡······12
第6図	S B 57外郭南門跡門柱断面図······13
第7図	S A 1027角材断面図
第8図	S A 1027・1028・1032断面図·····18
第9図	S A 1027角材列布掘り出土遺物・・・・・・13
第10図	角材列の開口部
第11図	S L 1035土層断面図23・24
第12図	S L 1035砂礫層出土遺物(1) · · · · · · 25
第13図	" (2) ······26
第14図	" (3) ······27
第15図	" (4) ·····28
第16図	S L 1035最終段階河川跡出土遺物·····29
第17図	S A1037·····30
第18図	S K50 • 1029 • 1030, S X 1031·····31
第19図	S K1029出土遺物(1)
第20図	<i>"</i> (2) ·····33

第21図	遺構外出土遺物(1)35
第22図	" (2) ·····36
第23図	<i>"</i> (3) ·····37
第24図	第93次調査位置図40
第25図	土層模式図
第26図	S B 1048, S K 1050, S D 1041······45 • 46
第27図	S X 1049·····27
第28図	S L 1035砂礫層出土遺物(1) · · · · · · 49
第29図	" (2) ·····50
第30図	<i>"</i> (3)51
第31図	" (4) ······52
第32図	<i>"</i> (5)53
第33図	<i>"</i> (6)54
第34図	" (7) ······55
第35図	S K 1033 • 1034·····56
第36図	S K1033出土遺物(1)
第37図	// (2) ······58
第38図	// (3) ·····59
第39図	S K1034出土遺物······60
第40図	S K1038 • 1042~1044 • 1052······61
第41図	S K1038·····62
第42図	S K1042·····63
第43図	S K1043······64
第44図	S D1036 • 1051 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
第45図	S D1039·····66
第46図	S X1040, 1045 • 1046····································
第47図	S X 1045出土遺物······68
第48図	S X 1046出土遺物······68
第49図	遺構外出土遺物(1) · · · · · 69
第50図	" (2) ······70
第51図	" (3) ······71
第52図	" (4) ·····52

第53図	遺樟	5 外出土遺物	(5)	73
第54図		"	(6)	74
第55図		"	(7)	75
第56図		"	(8)	<b>黍紙文書······76</b>
第57図		"	(9)	77
第58図		//	(10) ·	78
第59図		//	(11) ·	79
第60図		//	(12) ·	80
第61図		<i>"</i>	(13) ·	81
第62図		//	(14) ·	82
第63図		<i>"</i>	(15) ·	83
第64図	河川	埋積物の模式	<b>弋柱状</b> [	図および花粉分析試料採取層準86
第65図	年輪	i年代測定試料	<b>斗採取</b> 位	<u>፟</u> ፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟፟
				表 目 次
第1表	調査	計画表		
第2表	調査	実績表		3
第3表	花粉	分析結果…		86
第4表	外郭	線角材年代測	定結身	ᡛ89
第5表	門柱	樹種鑑定結身	₹	89
				図 版 目 次
卷首図版	ī 1	第92次調査	外郭西	可門と角材列
卷首図版	ĩ 2	第92次調査	1 9	<b>・郭南門 2 外郭南門と内郭の丘陵</b>
卷首図版	ĩ 3	第92次調査	外郭南	<b>阿門</b>
卷首図版	į 4	第92次調査	1, 2	2 外郭南門門柱
巻首図版	į 5	第92次調査	角材列	1開口部
巻首図版	<del>.</del> 6	第92次調査	角材列	開口部の最終段階河川跡
巻首図版	į 7	第92次調査	1, 2	SA1028角材列西端部
巻首図版	8	第92次調査	1, 2	S A 1028角材列
巻首図版	9	第92次調査	1, 2	S A 1027角材列
<b>券</b>	10	笙93次調杏	1 核	新期 2 梅期下部

```
図版1 第92・93次調査 1,2 調査前の状況
図版 2 第92次調査 外郭南門と角材列
図版 3 第92次調査 1 外郭南門 2 外郭南門発掘作業
図版4 第92次調査 1 外郭南門北側東2柱 2 外郭南門棟通り東2柱
図版 5 第92次調査 1, 2 SA1027角材列
図版 6 第92次調査 1,2 SA1027角材列における角材と、その下の礎板
図版7 第92次調査 1 SA1027角材列 2 布掘り内の角材
図版 8 第92次調査 1 SA1027角材列角材の下の礎板 2 SA1028角材列
図版 9 第92次調査 1 SA1032角材列
図版10 第92次調査 1 SA1028角材列西端部と河川跡 2 SA1032角材列東端部
図版11 第92次調査 1 角材列開口部 2 SA1032角材列と河川跡
図版12 第92次調査 1 SA1035河川跡の土層 2 SL1035Dトレンチの最終段階河川跡
図版13 第92次調査 1 SL1035Dトレンチの遺物出土状態
           2 SL1035Dトレンチの角材と杭検出状態
図版14 第92次調査 1 年輪年代測定試料の採取を行う光谷氏
           2 西暦788年の角材木口面
図版15 第92·93次調査 1,2 SL1035河川跡の調査
図版16 第93次調査 1 SB1048掘立柱建物跡 2 同トレンチ壁面の柱
図版17 第93次調査 1,2 SB1048掘立柱建物跡の柱
図版18 第93次調査 1, 2 橋脚検出状況
図版19 第93次調査 橋 脚
図版20 第93次調査 1,2 抜き上げた橋脚
図版21 第93次調査 1 SK1033土坑 2 SK1034土坑
図版22 第93次調査 1 FNライントレンチの土坑・その他の遺構 2 SK1042土坑
図版23 第93次調査 1 S X 1040その他の遺構 2 S X 1045その他の遺構
図版24 第92・93次調査 遺
                物(1)
5
図版42 第93次調査 遺 物(19)
図版43
             花粉分析プレパラート状況写真
```

材の顕微鏡写真

図版44

# 第1章 はじめに

払田柵跡は秋田県仙北郡仙北町払田・千畑町本堂城回にある。遺跡は雄物川の中流域に近く大曲市の東方約6km、横手盆地北側の仙北平野中央部に位置し、第三紀硬質泥岩からなる真山、長森の丘陵を中心として、北側を川口川・矢島川(烏川)、南側を丸子川(鞠子川)によって挟まれた沖積地に立地する。1902・3(明治35・36)年の千屋村坂本理一郎による溝渠開削の際や、1906(明治39)年頃から開始された高梨村耕地整理事業の際発見された埋木が、地元の後藤宙外・藤井東一の努力によって歴史的遺産と理解され、遺跡解明の糸口が開かれた。1930(昭和5)年3月、後藤宙外が調査を実施し、さらに同年10月、文部省嘱託上田三平によって学術調査が行われて遺跡の輪郭が明らかにされた。この結果に基づき、1931(昭和6)年3月30日付けで秋田県最初の国指定史跡となり、1988(昭和63)年6月29日付けで史跡の追加指定がなされて現在に至っている。

1970年代になって、指定地域内外の開発計画が立案された。そこで秋田県教育委員会は地元 仙北町と協議の上、この重要遺跡を保護するため基礎調査を実施して遺跡の実態を把握することを目的に、1974(昭和49)年、現地に「秋田県払田柵跡調査事務所」を設置し、本格的な発掘調査を開始した。さいわい、地元管理団体仙北町および地域の人々の深い理解により、史跡 指定地内は開発計画から除外された。当事務所は1986(昭和61)年4月、「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称した。現在は「払田柵跡調査要項」の第4次5年計画に基づいて計画的に発掘調査を実施している。これまでの調査成果を要約すると次のとおりである。

史跡は長森・真山を囲む外郭線と、長森を囲む内郭線からなる。外郭は東西1,370m、南北780mの長楕円形で、外郭線の延長3,600m、内郭を含む総面積約875,000である。外郭線は1時期の造営で角材列が一列にならび、東西南北に八脚門がつく。内郭は東西765m、南北320mの長楕円形で面積約163,000、内郭線の延長は約1,760mで石塁、築地土塀、(東・西・南の山麓)と角材列が連なり、東西南北に八脚門がつく。内郭北門は2時期、東門・西門・南門は4時期にわたる造営が認められる。長森丘陵中央部には政庁がある。政庁は板塀で区画され、正殿・東脇殿・西脇殿や付属建物群が配置されている。これらの政庁の建物にはI~V期の変遷があり、創建は9世紀初頭、終末は11世紀初頭である。政庁の調査成果は報告書『払田柵跡I-政庁跡ー』(昭和60年3月)として公刊した。

出土品には、木簡・墨書土器・塼・土師器・須恵器・灰釉陶器などがある。木簡には「飽海郡少隊長解申請」「十火大粮二石二斗八升」「嘉祥二年正月十日」などの文書・貢進用木簡がある。墨書土器には「懺悔」「厨」「厨家」「缶舎」「文」などの文字がある。

管理団体仙北町は1979 (昭和54) 年から保存管理計画による遺構保護整備地区である内郭地域の土地買い上げ事業を進めており、1982 (昭和57) 年からは環境整備事業を実施している。

# 第2章 調査計画と実績

平成4年度の調査は「払田柵跡調査要項」に基づく、第4次5年計画の4年次にあたる。さいわい事業費については、秋田県の要求額どおりの国庫補助金の内示(総計費1,400万円のうち、国庫補助金700万円)を得たので、次のような「平成4年度払田柵跡調査計画(案)」を立案した。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	備	考
第 92 次	外 郭 南 部 (仙北町払田字仲谷地)	920 m²	4月10日~8月31日		
第 93 次	同上	360 m²	9月1日~10月31日		
合 計	2 地 区	1,280m			

第1表 調査計画表

平成元年度から平成5年度までの調査は、「払田柵跡発掘調査第4次5年計画」として立案され、顧問の指導と助言を得て承認されたものである。

第92次調査は、仙北町による史跡等活用特別事業のうち、外郭南門と外郭線角材列の復原整備計画に基づき、外郭南門の再調査と、その東西両側に連なる外郭線角材列の検出を目的としたものである。

第93次調査は、仙北町による史跡等活用特別事業のうち、外郭南門と内郭南門を結ぶ大路の 復原とその両側の張芝、植栽などの整備計画に基づき、大路の検出と、遺構の存在確認を目的 としたものである。

平成4年度の調査の実績は、第2表のとおりである。

第92次調査では、1930年、1975年の調査に続き、外郭南門の全体を検出した。また、外郭南門を含む東西約98mの範囲において、外郭線角材列を検出した。外郭南門および角材列は、これまでの認識どおり、建て替えのない1時期のみの造営で、堀、櫓を伴わない。年輪年代測定の結果、角材は西暦800年、801年の伐採であることが判明し、外郭線の東辺での測定結果と合致した。外郭線が9世紀初頭の創建であることが南辺においても追認されたことになる。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第 92 次	外 郭 南 部 (仙北町払田字仲谷地)	1,400 m²	4月8日~7月2日
第 93 次	同 上	2,800 m <sup>2</sup>	7月3日~10月20日
合 計	2 地 区	4,200 m <sup>2</sup>	

第2表 調査実績表

外郭線角材列は、これまで途切れることなく全周すると考えられて来たが、外郭内を流れる河川に関連して、27mの間が当初から作られていないことが判明した。

第93次調査では、大路を示す側溝や道路の盛土などは検出されなかった。しかし、掘立柱建物跡と河川内に検出された橋脚の位置から、外郭南門と内郭南門を結ぶ線上に大路が存在したと判断され、その幅は約12m以内と推定される。外郭内を流れる河川跡は、河川敷の南北最大幅が約100mである。この川は外郭線の創建前から存在し、川底から出土する土器の年代の示す9世紀末~10世紀前半代に大規模な洪水があって、川底に多くの遺物を堆積させている。

橋脚と考えられる遺構は、河川敷内にある10本の柱で、このうちの1本は先端を尖らせた直径50cmのスギ杭を川底の粘土層に打ち込んでいる。大路を横切る河川に架設した橋の橋脚柱と考えられる。

遺物には多くの土器や、斎串・曲物などの木製品が出土した。注目されるものに、掘立柱建物跡付近から出土した第1号漆紙文書と、河川底部に堆積した砂礫層から出土した「小勝」銘 墨書土器がある。総遺物量はコンテナ52箱に上る。

第1図 払田柵跡調査実施位置図

# 第3章 第92次調查

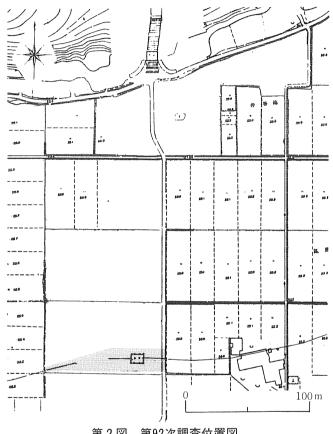
## 第1節 調查経過

仙北町では平成3年度から史跡等 活用特別事業による払田柵跡の整備 を開始し、ガイダンス施設とそれに 伴う駐車場の建設などを実施した。 次いで、今年度はそれらの範囲を除 く20.772m<sup>2</sup>を対象として、遺構保 護を目的とした盛土造成工事を計画 した。

この工事を理由とした現状変更許 可申請書が6月3日、仙北町から提 出され、申請書は秋田県教育委員会 を経由して文化庁へ進達された。

一方、この区域では外郭南門と外 郭線角材列の復原整備も計画され、 これを理由とした現状変更許可申請 書が9月14日、仙北町から提出、申 請書は秋田県教育委員会を経由して 文化庁へ進達された。

当事務所では、これらの工事に先



第2図 第92次調査位置図

立ち、外郭南門と角材列の調査を第92次調査として今年度の調査計画に組み入れ、発掘調査を 実施したのである。

4月8日、調査区西端の管理用道路と外郭線角材列の交差部分から調査を開始、すぐに角材 列の上部を検出した。15日、調査区の東端部に移動し、角材列の布掘りを検出した。20日から は重機を使用して調査区全体の表土剝ぎを行った。5月12日、外郭南門の東側にある現道路敷 部分を初めて掘り下げた。15日にはSA1027角材列の南に土坑やその他の遺構を検出。21日、 門の西にあるSA1028角材列の調査を開始、布掘りを検出したが、15ライン以西では角材がボー リング棒でも全く当たらないことに気付き、26日、SA1028の第30次調査における深掘り部分

をさらに下部まで掘り下げたところ、河川跡であることが判明。角材列の布掘りはその東側で 止まっており、川の中には構築されていないと判断された。翌日、この河川はかなりの広さが あると考えられたので、河川の西側のSA1032角材列は、確実にその存在が確かめられる西端 部から河川へ向かって東へ掘り進めることにした。

河川西側のSA1032角材列を精査して、6月2日にはその東端が河川の西側の岸で止まることが明確となった。6月10日から外郭南門の第7次調査における埋め土の除去を行って、遺構を現し角材列の実測作業も並行した。18日には門の西の角材列、河川の写真撮影を行った。23日、外郭南門の全ての柱掘形を検出。河川跡にはトレンチを設定して川底まで掘り下げた。しかし、川の南岸は明確であるが、北岸はトレンチ内で把えることができず、調査区の北へ延びていることが推測された。川底からは土器や木製品が出土した。

30日、外郭南門の全景撮影を行った。以後、第93次調査と並行して補足調査を行い、7月30日には奈良国立文化財研究所、光谷拓実主任研究官より、外郭線角材列の中から年輪年代測定試料6点を採取していただいた。

8月18日には第35回顧問会議を開催し、調査・研究の顧問である秋田大学新野直吉学長、国立歴史民俗博物館考古研究部長岡田茂弘教授に対し、第92・93次調査の概要を説明するとともに現地で御指導いただいた。8月22日には現地説明会を開催し、多数の見学者が来跡した。

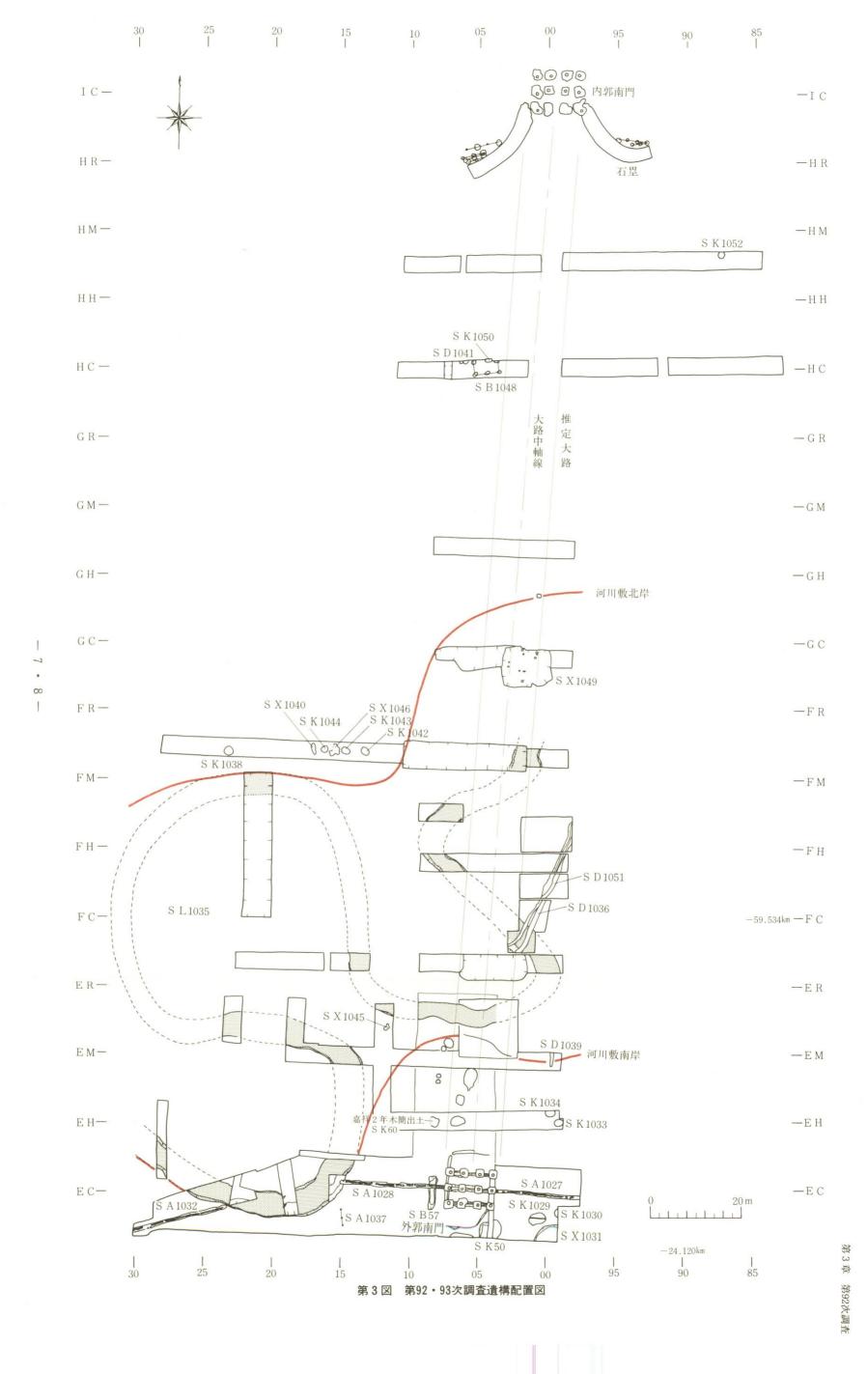
## 第2節 検出遺構 (第3・4図)

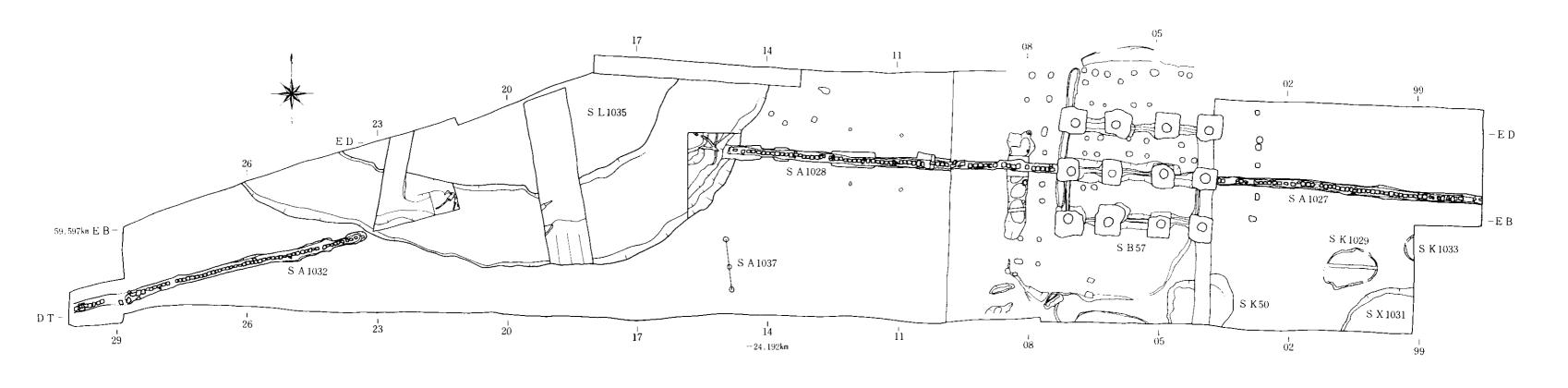
外郭南門は1930年、文部省が初めて調査を実施し、その後旧高梨村は土地の買い上げを行い、(註2) 門柱の乾燥を防ぐため水を巡らすなどの保存措置を施してきた。1975年の第7次調査はこの外郭南門を対象としたが、遺構の保存状態は良好であった。この他、外郭南部の低地では、外郭南門の北側に連続する地域で第10次調査、外郭線角材列を対象とする第30次調査、さらに外郭内の旧地形や土地利用状況を探る調査の一環として第62・66次調査を実施してきた。

しかし、今回のように門を含む東西約100mもの長さで外郭線が面的に調査されたのは初めてである。外郭南門ではその再調査、角材列では建て替えの有無や、堀・櫓の有無の検討、年輪年代測定の実施などを目的とした。

調査対象地は標高33m前後の水田であるが、仙北町が1991・1992年に土地の買い上げを行い、 休耕田となっている。

調査の結果、掘立柱建物跡(外郭南門)1、外郭線角材列3、柱列1、土坑3、河川跡1、 その他の遺構1の計10遺構を検出した。







#### 1 遺構と遺物

#### (1) 掘立柱建物跡

① SB57 (外郭南門) (第5  $\cdot$  6 図, 巻首図版  $1 \sim 4$ , 図版  $2 \sim 4$ )

桁行3間×梁行2間の東西棟掘立柱式の門である。柱間距離の平均は桁行総長9.20m(東から2.86+3.54+2.80)、梁行総長6.65m(北から3.32+3.33)で、桁行30尺(9+12+9)、梁行22尺(11+11)と考えられる。造営尺は1尺=30.5cmである。建物方位は調査南北基準線に対し、N94°Eで、建て替えはなく、1時期のみの造営である。内郭南門との距離はほぼ240mである。基壇の痕跡や内郭南門との間の道路痕跡は認められない。

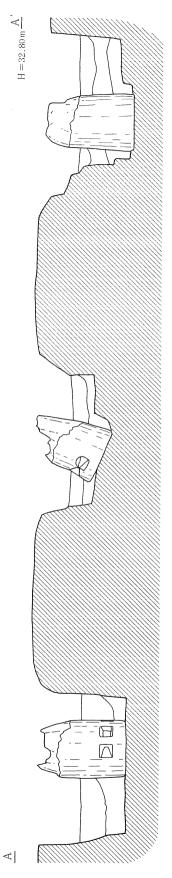
柱掘形は一辺1.35~2.0mの方形で、第7次調査の後に一部が破壊を受けて変形している。 垂直に掘り込まれ、埋土は地山の青灰色粘土と黒色土が混じる。門の桁行方向3列の掘形を結 ぶ溝があるが、これは文部省調査後に水を滞留させて門柱の乾燥を防ぐために、旧高梨村が講 じた遺構保護策である。妻柱の掘形には角材が接続していないが、文部省調査の報告書には接 続する状態の平面図や写真図版が掲載されており、元来は直接に接続していたもので、前記の 遺構保護のための溝を掘った際に抜き上げられたのであろう。

深さの明らかな側柱4本では、底面のレベルが31.40~31.64mであるが、棟通り中央2本はそれに比べ36~67cm浅い。柱は下部で直径60~62cmの丸柱で、手斧等の工具で加工が施され、下部に目渡孔がある。東側中央の柱の樹齢はほぼ100年、西側中央の柱のそれは80年である。南側の東から2番目の柱は、掘形底面を円形に掘りくぼめた中に柱を置く。内郭西門でも同じ状況が見られた。

棟通りの東から2番目の柱は南に傾き、遺存長も短い。同じく東から3番目の柱は抜き上げられ、クリ材の残欠が僅かに残るのみである。1930年の調査時において、既に半ば腐朽し去っている柱があるとの記述が報告書にあるのは、この材を指すと考えられ、第7次調査ではこの掘形底面に柱の抜き跡を検出している。棟通り中央2本の柱は文部省調査時以前に既にこうした状況となっていたと考えられ、それは掘形の底面レベルが他の掘形よりも浅く作られていることに起因すると推定される。棟通り中央2本の柱掘形の同様な傾向は内郭西門でも確かめられているほか、この2本の柱を欠く構造は、政庁の東・西・南門、内郭東・南門でも認められる。

第7次調査で $SA68\sim71$ とした4本単位の小柱穴は、内郭東門や志波城政庁正殿などに見られる足場組柱穴と同じで、今回門の東側にも南北1列が検出された。直径 $30\sim50$ cm、深さ $10\sim20$ cmのものが多い。門の中央部から南側には検出されず、後世の削平によって失われたもので、元来は門を取り囲んで存在したと考えられる。門の側柱との距離は、西側では2列あり、それぞれ1.90cm、3.20cm、東側では3.60cmである。

第5図 SB57外郭南門跡





第6図 SB57外郭南門門柱断面図

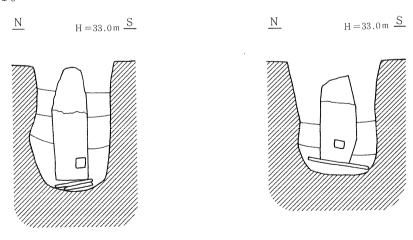
門柱の樹種は西側中央の柱がトネリコ属、南側の東から2本目がケヤキまたはハリギリ、その他はクリである。柱掘形からは遺物は出土しなかった。

#### (2) **外郭線角材列** (巻首図版 5~9)

奈良国立文化財研究所、光谷拓実主任研究官による年輪年代測定によれば、角材の伐採年代は西暦800年が1点、801年が4点である。他に788年の数値を示したものが1点あるが、角材の木口面に虫食いによる孔があり(図版14-2)、この年代で成長が停止したものを伐採した可能性が高く、この数値は伐採年代とは言えない。

#### ① SA1027 (第7~9図, 図版5~8·24)

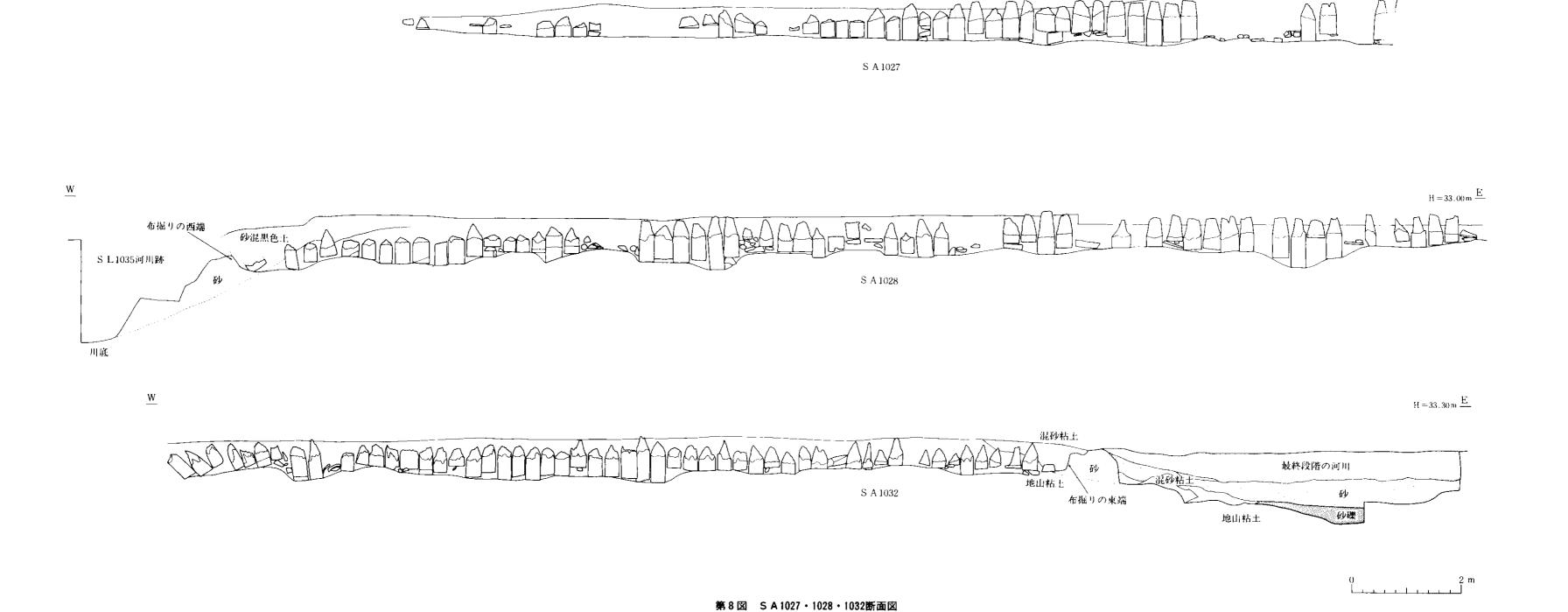
SB57外郭南門の東側中央の柱掘形から東へ18.5mにわたって検出した。門の東を南北に通る町道部分は、今回初めて調査を行ったが、その東の水田は1930年にも調査がなされている。布掘りは上面幅50~80cm、深さは最も深い東端部で85cmあり、その中に角材が密接して立ち並ぶ。角材は一辺の長さがが30cmを越えるものが多く、36cmを測るものもある。一辺の平均は29.5×24.6cmで、長辺を布掘りに対して平行に並べる。既に抜き取られた箇所には角材の下に置かれた礎板のみが残っている。角材の長さは最長80cmほどのものもあるが、門に近付くにつれて布掘りの底面レベルがしだいに上がり、東端とは約40cmの高低差が生じている。したがって、角材の保存状態も西ほど悪く、町道があったこともあってか、痕跡のみが並ぶ箇所もある。





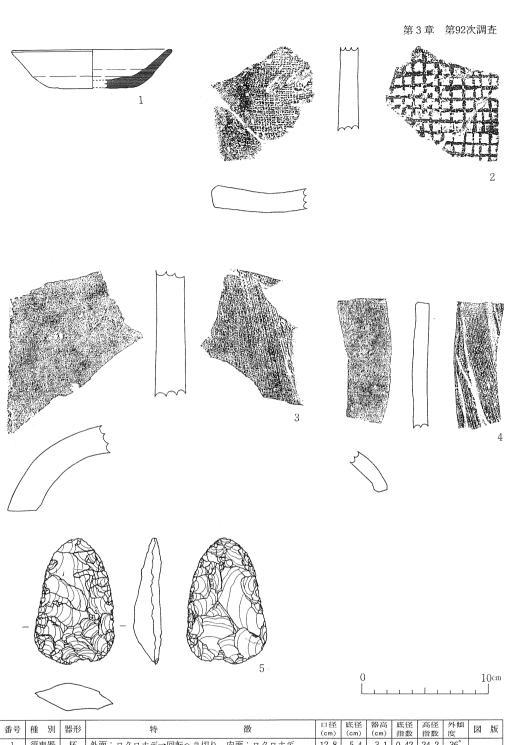
第7図 SA1027角材断面図

 $H=33.30\,\text{m}$   $\stackrel{\textstyle E}{-}$ 



- 15 · 16 -

 $\underline{\mathbf{W}}$ 



1 須恵器 杯 外面: ロクロナデ→回転へラ切り 内面: ロクロナデ 12.8 5.4 3.1 0.42 24.2 36°	番号	種	別	器形	特	徵	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数	高径 指数	外傾 度	図	版
1 別心	1	須恵	器		外面:ロクロナデ→回転へラ切り	内面:ロクロナデ	12.8	5.4	3.1	0.42	24.2	36°		

番号	種	别	特	徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	図版
2	平	瓦	凹面:布目痕 凸面:格子叩き目				1.6	24-1
3	丸	瓦	凹面:布目痕				2.4	24-2
4	丸	瓦	凹面:布目痕				1.2	24-3
5	石	箆			10.0	6.3	2.2	24 - 4

第9図 SA1027角材列布掘り出土遺物

外郭南門の東側中央の柱掘形内には角材はないが、元来は柱に接続していたものであろう。 角材列の東端から、外郭南門の東側中央の柱まで60本の角材が存在したと推定される。年輪年 代測定では801年の数値を示すものが2点ある。

遺物は、布掘り内から須恵器杯、平瓦、丸瓦、石器が出土した(第9図)。石器は縄文時代のものが混入したものである。他に小破片であるが、須恵器では回転へラ切り痕のある杯、高台付杯、甕、土師器では回転糸切り痕のある杯、甕底部が出土した。

#### ② SA1028 (SA58) (第8·10図, 図版8·10)

SB57外郭南門の西側中央の柱掘形から西に23mの長さで検出した。1979(昭和54)年の第30次調査で坪掘りによって角材の確認調査を行っており、布掘りの所々が上部のみ幅広くなっているほかはSA1027と同様の幅である。西側中央柱の掘形内にも1930年の調査時には角材が存在して柱に接続していたが、抜き上げられている。角材の一辺の長さは30cmを越えるものが多く、平均は28.7×24.8cmである。最も長い角材は97cmの長さがある。抜き上げられた角材も含め、73本の角材が立ち並んでいたと推定される。

布掘りの西端は、SL1035河川跡に向かって落ち込む植物遺体を含んだ自然堆積土を掘り込んで作られ、河川の肩部で明確に壁をなして止まる。河川と角材列との新旧関係は、明らかに角材列の方が新しい。西端の角材は西に傾いている。この角材は下部が僅かに残るだけであるが、他に比べて特に大きな角材とは言えない。西に傾いているのはこの角材を西側から支えるものが特になかったことを示すものか。その東隣りの角材は残存しない。

年輪年代測定では788年、800年の数値を示すものが各1点、801年が2点である。

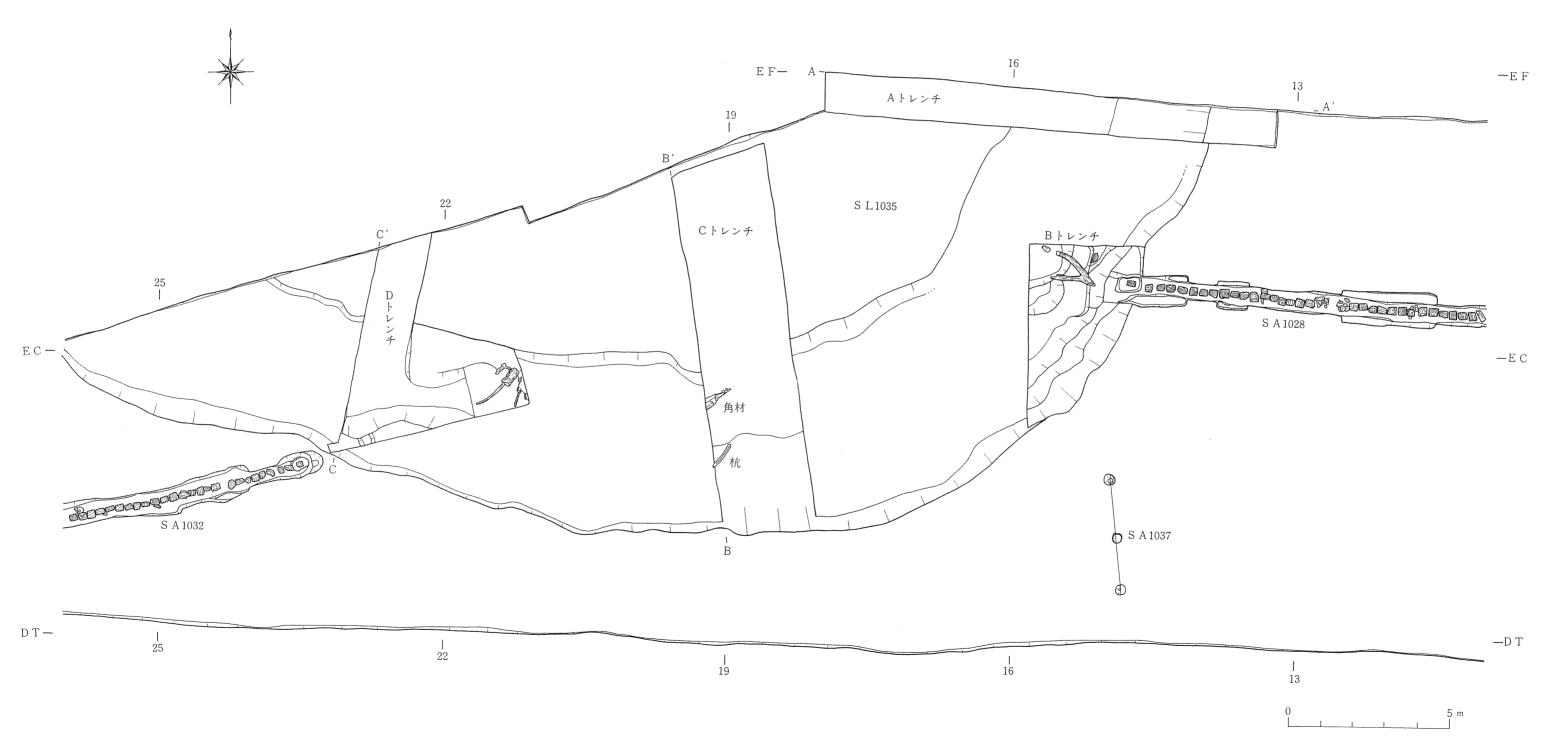
#### ③ SA1032 (第10図, 図版9)

SL1035河川跡の西側に21mにわたって検出した。暗渠排水溝との重複が激しく、布掘り上部はかなり破壊を受けている。西端部の角材は西に向かって傾くものや、横倒するものがあるが、布掘り内にも砂利が入っていることから近年の攪乱によるものであろう。SA1027・1028と異なり、角材の一辺が30cmを越えるものはほとんどない。一辺の平均は25.8×21cmである。

布掘りの東端部はSL1035河川跡に傾斜する植物遺体を含んだ自然堆積層を掘り込んで作られ、壁をなして止まっている。最も東の角材は失われており、礎板が残っている。新旧関係は角材列が河川よりも新しく、東側のSA1028角材列の西端部と同様である。

角材列全体を見ても明らかにスギ以外の材と判断されるものは見られない。角材の底面レベルにはかなりの変異があり、隣接する角材どうしではSA1027の場合最大25cm、SA1028では25cm、SA1032では27cmの高低差がある。

布掘りの底面に直接角材が置かれるとは限らず、掘り下げた布掘りに土を入れ、その上に礎板を置いてから角材を建てる箇所もある。底面レベルの高い角材には下に2段、3段の礎板が



第10図 角材列の開口部

置かれているが、その場合、両側の角材の底面が低く、その間の1本だけが高くなっていることがある。一礎板に2本の角材がまたがる場合もある。

しかし、こうした箇所でも布掘りの幅は一定していて、古い角材をこの部分のみ抜き上げて 修復を施したと判断される形跡は認め難い。反面、約7mの間、高低差が20cm以内に収まっ ている所もある。これらの状態に明確な規則性は窺えない。こうしたことから、礎板の有無や 角材の底面のレベルの違いは、角材を布掘り内に建てる際に必要に応じて1本づつ角材の高さ を調整しながら建てたことによると考えられる。

SA1032には角材の1辺の幅が30cmを越えるものはほとんどない。ところが、SA1027と1028には最大幅が34cmを測るものもあって、その違いは歴然としており、門に近い位置で幅の広い角材を使用していることが明確である。

SA1028角材列の南北両側に対をなす4個の柱穴がある。径20cm、深さ27cmで、径10cmの柱痕跡がある。東西方向3.60m、南北方向3.80mの距離である。角材列に関連するものか否かは定かでない。

SA1028と1032角材列の間にはSL1035河川跡の南端部があり、この間27mにわたって角材列が当初から作られておらず、河川を境に角材列の方向に変化がある。角材列に代わり得る区画施設あるいは遮蔽施設は、南岸の地山面には検出されない。角材列に伴う堀、櫓状建物、角材列の上部を支えるための支柱は調査範囲内には認められない。

#### (3) 河川跡

① S L 1035 (第11~16図, 巻首図版 5 · 6, 図版12~13 · 24~26)

SA1028とSA1032角材列の間に、外郭内を流れるSL1035河川跡の南端の一部がある。南岸は粘土質土の地山で、北岸はこれより約100m北にある。

河川の深さ、角材列や遺物の有無の確認を目的にA~Dの4本のトレンチを設定した。川底までの深さは川の検出面より約2.0mあり、最下層には砂礫が20~40cmの厚さに堆積する。上層ほど粒子が細かくなり、砂質土、粘土質土となる。砂礫層には土器や木製品が含まれ、土器の年代は9世紀末~10世紀前半代と推定される。その上の砂質土層には水流を示す細かな層理が見られ、植物遺体が含まれるが、土器などの遺物はほとんど出土しない。

Bトレンチでは水流によって流されたと見られる自然木が、河川の下方の斜面に検出された。 Cトレンチの砂礫層からは外郭線角材列に使用した角材と同様の角材が、角材上部の腐朽して尖った方を河川の上流に向けて横倒して出土した(図版13-2)。一辺 $27\times24$ cm、残存長100cmあり、SA1028角材列西端部の1本が川底に流れ落ちたものと見られなくもない。SA1028などの角材と異なる点は、角材の半分以上が腐朽して細くなっていることである(図版26

-16)。砂礫層に流れ落ちた時点で既にこのような状態となっていたと見ることができよう。また、長さ1.95mの細いスギの角杭が、最終段階の河川の上部から砂礫層の上面まで打ち込まれていた(図版13-2)。手斧痕跡が全体に見られ、古代における何らかの仕事であろう。

Dトレンチでは上方に生えた自然木に、工具による伐採痕が見られた。

最終段階の河川跡が北に湾曲する幅4.5~6.0mの泥濘状となって平面確認される。少量の遺物が植物遺体とともに出土した。

河川内に角材列や布掘りは存在せず、角材列はこの蛇行する河川の東西両側において明確に 止まっている。角材列の布掘りは、SA1027・1032ともに河川の肩部にある植物遺体を含む自 然堆積土を切っており、角材列の方が新しいことが明らかである。

この河川は9世紀初頭の外郭線角材列の創建時に既に存在し、その後も河底を下刻する形で流れた時期もあったが、やがて9世紀末~10世紀前半の頃に多くの砂礫と共に遺物を堆積させる状況に変化し、砂層、粘土層をも堆積させて、さらに最終段階の河川を形成したと考えられる。なお、最終段階の河川は、明治年間の耕地整理前の様子を描いた『耕地整理地区現形図』を見ると角材列の開口部付近では細い水路と、それに沿った道路がこの位置に重なるように描かれているが、その北側の第93次調査区での蛇行する流れは全く描かれていない。河川の上部からも僅かではあるが土師器や木製品が出土していること、古代の仕事と考えられる杭が打ち込まれていることなどから、この部分の河川としての終焉は古代の範囲内と推定される。

川底の砂礫層出土遺物(第12~15図)は、 $1\sim9$  が須恵器杯で、 $1\cdot2$  のみ底部切り離しが回転へラ切り、他は回転糸切りによっている。 $7\sim9$  は底面に墨書があり、9 は「日當」か。10は小型の須恵器甕である。 $11\cdot14$ は両面に黒色処理を施す土師器杯で、14には低い高台が付く。 $12\sim24$ は土師器杯で、13の体部に「蟠」と見られる墨書がある。25は土師器甕である。26は砥石で 4 面を使用する。木製品としては $27\cdot28$ が斎串、 $29\cdot30$ は箸、31は檜扇である。32は末端に孔があるが用途不明。33には樺皮紐が付き、側板の痕跡が見られる。曲物の底板であろう。

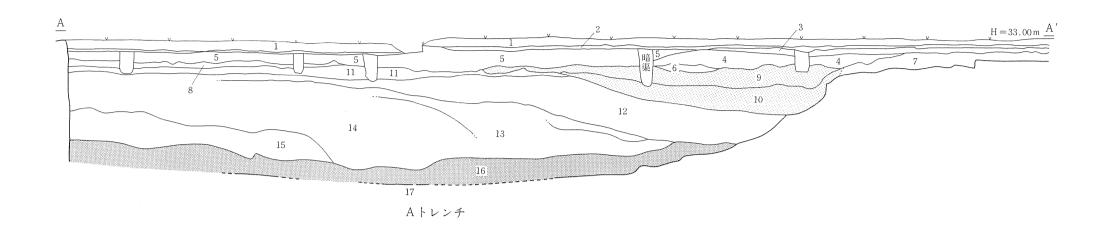
角材列開口部の最終段階河川跡からは、土器では低い高台の付く土師器皿(第16図1)、珠洲系陶器(2)、木製品では串(3・4)、方形曲物蓋(5)、方形曲物底板(6)、円形曲物底板(7)、下駄(8)が出土した。

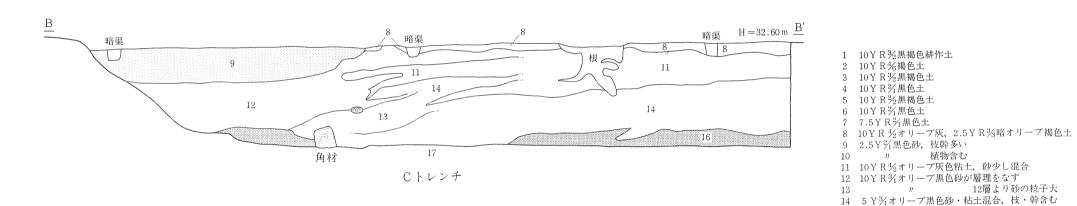
#### (4) 柱 列

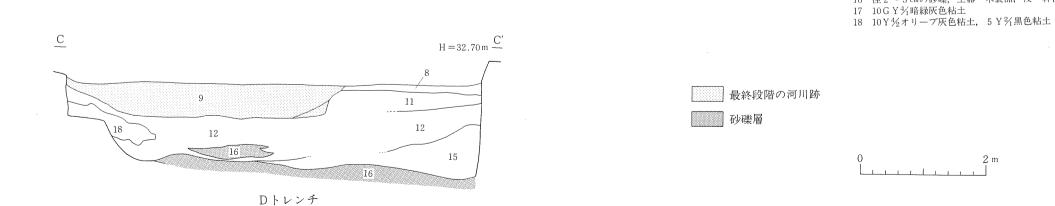
#### ① S A 1037 (第17図)

地山面で確認した南北筋 2 間の柱列であるが、南へ延びる可能性がある。掘形は直径30~40 cmの円形で、深さ25cmほどで底部が丸みを帯びる。北端に径16cmの柱痕跡があり、総長は

15 5 Y 分黒色砂・砂混じり粘土層の層理 16 径 2 ~ 3 cmの砂礫, 土器・木製品, 枝・幹含む

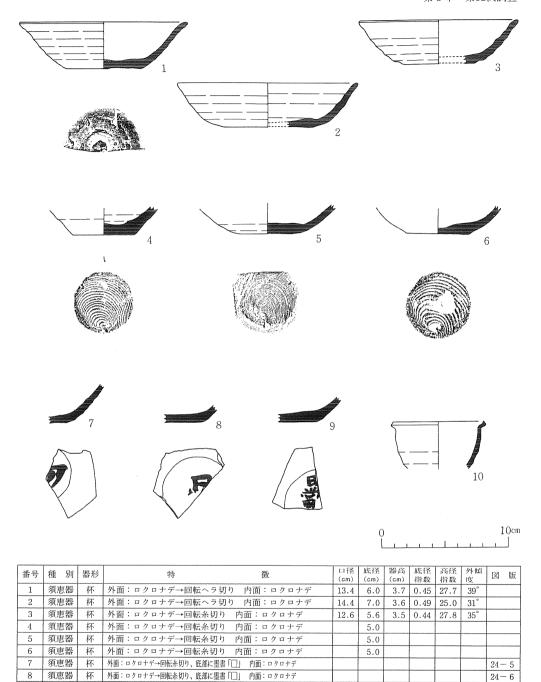






第11図 S L 1035土層断面図

24 - 7



第12図 S L 1035砂礫層出土遺物(1)

7.2

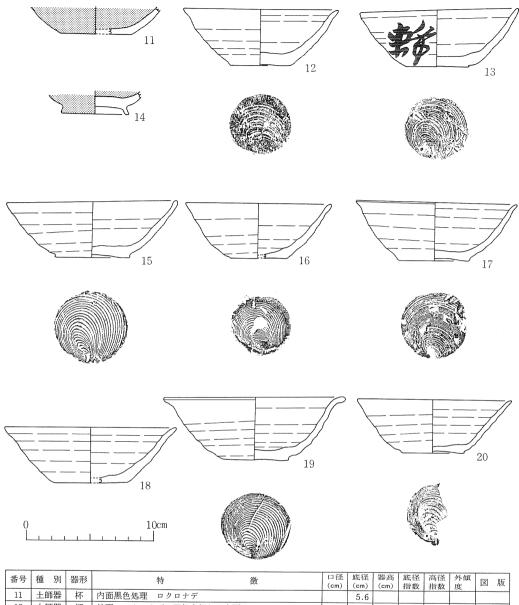
外面:ロクロナデ→回転糸切り、底部に墨書「日當」カ 内面:ロクロナデ

須恵器 小型甕 外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ

9

10

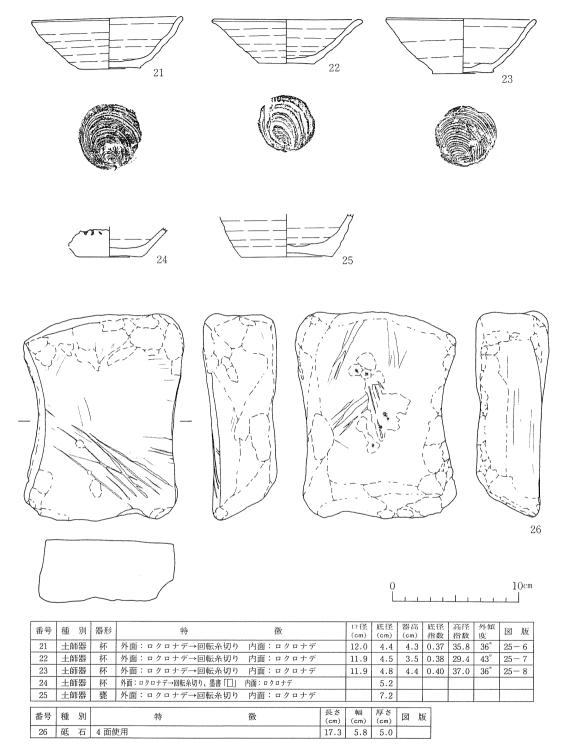
須恵器



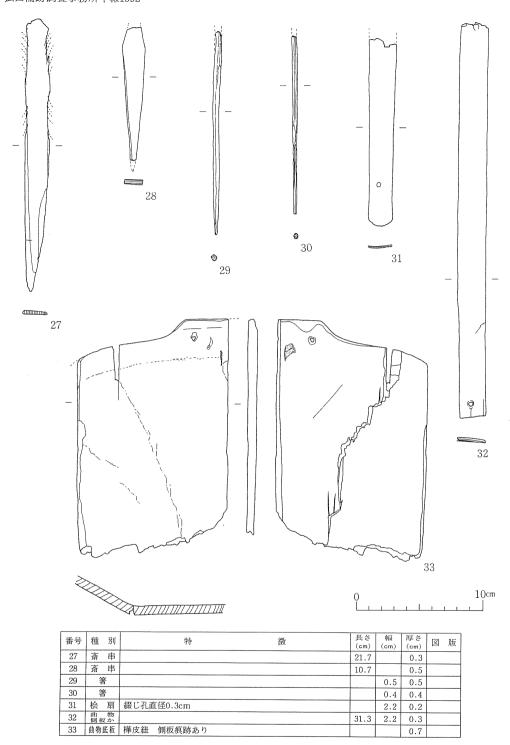
番号	種 別	器形	特 徵	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数	高径 指数	外傾 度	図版
11	土師器	杯	内面黒色処理 ロクロナデ		5.6					
12	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ	12.2	4.8	4.5	0.39	37.0	35°	
13	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 体部に墨書「蟠」カ 内面:ロクロナデ	12.7	5.0	4.7	0.39	37.0	32°	24-8
14	土師器	副析	両面黒色処理、ロクロナデ							
15	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ	13.5	5.8	4.6	0.43	34.1	37°	25-1
16	上師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ	11.6	4.4	4.4	0.38	37.9	32°	25-2
17	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ	12.8	5.5	4.7	0.43	37.0	31°	25-3
18	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ	13.6	5.8	4.4	0.43	32.4	37°	
19	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ	14.4	5.3	5.2	0.37	36.2	38°	25-4
20	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ	12.2	4.8	4.2	0.39	34.5	31°	25 - 5

第13図 SL1035砂礫層出土遺物(2)

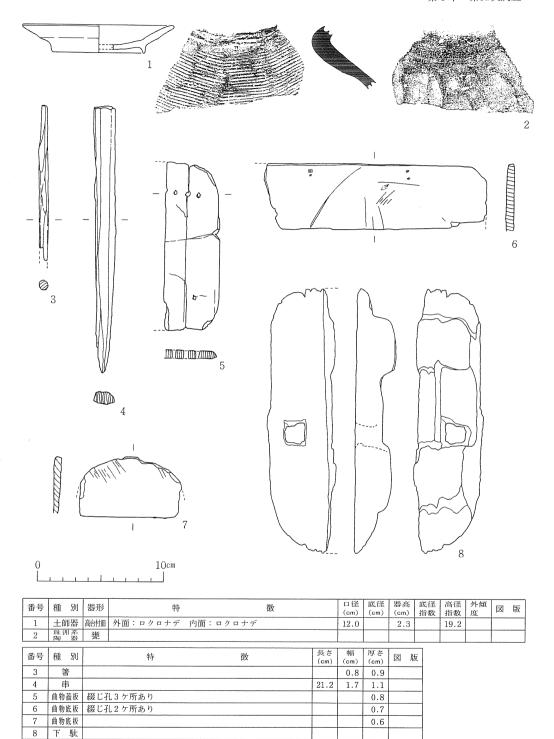
第3章 第92次調査



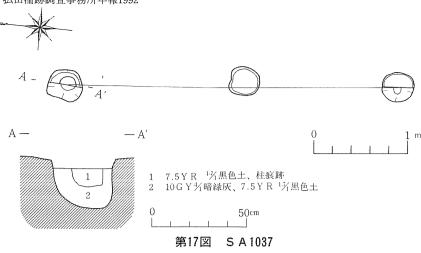
第14図 S L 1035砂礫層出土遺物 (3)



第15図 SL1035砂礫層出土遺物(4)



第16図 SL1035最終段階河川跡出土遺物



3.6m (北から1.9+1.7)、12尺(6+6)と推定される。北端の柱は、SA1028角材列の西端より南へ6.3mの距離がある。方位はN6° Wである。

## (5) 土 坑

### ① SK50 (第18図)

外郭南門の南に位置する掘り込みである。1975年の第7次調査で西半分を調査したが、今回その東半分を新たに調査した。遺構の中央の南北に第7次調査時のトレンチがある。東西4.60m、南北推定4.30mほどの略円形で、深さ20~30cm、底面は丸みを帯びている。

須恵器甕の胴部破片が出土した。

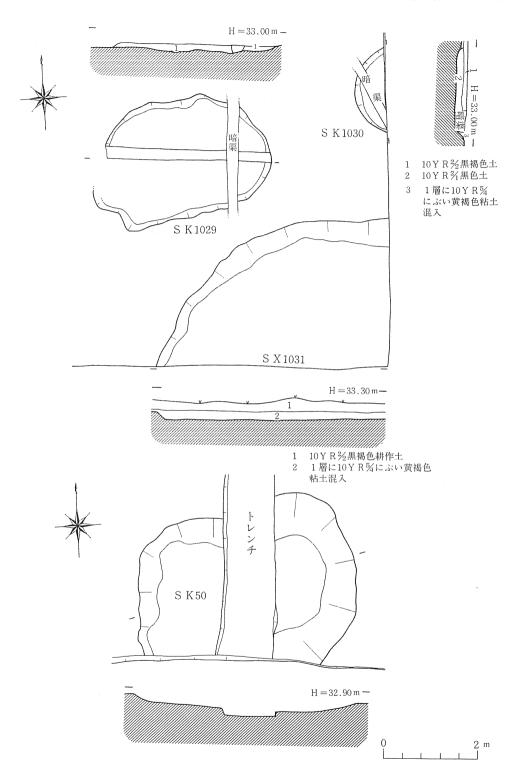
### ② SK1029 (第18~20·27)

長軸3.80m、短軸2.50mの、東西に長い楕円形を呈する遺構である。深さ $7\sim18$ cmである。 坑底には細かな凹凸が多い。土師器・須恵器の破片が多く出土し、これらを土坑内に廃棄した ものと思われる。

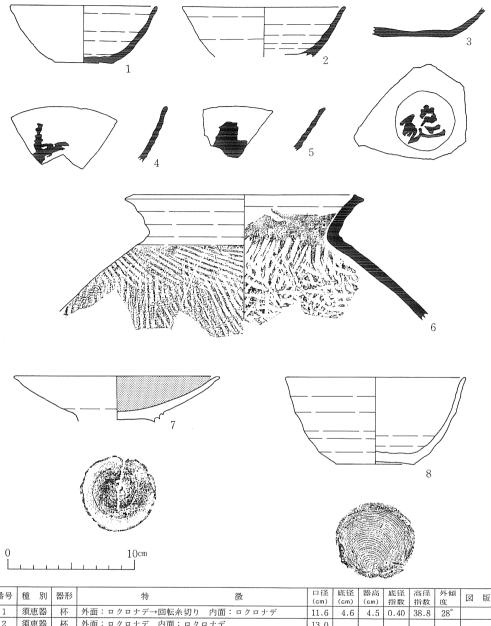
第19図1~3は須恵器杯で、3は底部に「継」の墨書があり、内面を硯に転用する。4、5 も体部に墨書があり、6は須恵器甕である。7は内面黒色処理を施す土師器高台付皿である。 8~15は杯で、9は「□」、10「□主」、11は「木」の墨書がある。16は鍋で外面に煤が付着 している。他に破片としては、回転糸切り痕のある須恵器杯、土師器では回転糸切りで内面黒 色処理が施された杯、下部にケズリ痕のある甕、砂底の甕底部、内外両面に叩き目のある甕、 凸面に格子叩き目のある平瓦が出土した。

### ③ SK1030 (第18図)

SK1029の東 2 mにあり、その西側の一部を調査したのみである。直径は推定 2 mほどの円形と思われ、深さ約22cm、底面は平坦である。

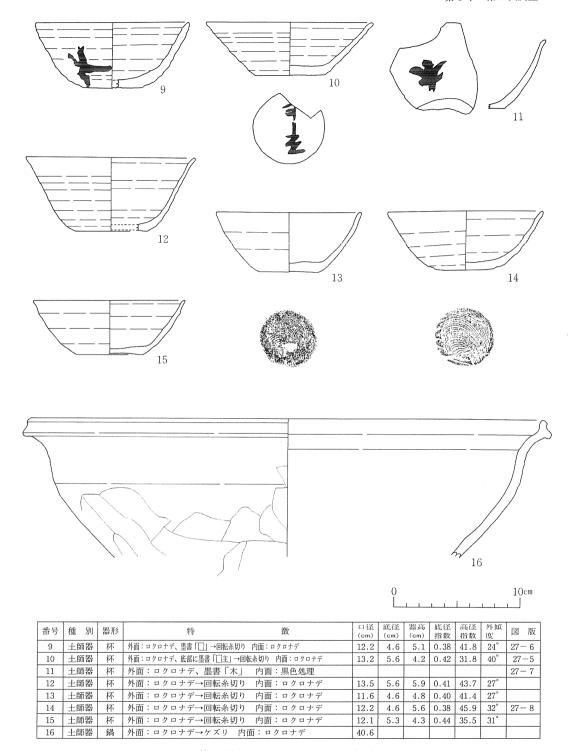


第18図 SK50·1029·1030, SX1031



番号	種 別	器形	特	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数	高径 指数	外傾 度	図版
1	須恵器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ	11.6	4.6	4.5	0.40	38.8	28°	
2	須恵器	杯	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	13.0						
3	須恵器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り、底部に墨書「継」 内面:ロクロナデ、転用硯		4.7					27 - 3
4	須恵器	杯	外面:ロクロナデ、墨書「□」 内面:ロクロナデ							27 - 1
5	須恵器	杯	外面:ロクロナデ、墨書「□」 内面:ロクロナデ							27 – 2
6	須恵器	甕	外面:タタキメ 内面:アテ具痕	17.4						
7	土師器	高計皿	外面:ロクロナデ 内面:黒色処理	13.9						27 - 4
8	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ	14.3	6.3	6.9	0.44	48.3	19°	

第19図 SK1029出土遺物(1)



第20図 SK1029出土遺物(2)

遺物は小破片であるが、土師器の杯、甕の底部・胴部が出土した。

## (6) その他の遺構

① S X 1031 (第18図)

S K 1029・1030の南にある大きな掘り込みである。東西4.90m、南北3.15mで、約1/4ほど掘り上げた。深さ約20cm、底面は平坦である。

遺物は須恵器甕の口縁部・胴部、底部切り離しが回転糸切りによる杯、土師器甕の口縁部が 出土した。いずれも破片である。

# 第3節 遺構外出土遺物 (第21~23図,図版28)

- 1 土 器 1 は底部切り離しが回転ヘラ切りで無調整の須恵器杯、2 は蓋である。 $3\sim6$  は杯の底面で、3 には「 $\square$ 平」、 $4\sim6$  には「 $\square$ 」の墨書がある。7 は珠洲系陶器である。
  - 2 瓦 8~11は丸瓦で、凹面に布目痕がある。
  - 3 木製品 12は円形曲物の底板かと思われる。
- 4 石器 12は砥石で、表裏2面を使用する。13・14は縄文時代の石器で、13は刃部を局部的に磨いて作り出している。

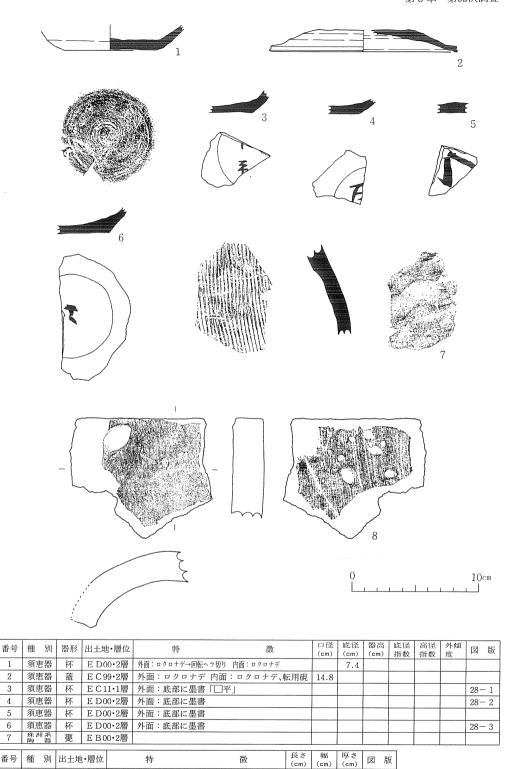
# 第4節 小 結

# 1 外郭南門について

第92次調査では、史跡管理団体仙北町による「ふるさと歴史の広場事業」に伴い、外郭南門を含む外郭区画施設を東西約100mにわたって調査した。

外郭南門は第7次調査での認識どおり、建て替えのない、1時期のみの造営である。今回、棟通り中央2本の柱掘形の深さは他の掘形に比べて浅く、柱の遺存状態も良くないことが明らかとなった。この2本の柱掘形が浅い傾向や、柱を欠く構造は、政庁及び内郭の東・西・南門に共通する現象である。このことは、この2本の柱は直接に棟を受けて屋根の重量を支えるための柱としては大きな意味を持たないことを意味するのではあるまいか。門の構造は通常の八脚門とは異なって、二階部分を有する櫓門である可能性が高いと考えられる。

足場組柱穴の深さが浅いことや、SA1027角材列の布掘り底面が門に近付くにつれてしだいに上がっていることは、門の周辺は後世にかなりの削平を受けており、古代においては一段高い地点を選地するか、あるいは基壇を造成していたことも推測される。

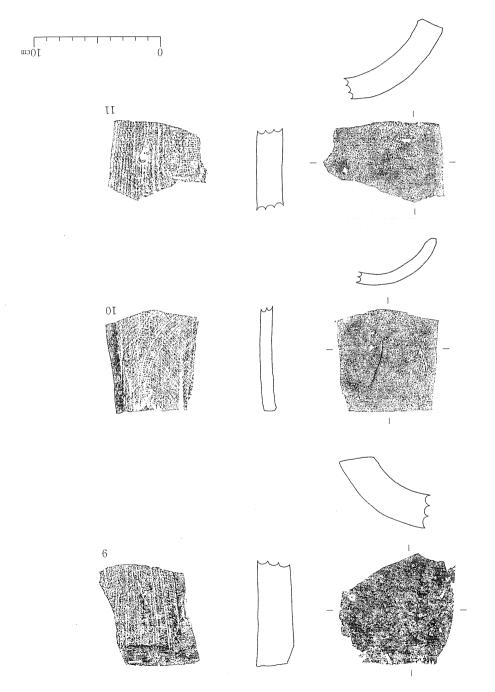


 瓦 DT98·2層
 凹面:布目痕
 2.5 28-4

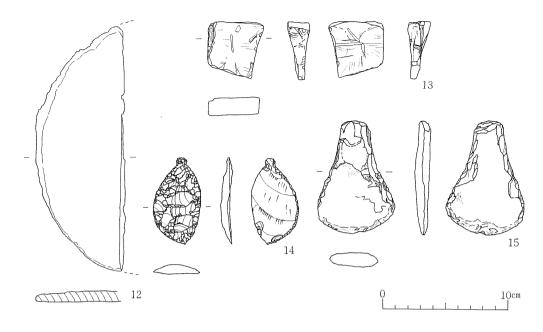
 第21図 遺構外出土遺物 (1)

第22图 遺構外出土遺物(2)

۷ -	-82	1.2				真目亦:面凹	E B 80.5圖	U	74	II
9 -	-82	0.1				頭目亦:面凹	E D 86.5陽	U	¥	OΙ
g -	-82	8.2				頭目 第 : 東 目 東	E D 80.5圖	U	¥	6
¥	X	유面 (mo)	丽) (ma)	호 (mp)	凰	针	<b>☆園・</b> 雌土出	118	郵	台果



払田柵跡調査事務所年報1992



番号	種	別	出土地•層位	特	徵	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	図版
12	曲物	底板	F G 99・3層					0.9	28-8
13	砥	石	EC01·2層	四面使用		4.5	1.8	1.4	28-9
14	石	匙	EB09·1層		1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	7.0	1.0	0.8	28-10
15			E C 01 · 2層	刃部を研磨		9.0	6.1	1.2	28-11

第23図 遺構外出土遺物(3)

## 2 外郭線角材列について

外郭線角材列も外郭南門と同様に建て替えは行われていない。外郭線の南側11mまでを調査したが、この間に堀は検出されなかった。また、調査範囲の門の東側18.5m、西側68mの間に櫓は付設されておらず従前の認識どおり、これらは伴わないと見てよい。

外郭線は門を含めて建て替えがなく、存続期間は内郭線に比べて短い。そのことは第88次調査で外郭線東辺の角材列の上に約1mの砂礫層が堆積している事実があり、その堆積年代がSL1035の川底の砂礫層の堆積年代と符合すると考えられることや、第92次調査のCトレンチにおいて、既に基部のみとなった角材が川底に横倒していたことなどからも裏付けられよう。川底の砂礫層出土土器は回転へラ切り技法がほぼ消滅し、須恵器の占める量も少なくなった段階で、大きく見て9世紀末~10世紀前半代と推定される。この頃には既に外郭線は機能していなかったと考えることができる。

外郭南門の両脇の角材と、それより離れた角材では角材一辺の幅に明瞭な違いがある。門東側のSA1027は平均 $29.5 \times 24.6$ cm、西側に連続するSA1028は $28.7 \times 24.8$ cmであるが、河川跡を挟んだSA1032は $25.8 \times 21$ cmと一回り小さく、その違いは計測によらずとも明確に知ら

れるほどである。外郭南辺の角材列を広く調査した第30次調査での角材の大きさを見ると、本年調査区の西方にある30-2 地点での平均値は $20.8\times17.7\mathrm{cm}$ 、さらに西にある30-4 地点、30-5 地点では、それぞれ $25.4\times23.4\mathrm{cm}$ 、 $19.8\times16.3\mathrm{cm}$ である。また、外郭東辺での大きさをも上回っている。これらと比較すると外郭南辺では、門の両側の位置は際立って幅の広い角材を使用していることが明らかである。SA1027と1028自体の中では門に近いほど角材が大きくなるというわけではないが、角材の高さも門に近い所は高く、門から離れるに従って低くなる構造となっていた可能性はあろう。このことは内郭の4門の両側が八の字形に入り込み、左右対称に櫓状建物や柱列が付設されたり、北門を除いて築地土塀より一段と高い位置に造られ、その両側に取り付く角材列や石塁が、門に近付くにつれてせり上がった構造になっていたと考えられて、多分に装飾的効果を持つ構造となっていることにも共通する事象であると考えられる。外郭東門・西門でも角材に同様の現象があるのか、今後検討する必要がある。

角材の地表からの高さ、上部構造、構築方法は依然として不詳である。しかし、角材の底面の高さが一定ではなく、高低差を有し、礎板を重ねる場合があって、1 本づつ丁寧に建てたと考えられることや、1930年の調査で内郭線角材列が横倒しとなった状態が検出されていることは、その解明の大きな手掛かりとなろう。この時の報告書によれば、角材列がその内側あるいは外側に倒れた状態が2 箇所検出され、その中でも長い角材は $12\sim14$ 尺あり、上方に長さ1 尺 2 寸 $\sim1$  尺 6 寸、幅3 寸 $\sim4$  寸の貫穴を有するもののあることが記されている。角材の底面レベルの調整はこの貫穴に横板を通して、角材の横方向の連結、固定をはかるために貫穴の高さを揃えることを意図したことによるものではなかろうか。

外郭線角材列は昭和初年以降、これまで全て連続する区画施設と考えられて来たが、外郭内を流れる河川に関わって、創建時から作られていない部分があり、この部分には角材列に替わり得る施設の痕跡も見られなかった。河川跡の氾濫時の最大幅は第93次調査で約100mであることが判明したが、角材列が途切れる部分では、創建時の河川の湾曲と最終段階のそれとが一致していることから、外郭線創建時の川幅も最終段階の川幅と大きな違いはなく、おおよそ4~6mほどと推定される。この部分での防御性は弱いと考えられる。

外郭線の南門に近い位置でさえ河川に伴う開口部のあることは、外郭線東部で河川が柵内に流入する箇所と、本年調査区の西方で柵外に流出する箇所においても、同様の状態のあることが予想され、今後、外郭線上のこうした部分の探索が必要である。

西側の開口部については一つの予見を述べておきたい。外郭南辺角材列の確認調査を行った第30次調査によると、外郭南門の88m西の位置(今回調査区西端から20m西)から長さ32mにわたって角材列が確認されていない。また同じく外郭南門の西155mの位置(今回調査区の西端から87m西)から長さ44mにわたって同様の結果である。耕地整理前の様子を描いた『耕地

整理現形図』では、後者の間に北東から南西に流れる細い水路が描かれている。あるいはこの 間が角材列の開口部となっているのかも知れない。

城柵官衙遺跡における外郭線の機能として、一定の地域を区画して特定の地点以外からの出入りを規制し、外観をより威厳あるものにして、防備に十分機能するための必要条件を備えたものとされる。払田柵の外郭線にはこのように当初から門以外の開口部があり、櫓・堀も伴わないことは、防御的機能はさほど重視されていないと言えよう。外郭線が短期間で消滅することも、このことと軌を一にする現象であろう。

年輪年代測定の結果、角材は西暦800年、801年の伐採であることが判明した。これは1987年の外郭線東部を対象とした第73次調査で得られた西暦801年という測定結果に合致する。外郭線が9世紀初頭の創建であることは外郭線南辺でも追認されたことになる。

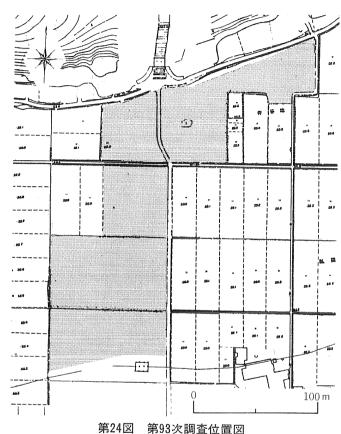
- 註1 文部省『史蹟精査報告 第三 拂田柵阯・城輪柵阯』1938 (昭和13) 年
- 註 2 秋田県教育委員会·払田棚跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1975 払田柵跡-昭和50 年度発掘調査概要一』 秋田県文化財調査報告書第40集 1976 (昭和51) 年
- 註3 秋田県教育委員会·払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1976 払田柵跡-第9・ 10次発掘調査概要-』 秋田県文化財調査報告書第44集 1977(昭和52)年
- 註4 秋田県教育委員会·払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1979 払田柵跡-第23~ 30次発掘調査概要-』 秋田県文化財調査報告書第75集 1980(昭和55)年
- 註5 秋田県教育委員会・払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1985 払田柵跡ー第60~ 64次発掘調査概要ー』 秋田県文化財調査報告書第139集 1986 (昭和61) 年
- 註6 秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田棚跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1986 払田 棚跡-第65~67次発掘調査概要ー』 秋田県文化財調査報告書第154集 1986(昭和62)年
- 註7 秋田県教育委員会·秋田県教育庁払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1990 払田 柵跡-第84~87次発掘調査概要-』 秋田県文化財調査報告書第216集 1991(平成3)年
- 註8 秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所『払田柵跡 I 一政庁跡ー』 秋田県文 化財調査報告書第122集 1985 (昭和60) 年
- 註9 秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1987 払田 柵跡-第68~73次発掘調査概要ー』 秋田県文化財調査報告書第168集 1988 (昭和63) 年
- 註10 秋田県教育委員会・払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1984 払田柵跡ー第55~ 59次発掘調査概要ー』 秋田県文化財調査報告書第121集 1985 (昭和60) 年
- 註11 仙北町教育委員会所蔵
- 註12 秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1991 払田 柵跡-第88~91次発掘調査概要-』 秋田県文化財調査報告書第225集 1992(平成4)年
- 註13 註1に同じ
- 註14 秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1988 払田 柵跡-第74~78次発掘調査概要ー』 秋田県文化財調査報告書第185集 1989 (平成元) 年

# 第4章 第93次調査

# 第1節 調査経過

仙北町では平成3年度から史跡 等活用特別事業による払田柵跡の 整備を開始し、ガイダンス施設と それに伴う駐車場の建設などを実 施した。次いで、今年度はそれら の範囲を除く20,772m²を対象と して、遺構保護を目的とした盛土 造成工事を計画した。この工事を 理由とした現状変更許可申請書が 6月3日、仙北町から提出され、 申請書は秋田県教育委員会を経由 して文化庁へ進達された。また、 この区域では外郭南門と内郭南門 を結ぶ大路の復原、その両側の張 芝、植栽なども計画している。

当事務所では、これら工事の実施に先立ち、大路の検出と遺構の存在確認を目的とする調査を第93



次調査として今年度の調査計画に組み入れ、発掘調査を実施したのである。

7月3日、第92次調査の補足調査と並行して調査を開始。7日からは重機を用いてトレンチ内の表土除去を始め、南側のトレンチから掘り下げを行った。土坑からは木製品や墨書土器が出土した。その後、各トレンチで河川跡の検出や、遺構の有無の確認に努めた。7月20日、表土除去終了。7月30日、奈良国立文化財研究所光谷拓実主任研究官より、外郭線角材列の中から年輪年代測定試料6点を採取していただいた。

FNライントレンチの東半部では全く遺物が出土しなかったが、西半部では包含層があり、 8月3日、土坑も検出された。18日には第35回顧問会議を開催し、調査・研究の顧問である秋 田大学新野直吉学長、国立歴史民俗博物館考古研究部長岡田茂弘教授に対し、第92・93次調査 の概要を説明するとともに現地で御指導いただいた。8月22日には第92次調査の現地説明会を 実施した。8月24日~26日にかけて、外郭南門の埋め戻し作業を行った。

9月2日、SL1035河川跡の川幅を特定すべく、北岸を探るためのトレンチを入れた結果、約100mの幅があることがわかった。翌3日には河川底部の砂礫層中から「小勝」と書かれた 墨書土器が出土。また、別地点から第1号漆紙文書も出土した。4日、北岸を探る作業中、河川内から10本の柱を検出、外郭南門と内郭南門を結ぶ線上にあることから、橋脚と推定された。 そこで、外郭南門の北方に河川の南岸を探るために、同様に深掘りをして南岸を確認したが、 ここでは橋脚は検出されなかった。11日、SB1048掘立柱建物跡を検出。この後、内郭南門南側のトレンチの掘り下げを行った。トレンチ全体に遺物包含層や火山灰層の薄い堆積があるが 大路の側溝は見当たらなかった。6日、橋脚のうち最も南端にある柱を断ち割り、写真撮影、 実測後に抜き上げを行った。その後、トレンチの土層断面図作成などを行って、資材の撤収作業を完了したのは10月20日である。

# 第2節 検出遺構 (第3図)

調査区は第92次調査の北に連なる標高33mの休耕田である。外郭南門と内郭南門を結ぶ大路の検出が本調査の主たる目的であるが、第92次調査において河川跡が検出され、大路には橋の存在が予想された。そこで、この河川跡の流路と幅員の把握と橋の検出も調査目的に加え、トレンチ方式によって南から北へ調査を進めた。

調査の結果、掘立柱建物跡1、橋脚1、河川跡1、溝4、土坑8、その他の遺構3の計18遺構を検出した。

### 1 十層概説 (第25図)

EHライントレンチ:外郭南門の北にあり、中央部が第7次調査で調査されていて、嘉祥二年の年紀ある木簡を出土したSK60土坑などがある。今回もSK1033・1034土坑が検出された。東部では地山粘土層の上に黒色の遺物包含層があって土器が出土した。SK60土坑より西では地山粘土層が次第に下がり、スクモ層や砂層が互層となっていて、縄文土器・石器が出土し、無遺物層が介在して古代の遺物包含層はその上にある。古代以前から湿地状の窪地となっていたのであろう。古代の包含層からは須恵器や瓦が出土した。

ELライントレンチ: このトレンチも第7次調査で中央部が調査されている。東端部にSD 1039があり、その西には自然の浅い落ち込みがある。西方の $10\sim12$ ライン付近には火山灰や炭化物が広く分布し、これらに伴う形で土器が比較的多く出土した。これより西はSL1035河川

跡の範囲内にあり、河川内に土砂が堆積した後に浅い窪みとなっていたと考えられる。

G J ライントレンチ; S L 1035河川跡の北にあり、耕作土の下は黒褐色、暗褐色の極めて粘性の強い粘土が水平に堆積し、遺物はほとんど出土しない。トレンチ西半部は宅地で、厚さ40 cmの盛土がなされている。黒色土中から土器が少量出土したが、遺構は検出されなかった。

HC ライントレンチ: トレンチ西部に掘立柱建物跡や溝が検出されたが、中央部から東側にかけては遺物は出土するものの、遺構の検出はなかった。表土を除き、全体に極めて粘性の強い粘土が水平に堆積する。遺物包含層はオリーブ黒色土で厚さ $10\sim20$ cmあり、この中に厚さ $2\sim3$ cmの火山灰を挟む。これより下位は灰色やオリーブ黒色の粘土で、遺物は出土しない。トレンチ西端部で漆紙文書が出土したのもこの遺物包含層からである。西側は旧宅地のため、厚さ $30\sim60$ cmの盛土がなされている。

HK ライントレンチ:全体に黒色土や褐色土が水平な堆積を示すが、墓地との関係からか一部に近年の掘り込みがある。東端部では畑に最大60cm盛土がなされている。古代の遺物包含層は厚さ $10\sim40$ cmで、全体に存在するが、西部では遺物はほとんど出土しない。火山灰はごく一部に厚さ5cmほどに堆積が見られる。最下層は縄文土器を含む黒色土で、殊にトレンチ東部から縄文土器が出土する。S K1052もこの時代の遺構であろう。

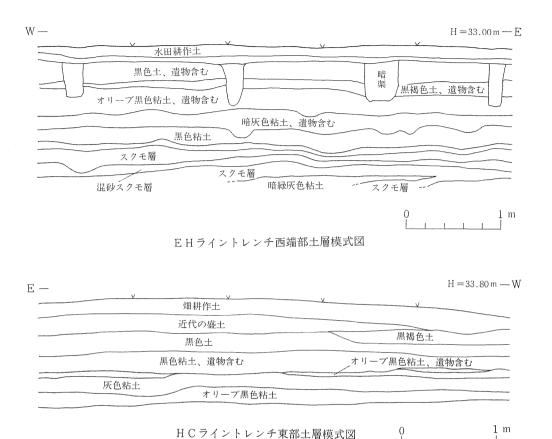
FNライントレンチ: このトレンチは大路の他の遺構確認を目的として西へ長く設定し、西方では耕作土のすぐ下から土坑やその他の遺構を検出し、遺物も出土したが、東半部では遺構はなく、遺物もほとんど出土しなかった。後にSL1035河川跡の北岸を探るために深掘りを行ったところ、トレンチ中央部で北岸を検出し、それ以東は河川跡の中に入っていることがわかった。河川跡は深さが水田面から2.5~2.9mあり、川底の砂礫層は最も厚い所で約1 mである。砂礫層は一様ではなく、砂混じり粘土層が最下層の堆積層となっている部分もある。その上に砂層・粘土層があり、粘土層の中に厚さ 2~3 cmの火山灰層が水平に堆積している。

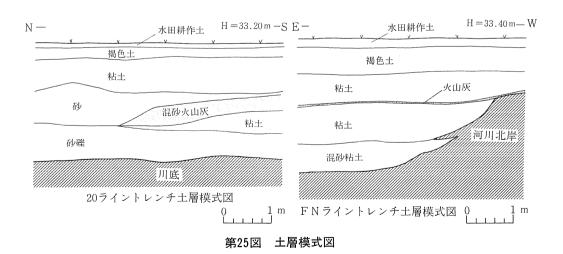
20 ライントレンチ: S L 1035 の北岸を探るため、南北方向に設定したトレンチである。水田面から川底まで2.6mの深さがある。川底はほぼ平坦であるが、その上に堆積する砂礫層・砂層・粘土層は起伏が大きく、砂礫層の厚さは10~80cmにわたる変異がある。火山灰層は主にトレンチの南部において水流によって砂と細かい層理をなす。最終段階の河川跡は幅7 mあり、その上にも青灰色粘土が10~60cmの厚さにかぶさっている。

## 2 遺構と遺物

- (1) 掘立柱建物跡 (第26図, 図版16·17)
- ① SB1048

東西2間、南北2間以上の掘立柱式建物で、建物の北側はトレンチ外へ延びている。柱掘形





は長軸80~100cm、短軸60cmほどの楕円形を呈し、深さ80cm、検出した掘形の全てに直径20~25cmの丸柱が残る。東側の南から2番目の柱は下部に目渡孔があり、柱の下に厚さ3cmほどの礎板を置く。東西方向の総長は5.30m(東から2.55+2.75)で、南北方向の柱間は2.60mである。建物方位は南側柱列で見ると、調査南北基準線に対しN84°Eである。建て替えはない。建物の南東隅柱は、内郭南門と外郭南門とを結ぶ中軸線より約7.6m西に位置する。建物の東西両側に火山灰が厚さ2cmほど堆積しているが、建物との新旧関係は必ずしも定かでない。しかし、火山灰降下よりも古いSK1050の埋土と本建物の柱掘形の埋土はほとんど同一であるので、本遺構もSK1050同様に火山灰降下より古い時期の構築かと推定される。建物の西に楕円形の掘形を有する柱が2本あるが、この建物との関係は不明である。柱掘形から遺物は出土しなかった。

## (2) 橋 脚

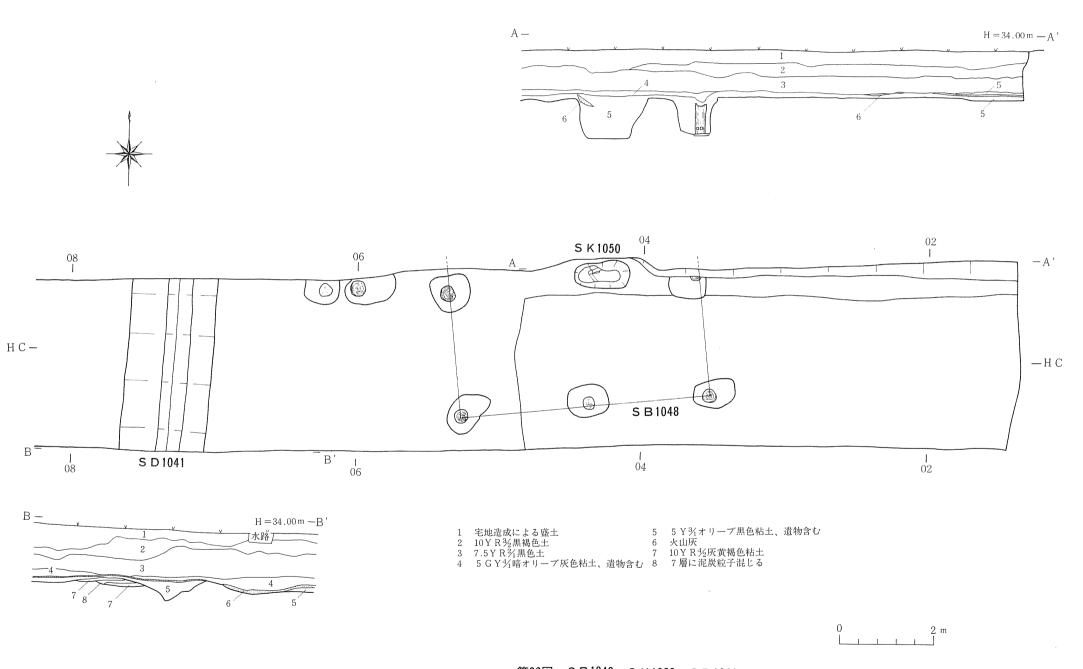
## ① S X 1049 (第27図, 巻首図版10, 図版18~20)

東西方向に設定したFNライントレンチで、SL1035河川跡の北岸を探るために重機で深掘りをしたところ、河川敷内に立つ10本の柱を検出した。直径50cmほどの太さの柱が4本あり、東西3.3m、南北7mの間隔に並び、他に、直径25~30cmほどの丸柱や角柱が6本ある。細めの丸柱と角柱は杭ではなく、その下端も砂利層の上で止まっている。南端にある直径50cmの柱は、残存長2.5mのスギの杭で、川底の粘土層に約1m打ち込んでおり、わずかに東に傾いている。河川の土層は下から川底の砂礫層、砂層、粘土層で杭の上方に火山灰を含む粘土層がある。杭の掘形はなく、これらの土層は杭を打ち込んだ後に河川の流れによって堆積したものである。砂礫層からは他のトレンチと同様の時期の土器が出土する。これらの柱の位置は、外郭南門と内郭南門を結ぶ線上にあることから、大路は直線で、それに伴う橋脚と考えられる。橋桁・梁・橋板などの部材は出土していない。精査は平成5年度に行う予定である。

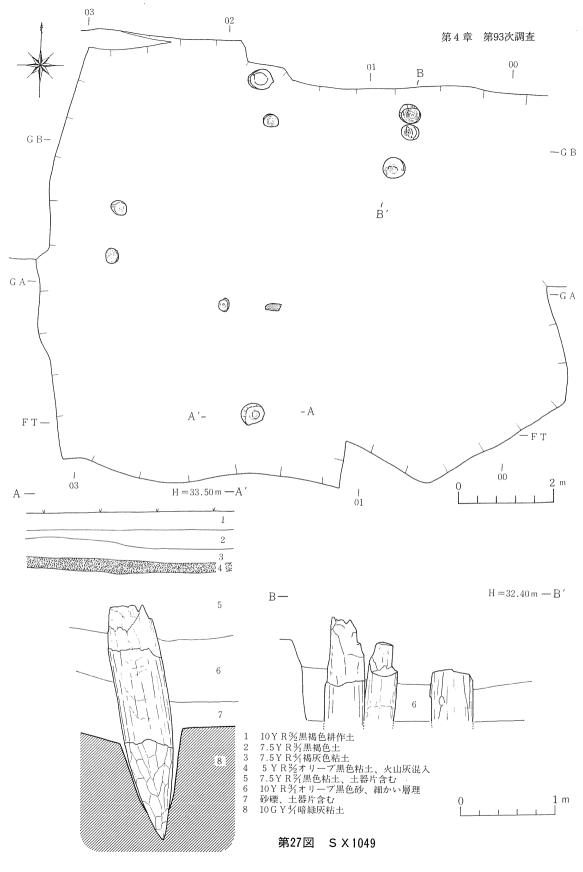
## (3) 河川跡

#### ① **SL1035** (第3·25·28~34図, 図版15·29~31)

第92次調査で、その南岸の一部を検出した河川跡の幅員を探ることを目的に、重機を用いて深掘りを行った。方法はユンボによって川底の粘土層まで下げ、砂礫層の分布を追跡し、砂礫が消える所を川岸とした。砂礫層中には遺物が多く含まれるので可能な限り採集に努め、必要に応じて土層断面図を作成した。その結果、南北方向に設定した20ライントレンチでその北端に、東西方向のFNライントレンチでその西端に、さらにGAライントレンチとGIライントレンチの中間で河川の北岸を検出し、河川敷の南北幅は最大100mあることが判明した。



第26図 SB1048、SK1050、SD1041



20 ライントレンチでは、川底まで現水田面から2.60mあり、川底の砂礫層は厚さ80cmに達する。その上に堆積する砂層の中に火山灰と砂が交互に細かい層理をなして最大約40cmの厚さに挟在する箇所がある。火山灰降下時の川の流れを示すものであろう。トレンチ北端に東西に流れる最終段階の河川跡があり、幅6.9mある。この最終段階の河川跡の上面から川底までは1.8mある。FNライントレンチでは、川底まで現水田面から2.5~2.9mあり、砂礫層は最も厚い所で1mの層厚がある。川底から1.5m上位の粘土質土層中に厚さ2~3cmの火山灰層が水平に堆積している。この他のトレンチ内で検出した最終段階の河川跡は幅4.5~7mほどで最大幅100mの河川敷内を大きく蛇行しながら東から西へ流下する。

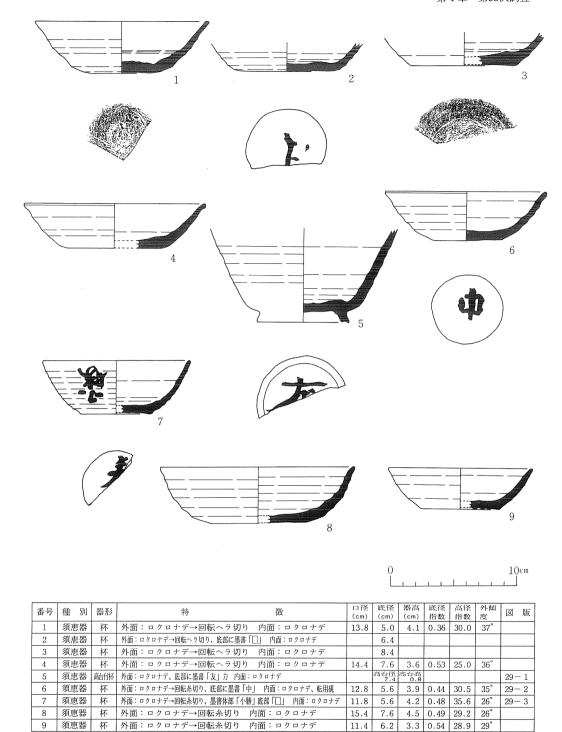
外郭線角材列が途切れる部分においては、その創建時に存在した南岸部分に重なる形で最終 段階の河川が流れており、このことから、創建時に存在した川幅も最終段階の川幅とほぼ同規 模で、同じように緩やかに大きく蛇行する流路となっていたと推定される。

遺物は砂礫層中から出土した(第28~34図)。火山灰層はこの砂礫層の上にある砂層や粘土層に挟在するので、遺物はすべて火山灰降下前の年代を示す。1~19は須恵器杯で、5 は高台が付く。このうち1~5 までは底部切り離しが回転へラ切りである。他は回転糸切り痕りによる。2・5~7・16~19は墨書土器で、5 は「友」か。6 は「中」、7 は体部に「小勝」、底部にも墨書がある。16~19は不明である。19は内面に書かれる。須恵器杯で回転へラ切り痕が明らかなものは、他に小破片が4 点あるにすぎない。須恵器の破片では長頸壺の頸部、肩部、甕胴部がある。20~23は底部切り離しが回転糸切りによる土師器で、内面に黒色処理を施す。20・21の底部周縁には手持ちヘラケズリによる再調整を施す。24~44は底部切り離しがすべて回転糸切りによる土師器杯である。体部はやや丸みを帯びるか直線的となる。39は口縁部が大きく外反する特徴がある。41~44は体部に墨書があり、41は「力□」42は「□」、43は「厨」、44は則天文字の影響による特殊文字「九」か。45はカマド用支脚である。破片では内面に黒色処理を施した高台付杯、甕口縁部、丸底でタタキメのある底部がある。46~50は斎串で、50の両側縁には等間隔の刻みがある。51は串である。他に檜扇(52・53)、木錘(54)、えぶり(54)、曲物の箍(55)が出土した。

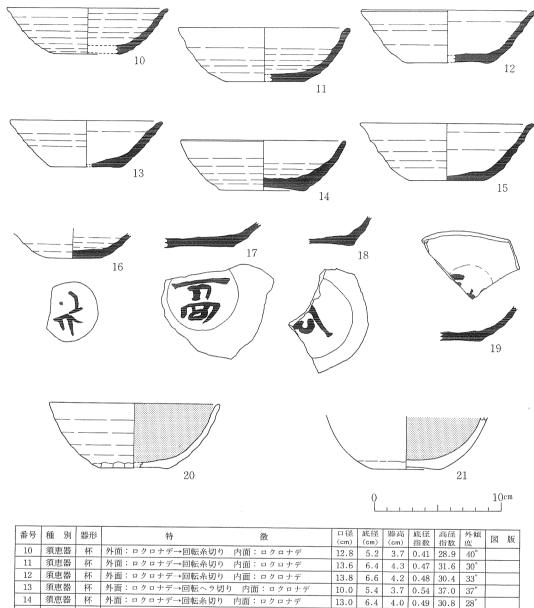
## (4) 土 坑

① SK1033 (第35~38図, 図版21・33)

EG98・99グリッドにあり、長軸1.85m、短軸1.55mの楕円形で、深さ約20cm、底面は平坦である。東端の坑底に須恵器長頸壺が置かれ、その西側に直径3~5cmの杭が南北に3本並んで打ち込まれていた。埋土中から、須恵器杯、斎串・箸・曲物蓋・曲物の樺皮紐・曲物側板の断片・削屑などの木製品が混然となって出土した。



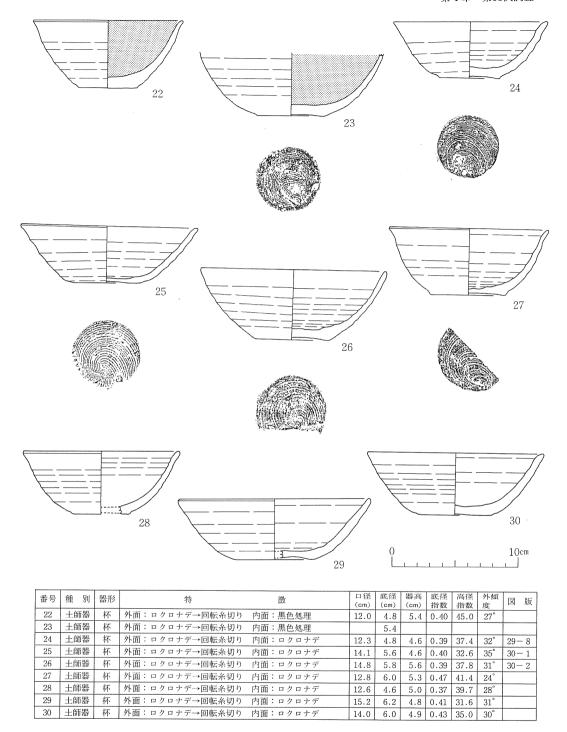
第28図 SL1035砂礫層出土遺物 (1)



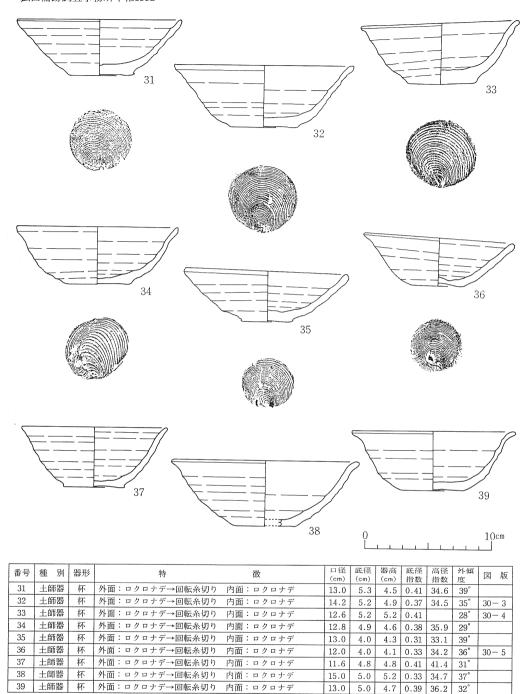
番号	種別	器形	特 徵	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数	高径 指数	外傾 度	図	版
10	須恵器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ	12.8	5.2	3.7	0.41	28.9	40°		
11	須恵器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ	13.6	6.4	4.3	0.47	31.6	30°		
12	須恵器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ	13.8	6.6	4.2	0.48	30.4	33°		
13	須恵器	杯	外面:ロクロナデ→回転ヘラ切り 内面:ロクロナデ	10.0	5.4	3.7	0.54	37.0	37°		
14	須恵器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ	13.0	6.4	4.0	0.49	30.8	28°		$\neg$
15	須恵器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ	13.8	6.0	4.5	0.43	33.0	34°		
16	須恵器	杯	外面:底部に墨書「□」							29-	4
17	須恵器	杯	外面:底部に墨書「□」			***************************************				29-	5
18	須恵器	杯	外面:底部に墨書「□」							29-	6
19	須恵器	杯	内面:底部に墨書「□」							29-	7
20	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り→手持ちヘラケズリ 内面:黒色処理	13.4	5.6	4.2	0.42	31.3			÷
21	土師器	杯	外面:ロクロナデ→切離し不明→手持ちヘラケズリ 内面:黒色処理		5.0						$\neg$

第29図 SL1035砂礫層出土遺物(2)

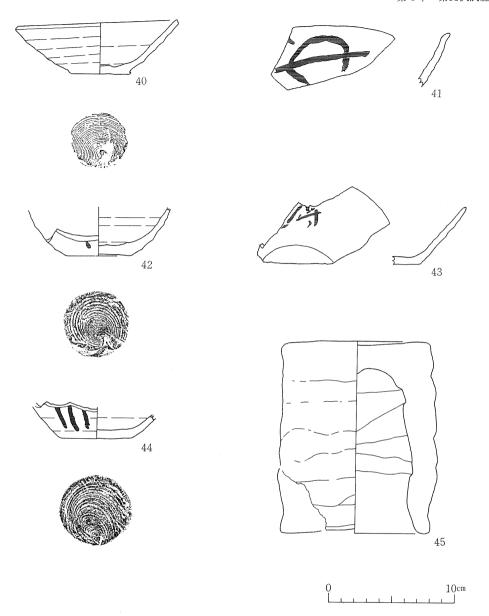
第4章 第93次調査



第30図 SL1035砂礫層出土遺物 (3)

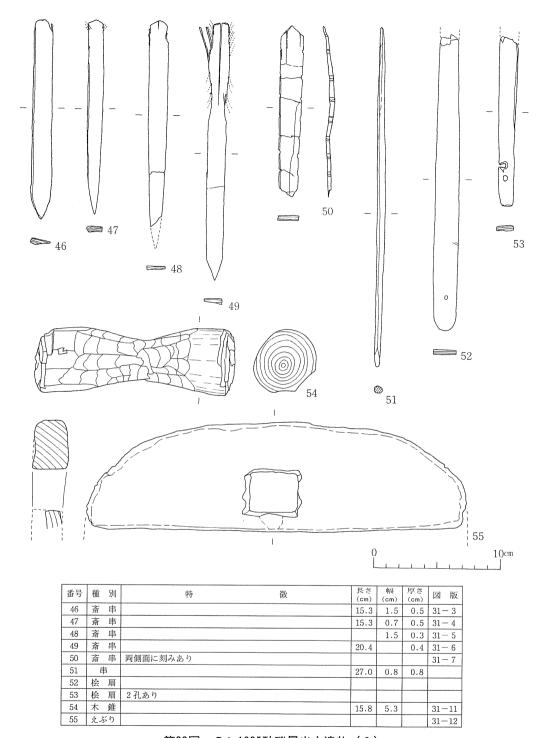


第31図 SL1035砂礫層出土遺物 (4)

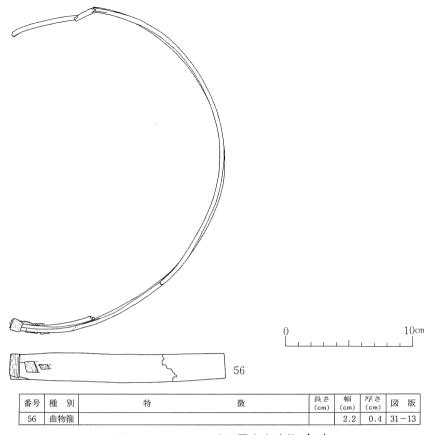


番号	種 別	器形	特 徵	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数		外傾 度	図版
40	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ	13.0	4.6	4.4	0.35	33.8	39°	30 - 6
41	土師器	杯	外面:墨書「カ□」							30 - 7
42	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り、体部に墨書「□」 内面:ロクロナデ		5.2					
43	土師器	杯	外面:体部に墨書「厨」							30 - 8
44	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り、体部に墨書「爪」カ 内面:ロクロナデ		5.5					31 - 1
45	カマド 用支脚		粘土細巻き上げにより成形	11.8	11.7	15.3				31-2

第32図 SL1035砂礫層出土遺物 (5)



第33図 SL1035砂礫層出土遺物 (6)

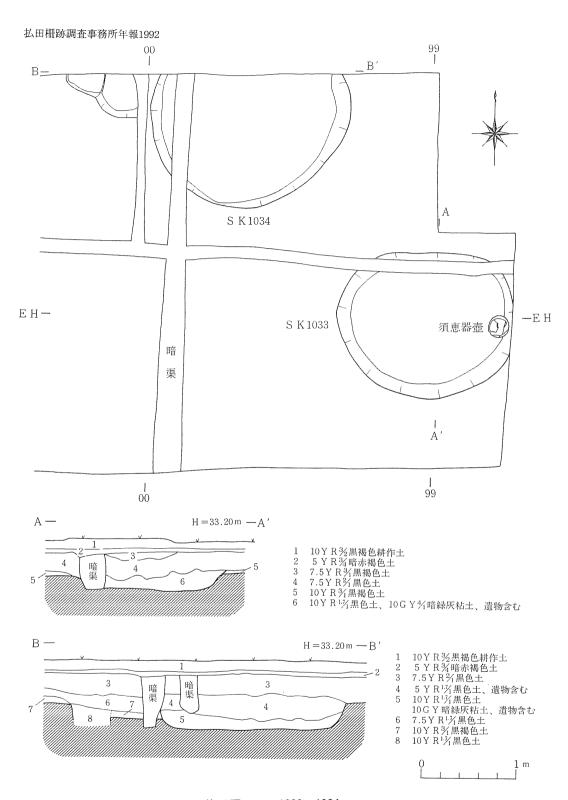


第34図 SL1035砂礫層出土遺物(7)

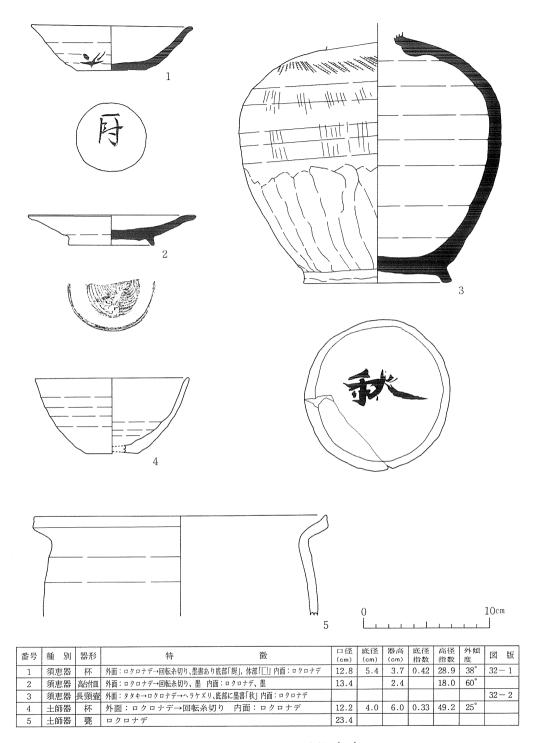
第36図1は須恵器杯で、底面に「厨」の墨書があるほか体部にも見られる。2は高台付皿で、内面を硯に転用している。3は土坑東端にあった長頸壺で、口頸部を欠くが、接合は二段成形であろう。底面に「秋」の墨書がある。4は土師器杯、5は土師器甕である。他に破片資料として須恵器では蓋・甕、土師器では内面黒色処理を施した皿・内外両面にタタキメのある甕が出土した。木製品では箸(第37図6・7)、斎串(8)、串(9~12)があり、13は先端が切っ先状に尖っていて刀形であろうか。14の木錘は縦に割れた材を利用している。曲物蓋(第38図15)、曲物底板(16)、挽物皿(17)も出土した。これらの他、曲物の樺皮紐(図版33-5)、削屑(図版33-6)、曲物側板の断片(図版33-7)、両端を切断した板(図版33-8)などが出土した。

## ② SK1034

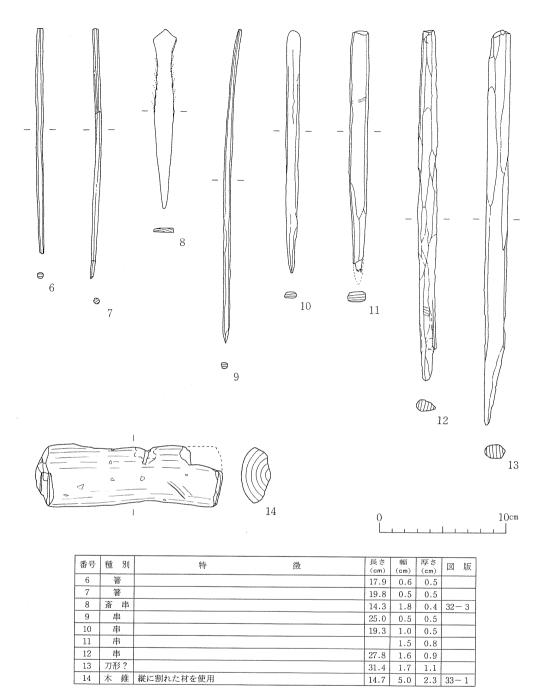
SK1033の北西に隣接する土坑で、最大径2.1mの円形を呈し、深さは35cmである。底面は平坦で、埋土中から須恵器杯や木製品が出土した。土器では須恵器杯(第39図1)、土師器杯(2)のほか、破片として須恵器杯・蓋・甕、土師器では内面黒色処理の施された杯・内外両面にタタキメのある甕底部、凸面に格子叩き目のある平瓦が出土した。須恵器杯の破片はSK



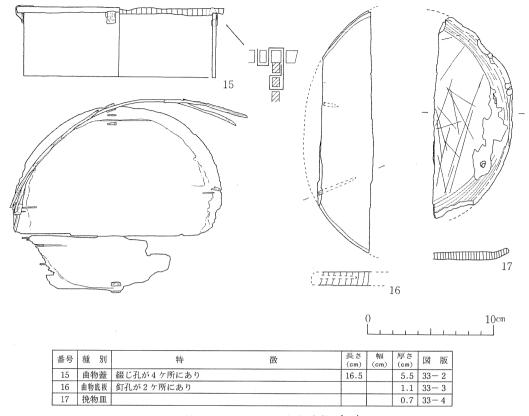
第35図 SK1033·1034



第36図 SK1033出土遺物(1)



第37図 SK1033出土遺物(2)



第38図 SK1033出土遺物(3)

1033出土の「厨」銘墨書のある土器に接合した。木製品としては斎串(3・4)、箸(5~7)の他、箸(図版34-3・4)、削屑(図版34-5)、曲物側板の断片が出土した。曲物の蓋板がSK1033出土の曲物蓋に接合した。両土坑は同時に作られたもので、遺物内容や出土状態も近似することから、同一の性格の遺構と考えられる。

## ③ SK1038 (図版40・41図)

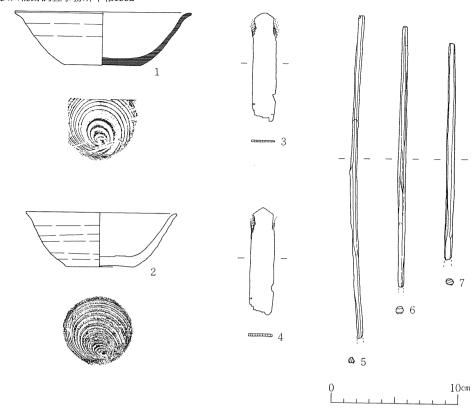
SL1035河川跡の北岸にある円形を呈する遺構である。直径2.08m、深さ26cm、底面は平坦である。

遺物は土師器杯(第41図)のほか、破片資料として底部切り離しが回転糸切りの杯、同じく回転糸切り痕のある甕底部が出土した。

## ④ SK1042 (第40·42図, 図版22·34)

SL1035河川跡の北岸にある楕円形を呈する遺構である。長軸1.95m、短軸1.63m、深さ16 cmである。

遺物は須恵器高台付杯(第42図 1)、土師器杯( $2\sim8$ )がある。8 には体部に墨書がある。 破片資料として須恵器では高台の付く壺・高台付杯・回転へラ切り痕のある杯、土師器では回



番号	種別	器形	特	徴	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数	高径 指数	外傾 度	図 版
1	須恵器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ	14.0	6.0	4.2	0.43	.30.0	39°	
2	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ	12.0	5.4	4.4	0.45	36.7	29°	34-1

番	号	種	別	特	徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	図 版
3		斎	串				1.9	0.1	34 - 3
4	4	斎	串				1.9	0.2	34-2
. 5	5	箸					0.6	0.6	
$\epsilon$	6	箸					0.6	0.6	
7	7	争	Ē				0.5	0.4	

第39図 SK1034出土遺物

転糸切り痕のある杯・甕口縁部・両面にタタキメのある甕胴部が出土した。

# ⑤ SK1043 (第40·43図, 図版34)

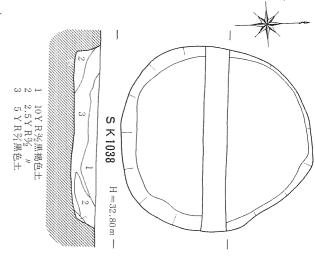
S K1042の西に位置し、楕円形を呈する遺構である。長軸 $1.84\mathrm{m}$ 、短軸 $1.42\mathrm{m}$ 、深さ $20\mathrm{cm}$ 、底面は平坦である。

遺物は土師器杯(第43図1~3)のほか、甕口縁部が出土した。

## ⑥ SK1044 (第40図)

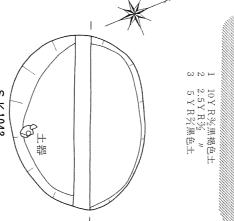
SL1035河川跡の北岸、SX1040の東に位置する、略円形の遺構である。直径1.58m、深さ15cm、底面は南側が幾分浅くなっている。

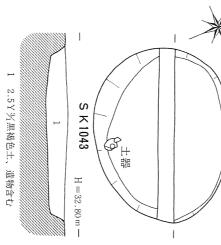
遺物は破片であるが須恵器では杯の口縁部、土師器では底部に回転糸切り痕のある杯・皿・

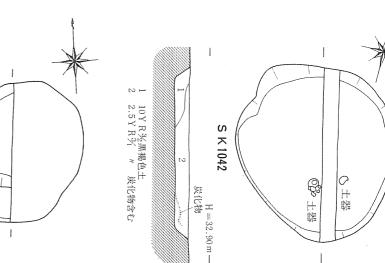


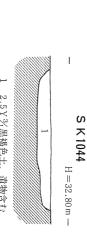
第4章

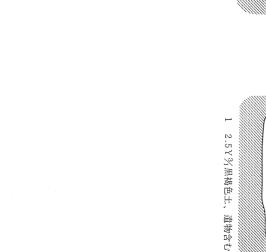
第93次調査











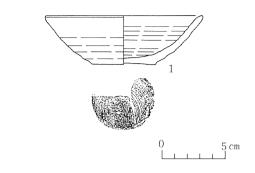
S K 1052

 $H = 33.00 \, m -$ 

甕口縁部が出土した。

### ⑦ SK1050 (第26図)

SB1048掘立柱建物跡の範囲内にあり、楕円形を呈する遺構である。建物と同一面からの掘り込みで、口径1.45m、底径85cm、深さ86cmである。底面は平坦で、下部に腐食した木片がある。埋土は掘立柱建物跡の柱掘形のそれと同一であるが、上部に火山灰層がレンズ状に斜めに入っている。火山灰降下よりは古い時期の遺構であろう。



番号	種別	器形	特	徴
1	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ

口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数	高径 指数	外傾 度	図	版
12.5	5.0	4.9	0.40	39.2	34°		

第41図 SK1038出土遺物

⑧ SK1052 (第40図)

調査区北端に位置する楕円形の遺構である。長軸1.60m、短軸1.48m、深さ26cm、底面はほぼ平坦である。遺構内から遺物は出土しなかったが、縄文土器を含む黒褐色土層からの掘り込みで、遺構周辺からは縄文中期初頭の大木7a式土器が出土しており、本土坑はこの時期の遺構と考えられる。

# (5) 溝

### ① S D 1036 · 1051 (第44図)

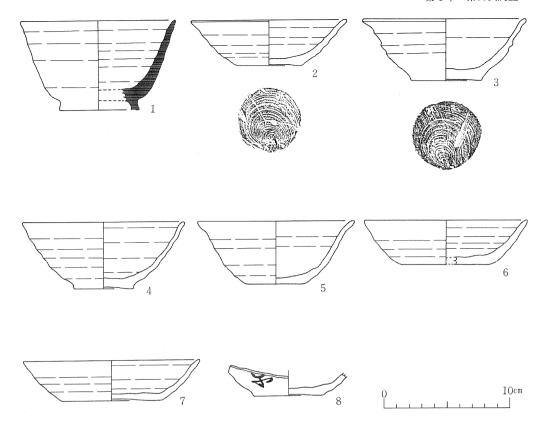
北東~南西方向に走る2条の溝で、長さ約31mを検出した。重複があり、SD1036を1051が切っている。上面幅1.1m、深さ28~35cmで、底部は丸みを帯びる。北部では一体となっているが、南半部では2本になり、同じように西方にカーブしている。溝の西側の一部に周囲よりも硬い面の拡がりがあった。溝の確認面は現水田面より約15cmほどと極めて浅く、SL1035の最終段階の河川跡や、その付近の遺物包含層を掘り込む。明治年間の耕地整理前の様子を描いた『耕地整理地区現形図』に見られる水路と、その西側にある道路に位置・方向がほぼ一致することから本遺構は明治時代の耕地整理前の用排水路と判断される。

### ② S D 1039 (第45図)

EL99グリッドにある南北方向の溝で、長さ2.9mを検出した。幅70cmあり、地山の粘土層を約5cm掘り込んでいる。北へ延びている。

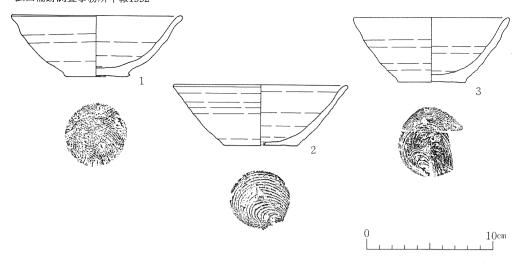
### ③ S D 1041 (第26図)

SB1048掘立柱建物跡の西にある南北方向の溝である。長さ3.6mを検出した。黒色粘土質



番号	種 別	器形	特 徴		口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数	高径 指数	外傾 度	図版
1	須恵器	副排	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ		12.4		7.1	高台高 0.8	高台径 6.4		
2	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ		12.4	5.2	3.6	0.42	29.0	39°	
3	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ		13.0	5.6	4.9	0.43	37.7	34°	34 - 7
4	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ		13.0	4.7	5.3	0.36	40.8	31°	
5	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ		12.5	4.4	5.0	0.35	40.0	31°	
6	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転へラ切り 内面:ロクロナ	デ	13.0	7.2	3.5	0.55	26.9	30°	
7	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転ヘラ切り 内面:ロクロナ	デ	14.0	7.8	3.2	0.56	22.9	38°	
8	土師器	杯	外面:体部に墨書「□」								

第42図 S K 1042出土遺物



- 1													
	番号	種 別	器形	特	徵	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数	高径指数	外傾 度	図版	7
- 1	7	土師器	杌	All art 1 - to 1 art restor (1 to 1)		(-111)	(0.11)	(OIII)	11:1 KX	7H 70X	152		╛
1	T	工制和	₩,	外面:ロクロナデ→回転糸切り p	内面:ロクロナデ	13.5	5.0	4.9	0.37	36.3	34°	34-9	1
-	2	土師器	抚	対面・ロカート 口生を切り	L					00.0		. 01 5	4
L	4	_L_Dth 4th	144	外面:ロクロナデ→回転糸切り p	勺面:ロクロナデ	14.0	5.8 [	4.8	0.42	34.3	36°		1
- 1	2	土師器	杯	ALTERNATION OF THE ALTERNATION OF	I and			1.0	0.12	01.0	50		╝
L	J	그그테이 전략	ተጉ	外面:ロクロナデ→回転糸切り 阝	勺面:ロクロナデ	12.4	5.4	5.2	0.44	41.9	28°		1
							0.1	0.2	0.11	71.0	40		- 1

第43図 SK1043出土遺物

の遺物包含層からの掘り込みで、上面幅1.8m、深さ45cm、断面は逆三角形である。埋土の上 に火山灰層が約2cmの厚さに堆積しており、火山灰降下前の遺構であることが明らかである。

# (6) その他の遺構

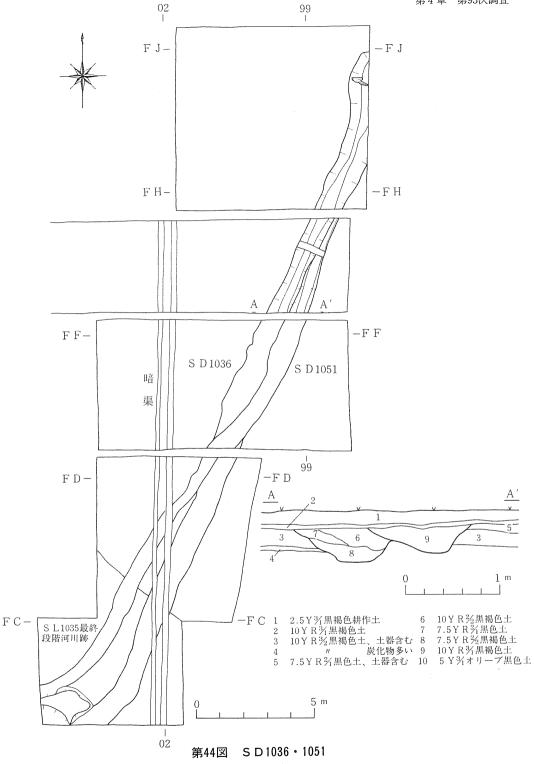
### ① S X 1040 (第46図, 図版23)

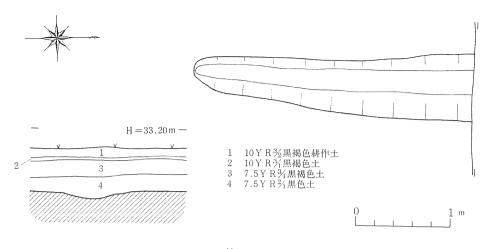
SL1035河川跡の北岸、SK1044の西に位置する、南北2.60m、東西1mほどの範囲の焼土・炭化物の拡がりである。北端部の径70cmほどの範囲が強い加熱を受けて焼けており、石が赤変している。焼土の中に骨粉が混じり、焼面の上に土器片が乗る。炭化物の拡がりは南に細長く延びている。

# ② S X 1045 (第46·47図, 図版23)

EN11グリッドにある、焼土と炭化物の拡がりである。焼土は主に東半部に見られ、厚さ6 cmほどで、この部分で加熱がなされている。その西に長軸80cm、短軸60cm、深さ20cmのピットがあり、中に黒褐色土と炭化物が互層をなしている。周囲には炭化物が極めて薄く広範囲に分布している。また、遺構と同一レベルに火山灰も分布する。本遺構はSL1035河川跡の上方まで砂や粘土が堆積した後の遺構である。

遺物は土師器杯(第47図1・2)・甕(3)、破片資料として回転糸切り痕のある杯、甕の 底部が出土した。





第45図 SD1039

# ③ S X 1046 (第46 · 48図, 図版34)

SL1035河川跡の北岸にあり、SK1043のすぐ西側に隣接する焼土と炭化物の拡がりである。 その拡がりの北端部に径40cmほどの石があり、この周囲50cmほどの範囲が強く加熱を受けている。焼土や炭化物を含む土層は厚さ約10cmほどで、この南西側に全体として $3 \text{ m} \times 1.5 \text{ m}$ ほどの範囲に分布している。

遺物は土師器杯(第48図1, 2)のほか、破片資料として須恵器甕の肩部・壺高台部、土師器杯・ケズリ調整のある甕胴部が出土した。3は管状土錘である。

# 第3節 遺構外出土遺物 (第49~63図, 図版35~42)

# 1 E H ライントレンチ出土遺物 (第49図)

 $1\sim 3\cdot 7\cdot 8$ はトレンチ西端部の湿地状落ち込みの上の、古代遺物包含層としてはほぼ最下層から出土した。  $1\sim 3$  は底部切り離しが回転糸切りの須恵器杯で、 2 は「矢」、 3 には「官」または「臣」の墨書がある。 7 は須恵器長頸壺である。 8 は棒状の木製品である。  $4\sim 6$  はトレンチ東端部の最下層から出土した、蓋・長頸壺の頸部である。

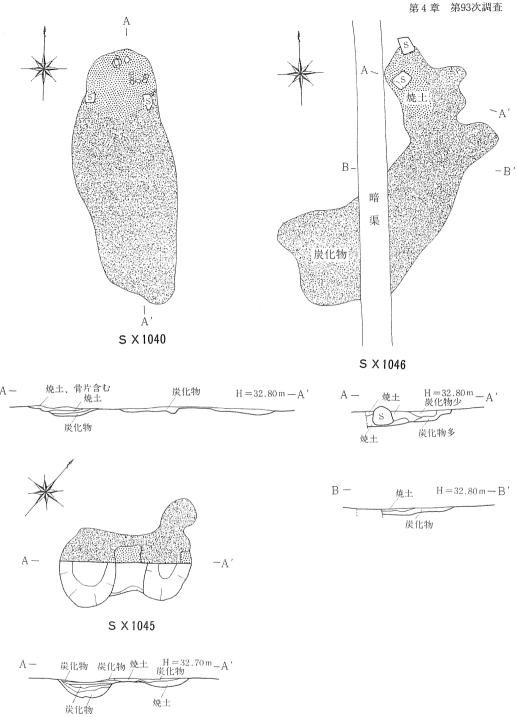
# 2 E L ライン・11 ライントレンチ出土遺物 (第50図)

 $1\sim6$  は土師器杯、7 は土師器高台付杯である。両トレンチの交点付近では火山灰に伴う形で土器が出土した。

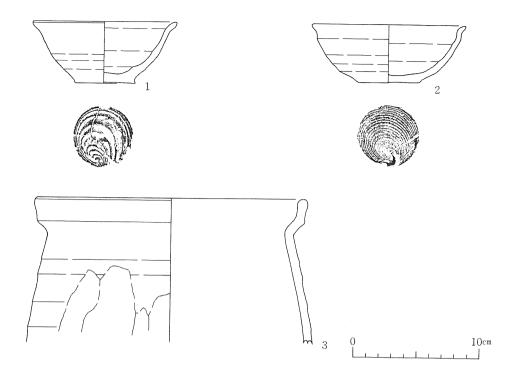
# 3 HCライントレンチ出土遺物 (第51~55図)

1~11はトレンチ東部で出土した遺物で、1は須恵器杯、2~8は土師器杯、9は土師器皿

1 m

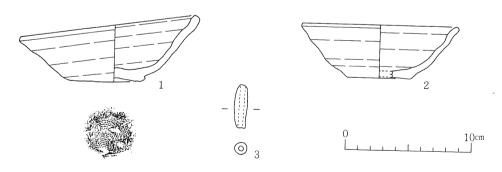


第46図 S X 1040 · 1045 · 1046



番号	種別	器形	特	徴	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数	高径 指数	外傾度	図	版
1	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ	11.4	4.8	4.9	0.42				$\dashv$
2	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ	12.2	4.6	4.6	0.38	37.7	27°		_
3	土師器	甕	外面:ロクロナデ、タテ方向に	ケズリ 内面:ロクロナデ	21.6							_

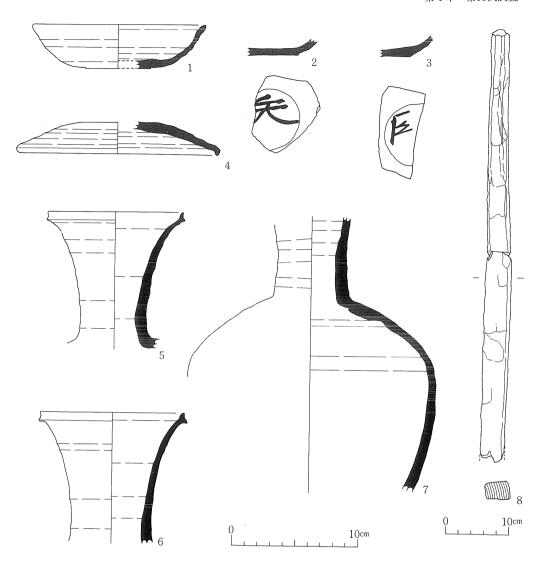
第47図 S X 1045出土遺物



番号	種別	器形	特 徵		口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数			図版
1	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ、籾痕あり		14.4	4.0	5.5	0.28			34-10
2	土師器	杯	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ		12.4	5.0	4.2	0.40	33.9	33°	
				Int sa	Acre	Part to					

番号	種	別	特	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	図	版
3	土	錐	孔の内径0.4cm	3.4	1.0			

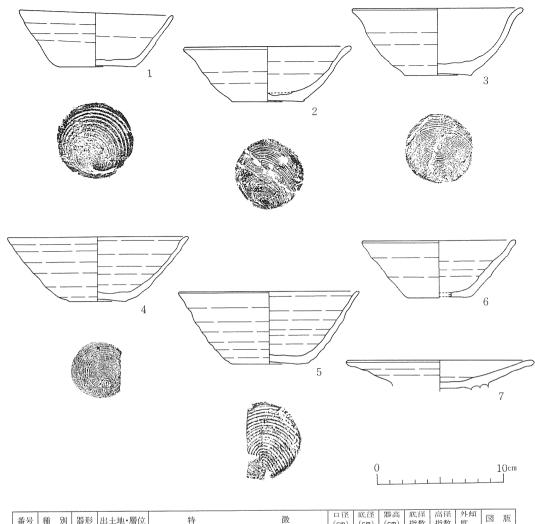
第48図 S X 1046出土遺物



番号	種 別	器形	出土地•層位	特	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数	高径 指数	外傾 度	図版
1	須恵器	杯	E H10・4層	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内面:ロクロナデ	13.8	5.2	3.5	0.38		32°	
2	須恵器	杯	E H10・4層	外面:底部に墨書「矢」 内面:転用硯							35-1
3	須恵器	杯	EG09·4層	外面:底部に墨書「官」または「臣」	ľ						35-1
4	須恵器	蓋	E G 99•4層	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	15.8						
5	須恵器	長頸壺	E G 99•4層	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	10.7						
6	須恵器	長頸壺	E H99·4層	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	11.4						
7	須恵器	長頸壷	E H11·5層	外面:ロクロナデ、肩部から下に釉が流れる 内面:ロクロナデ							

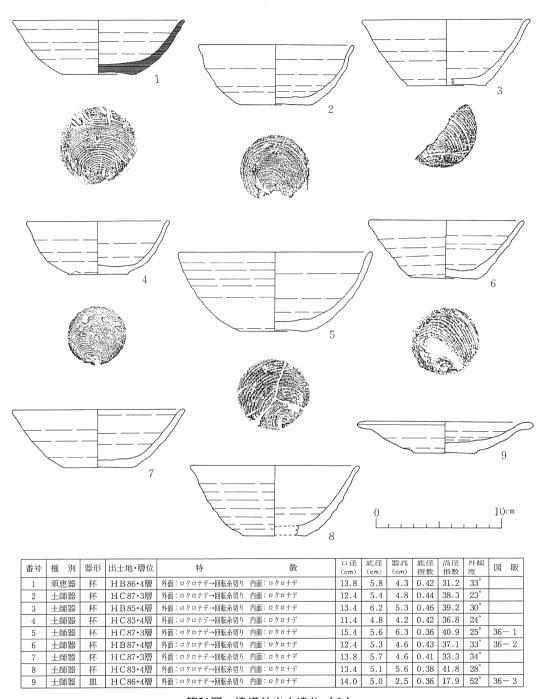
番号	種 別	出土地·層位	特	徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	図版
8	棒 状 木製品	EF11·4層				4.1	3.0	35 - 3

第49図 遺構外出土遺物(1)

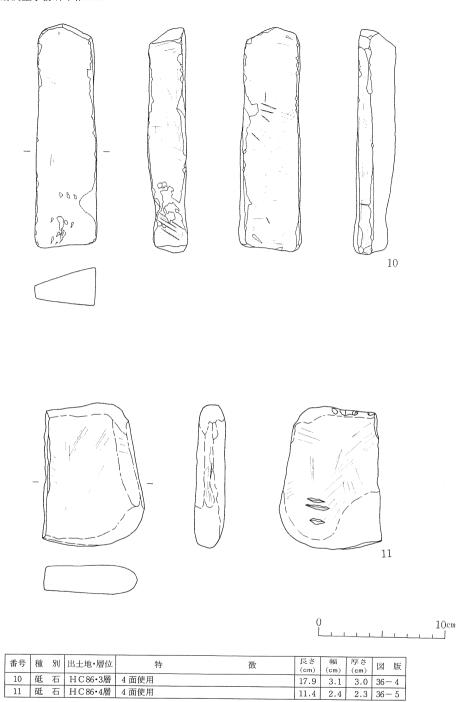


番号	種 別	器形	出土地·層位	特	徵	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数			図版
1	土師器	杯	E O 11・3層	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ	12.2	6.0	4.5	0.49	36.9	29°	35-4
2	上師器	杯	E M09・4層 火山灰に共伴	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ	13.4	5.6	4.4	0.42	32.8		35 - 5
3	土師器	杯	EM10·4層	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ	13.5	5.2	5.4	0.39	40.0	30°	
4	土師器	杯	EM10·3層	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ	14.4	4.6	5.1	0.32	35.5	37°	
5	土師器	杯	E M12・4層	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ	14.4	6.2	5.8	0.43	40.2	30°	
6	土師器	杯	E M12・3層	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ	12.2	5.0	4.5	0.41	36.9	35°	
7	上師器	高台付皿	E N11・3層	外面:ロクロナデ 内	面:ロクロナデ	15.0						35-6

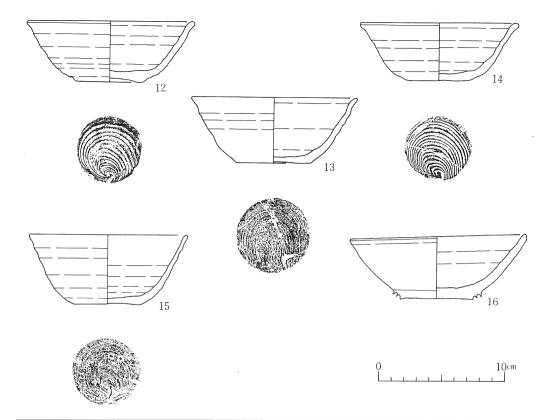
第50図 遺構外出土遺物(2)



第51図 遺構外出土遺物(3)



第52図 遺構外出土遺物 (4)

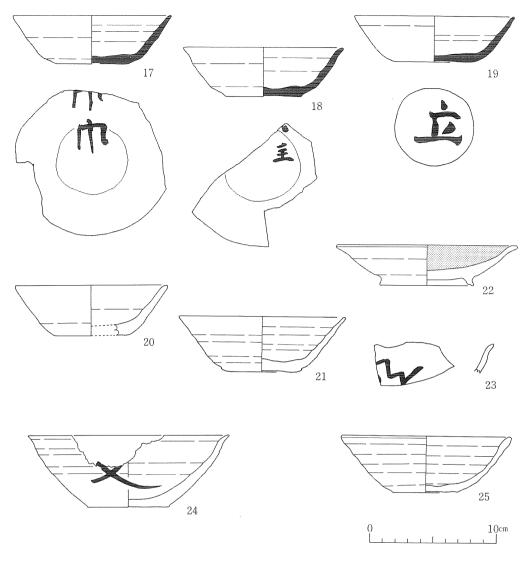


番号	種別	器形	出土地·層位	特	徴	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	庭径 指数	高径 指数	外傾 度	図版
12	土師器	杯	HC90・4層	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ	13.3	5.4	4.8	0.41	36.1	29°	
13	土師器	杯	HC90・3層	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ	13.2	6.0	5.2	0.45	39.4	27°	
14	土師器	杯	HC90・4層	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ	12.6	5.2	4.6	0.41	36.5	29°	
15	土師器	杯	H C 90・4層	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ	12.6	5.2	5.5	0.41	43.7	24°	35 - 7
16	土師器	高台作杯	H C 92・4層 火山灰上	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ	14.0						35 – 8

第53図 遺構外出土遺物(5)

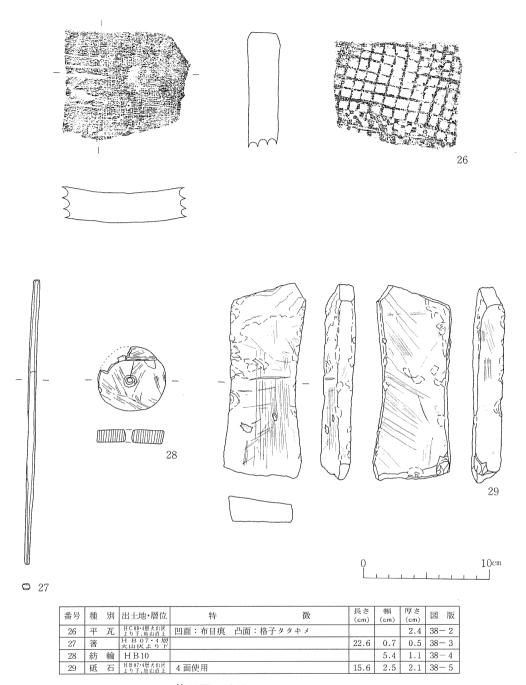
で底部切り離しは全て回転糸切りである。10・11は砥石である。12~16は1~11までの遺物よりは西方で火山灰に伴うか、その直上から出土した遺物である。12~15は土師器杯、16は土師器高台付杯で、いずれも底部切り離しが回転糸切りによる。第54・55図はトレンチ西端部火山灰よりも下位からの出土である。17~19は須恵器杯で墨書がある。17は則天文字の影響による特殊文字「爪」が重なる。18は底部に「主」の他、体部にも墨痕がある。19は「立」である。20・21は底部切り離しが回転へラ切りによる土師器杯、22は内面黒色処理された土師器高台付皿である。23には墨書がある。24・25は底部切り離しが回転糸切りによる土師器杯で、24の体部に墨書がある。平瓦(26)、箸(27)、紡輪(28)、砥石(29)も出土した。

漆紙文書(第56図)はトレンチ西端部の暗灰色粘土層から出土した。10.0×6.3cmの断片で、 ある。この層はトレンチ全体にあり、出土地点付近ではその下層は古代の遺物を全く含まない



	,		,									
番号	種別	器形	出土地·層位	特	徴	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数	高径 指数	外傾 度	図版
17	須恵器	杯	H B 08・4層 火山灰より下	外面:ロクロナデ→回転へ 字、「爪爪」 内面:ロク	ラ切り、墨書、則天文 ロナデ	12.6	5.8	3.9	0.46	31.0	32°	37-1
18	須恵器	杯	H C 08・4層 火山灰より下		: ロクロナデ	12.8	6.0	3.9	0.47	30.5	33°	37 - 2
19	須恵器	杯	HC08・4層火山灰 より下、地山直上	外面:ロクロナデ→回転系 「立」 内面:ロクロナデ	切り、墨書、底部に	12.8	6.2	3.7	0.49	29.0	33°	37 - 3
20	土師器	杯	H C 09・4層	外面:ロクロナデ→回転ヘラ切り	内面:ロクロナデ	12.2	6.0	4.0	0.49	32.8	32°	
21	土師器	杯	H B 07・4層 火山灰より下	外面:ロクロナデ→回転へラ切り	内面:ロクロナデ	13.2	5.8	4.4	0.44	33.3	34°	37 - 5
22	土師器	高台付皿	H B 08・4層 火山灰より下	外面:ロクロナデ 内面:黒色処理		14.4		3.2		22.2		37-4
23	土師器	杯	H B 08・4層 火山灰より下	外面:ロクロナデ、墨書「□」 阝	面:ロクロナデ							37 - 6
24	土師器	杯	HC07・4層火山灰 より下、地山直上	外面:ロクロナデ→回転糸切り、墨	書「□」 内面:ロクロナデ	16.0	6.4	5.7	0.40	35.6	35°	37-7
25	上師器	杯	H B 09・3層 火山灰より下	外面:ロクロナデ→回転糸切り 内	]面:ロクロナデ	13.5	5.1	4.5	0.38	33.3	35°	38-1

第54図 遺構外出土遺物(6)



第55図 遺構外出土遺物 (7)



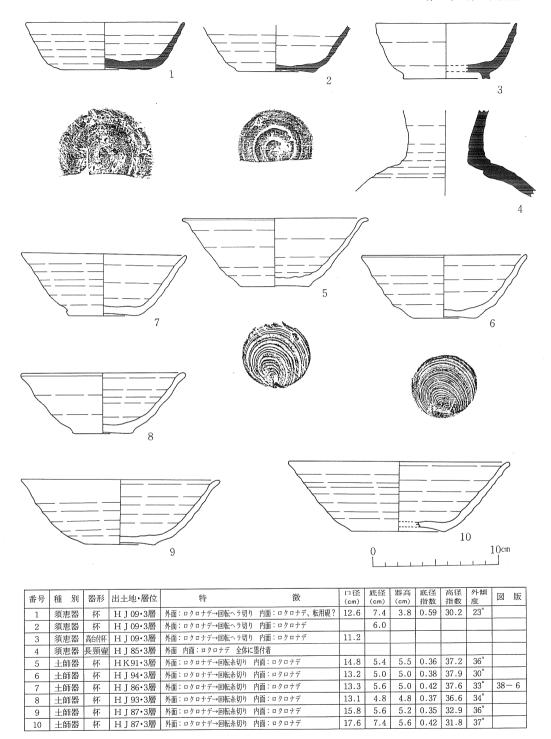
黒色土であるので、古代遺物包含層としては最下層からの出土である。ただし、このトレンチ 西端部には火山灰層は見られず、火山灰との新旧関係は不明である。伴出遺物は第54図20の土 師器杯が最も近い。平川南氏に釈読を依頼中である。

# 4 HKライントレンチ出土遺物 (第57・58図)

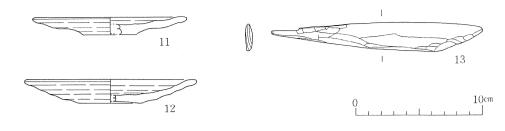
HC ライントレンチと同様に、トレンチ西端部から古手の土器が出土している。  $1 \sim 3$  がそれで、  $1 \cdot 2$  は須恵器杯、 3 は高台付杯である。底部切り離しはいずれも回転へラ切りによっている。他はトレンチ東部からの出土で、 7 は須恵器壺、  $4 \sim 10$ は土師器杯、 $11 \cdot 12$ は土師器皿である。 13は全体が丁寧に加工されたヘラ状の木製品である。

# 5 その他の遺構外出土遺物 (第59~63図)

須恵器杯( $1\cdot 2$ )、土師器杯( $3\sim 6$ )は、いずれも底部切り離しが回転糸切りによる。 7 は非ロクロの土師器小型甕である。  $8\sim 10$ は土師器杯で墨書があり、 8 は「上」、 9 は「就」であるが、10は不明である。瓦には凸面に渦巻叩き目のある平瓦(11)と丸瓦(12)が出土した。木製品のうち、13の串は先端が焼けている。14は断面がU字形を呈し、両端が欠損している。15も串であるが 1 孔があく。 $16\sim 19$ は曲物の底板であろう。20は下駄である。 $21\sim 24$ は砥石である。



第57図 遺構外出土遺物(9)



	番号	種 別	器形	出土地·層位	特	徴		口径 (cm)	族径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数			[3]	版
	11	土師器	M	HK91・3層	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ		12.2	4.4	1.4	0.36	11.5	69°		
	12	土師器	III.	H K 87·最下層	外面:ロクロナデ→回転糸切り	内面:ロクロナデ		13.6	4.8	1.9	0.35	14.0	62°		
Γ	「														

番号	種 別	出土地·層位	特	徵	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	図版
13	ヘラ状 木製品	HK88•3層			16.7	2.3	0.6	

第58図 遺構外出土遺物(10)

# 6 縄文時代の遺物 (第62図25~63図32)

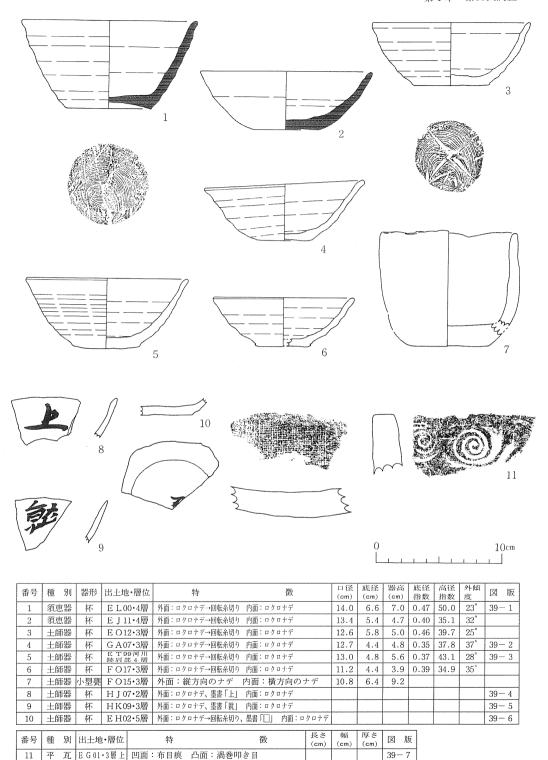
図示した土器は全て内郭丘陵に近いHJライントレンチからの出土である。25・26は中期初頭の大木7a式、27は木目状撚糸文があり円筒下層式であろう。28は中期末葉の大木9式、29は後期の十腰内II式である。石槍(30)はEHライントレンチ西端部の湿地状落ち込み付近の最下層黒色土から出土した。31は側縁を細かく抉り込み、刃部をもつ。32は両面に凹みがあり、一面を平坦に研磨する。火山灰より上位からの出土であるが、縄文時代の遺物であろう。

# 第4節 小 結

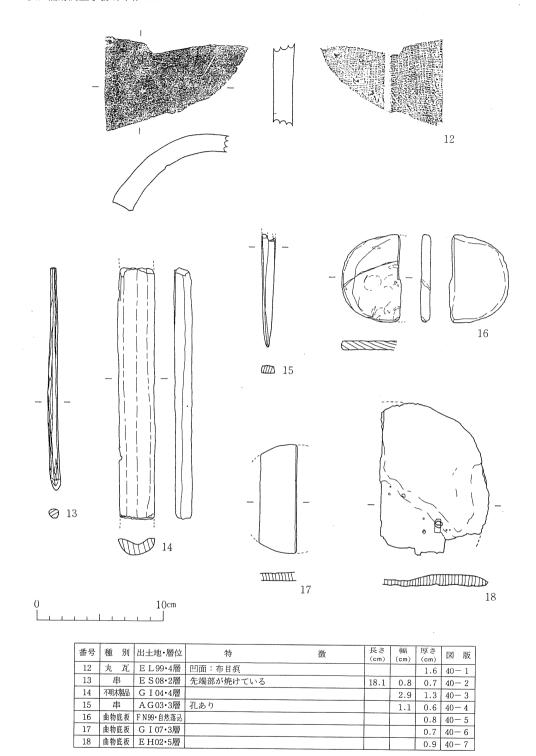
第93次調査は、外郭南門と内郭南門を結ぶ大路の検出と、その他の遺構の分布確認を目的として実施した。また、第92次調査において河川跡の存在が明らかとなったので、外郭内におけるその流路、幅員などを把握し、橋脚を検出することも、その目的の一つに加えた。

外郭内には東から西へ流れる河川が存在し、その最大幅は南北約100mあることがわかった。 川底の堆積層の年代は出土土器から9世紀末ないし10世紀前半代に納まる範囲と考えられる。 しかし、800年、801年を伐採年代とする外郭線角材列が、河川の流れを間において開口部を有 していることは、外郭線創建時にも河川が存在して、角材列が河川と接する部分にはあえて角 材列を造らなかったことになる。

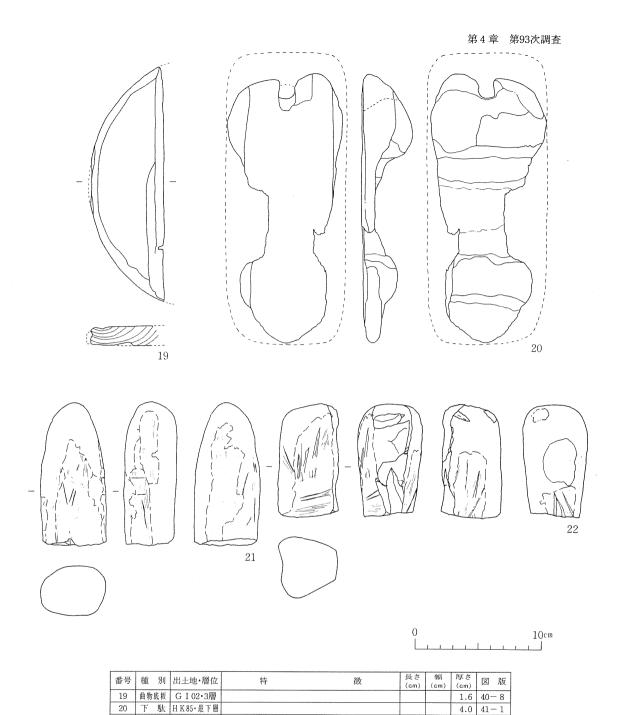
第92次調査の小結でも触れたが河川の変遷をたどると、河川は外郭線の創建時の9世紀初頭には存在し、その後も流下していたが、9世紀末~10世紀前半にかけて大きな氾濫があったり、川下の河道が変わるなどして、多くの砂礫層を堆積させる状況に変化し、河川敷は最大100mにも達したが、急激に堆積が進み、火山灰が降下した時点ではこの河川敷の大部分は砂や粘土



第59図 遺構外出土遺物(11)



第60図 遺構外出土遺物(12)



第61図 遺構外出土遺物 (13)

9.0 5.0

11.5 5.2 4.0 41-3

4.9 41-2

 石
 E H00·4層
 2 面使用

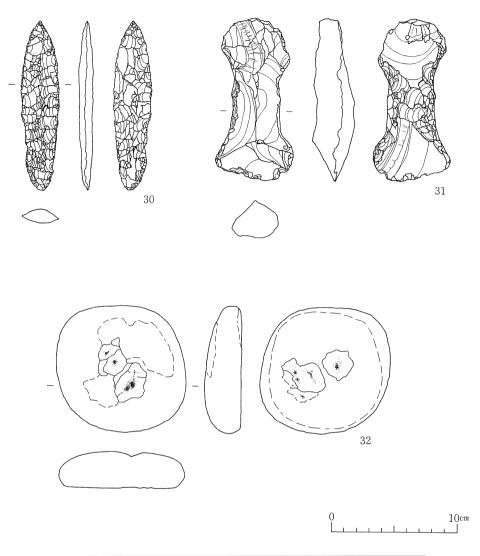
 石
 E P25·2層
 3 面使用

21 砥

# 第62図 遺構外出土遺物 (14)

番号       種別       出土地・層位       特         23       砥石       ES08・2層       1面使用         24       砥石       FO27・3層       4面使用         番号       種別       器形       出土地・層位       特         25       趣込器       深鉢       日景島企業       大木7 a 式         26       趣込器       深鉢       日 185・黒色・本7 a 式         27       趣込器       深鉢       日 185・黒色・木目状然糸支         28       趣込器       深鉢       日 K54・4層       大木9式         29       趣込器       深鉢       日 K57・黒色・十腰内川式			
機 (em) (cm) (em) 図版 11.6 4.6 2.2 41-4 8.8 4.2 3.4 41-5 (em) (em) 図版 11.6 4.6 2.2 41-4 21.2 3.4 41-5	28 0 10cm	25	

払田柵跡調査事務所年報1992



番号	種	別	出土地·層位	特		徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	図版
30	石	槍	EH08·地山直上				13.4	3.0	1.1	42-1
31			FG08•3層				12.9	6.1	3.0	42-2
32	[H]	石	H J 90·火山灰上	両面に凹み、	1 面研磨		10.0	10.2	2.9	42-3

第63図 遺構外出土遺物(15)

層が厚く堆積していた。その頃に流れのない場所では火を伴う何らかの行為がなされて焼土遺構を残したり、遺物包含層を形成した。最終段階の流れは角材列の開口部では創建時点と同じ位置で重なっており、その形成は古代の範囲内と推定される。

平坦な外郭内に東西方向に流れる河川を取り込むのは、胆沢城に共通する立地のあり方である。9世紀初頭に創建年代のある城柵の共通性として認識される。河川は水運による物資の運搬に利用したことも考慮すべきであろう。

外郭南門と内郭南門を結ぶ大路は、その路面や側溝が検出されなかった。しかし、河底の粘土層に打ち込まれた橋脚の一部が発見され、その位置が二つの門を結ぶ線上にあることから、大路を横切る河川に架けられた橋脚と判断された。この橋脚の存在によって外郭南門と内郭南門を結ぶ大路は存在したと考える。その後、河川の氾濫、砂礫、砂の堆積があって橋脚や道路は失われたと考えられる。現時点で橋脚の全体規模は不明であるが、梁行は3.3mであろう。直径50cmの橋脚は平城京のそれに比べても大きい。また、河川の流路が変化していれば、今回検出した橋脚は払田柵の創建年代の橋とは限らず、この点にも考慮して精査は5年度に行いたい。

河川敷以外の外郭南門や内郭南門に近い位置でも、遺物包含層が有りながら側溝やバラス等の路面を全く認めることができなかったことは、単に削平によって失われたと考えてよいであろうか。大路は低い位置を流れる河川を横切るのであるから、側溝を設けるよりもむしろ盛土を行って高くし、その後盛土が流失したことに原因するのではないだろうか。

外郭線は、第88次調査で角材の上に1mの厚さの砂利層が堆積する事実と今年の第92次調査の結果から、9世紀末~10世紀前半代には機能していなかったと推定できる。その後の内郭南門から南へ延びる道路については、今回の調査の限りではその形骸を認めることはできなかった。次に大路の幅員を推定したい。橋脚の存在によって大路は二つの門を結んで直線的に造られていたと考えることができる。その場合、二つの門を結ぶ中軸線に対して東西対称にあると仮定する。また、内郭南門の南西にSB1048掘立柱建物跡があるが、この建物を大路が存続した期間中の造営と仮定すると、門を結ぶ中軸線から建物東側の柱まで約7.6mの距離がある。この建物の軒の出や側溝幅を考慮すると、大路の西側は中軸線の西側約6m以内に押さえられ、これを中軸線に対して対称に折り返し、大路の幅員は約12m以内と推定することができる。

- 註1 平川南「墨書土器とその字形 古代村落における文字の実相 」『国立歴史民俗博物館 研究報告』 第35集 1991 (平成3)年
- 註2 奈良国立文化財研究所編『平城京東堀川左京九条三坊の発掘調査』1983(昭和58)年
- 註3 秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1991 払田 柵跡-第88~91次調査概要』1992(平成4)年

# 第5章 自然科学的分析

平安時代の土地利用状況・古植生の解明を目的として、河川跡の堆積物の花粉分析を行った。 また、外郭南門の柱のうち、これまで樹種不明とされていた3本の樹種鑑定と、外郭線角材の 年輪年代測定を行った。花粉分析と樹種鑑定はパリノ・サーヴェイ株式会社に、年輪年代測定 と樹種鑑定を奈良国立文化財研究所光谷拓実主任研究官に依頼した。

# 第1節 花粉分析および樹種鑑定

# はじめに

払田柵跡は仙北郡仙北町・千畑町に所在する平安時代の城柵である。今回の発掘調査では、四箇所ある柵の出入り口の一つの外郭南門の門柱や、出土土器より平安時代とみられる河川跡が検出されている。今回の自然科学分析では、河川埋積物について花粉分析を行い平安時代頃の土地利用状況・古植生を推定し、同時に門柱のうち樹種が不明な柱の樹種同定を行う。このうち、花粉分析については河川埋積物が砂・砂礫で構成されていることから、秋田県教育庁払田柵跡調査事務所児玉氏と協議のうえ花粉化石の含有状況を概査し、当時の古植生推定が可能な化石の保存状態かどうかを確認し、可能であれば環境解析を行うことにした。

# 1 平安時代の河川埋積物の花粉分析

### (1) 試 料

試料は、平安時代の河川埋積物の3層準から採取された3点である(第64図)。河川埋積物の層序は、下位より砂礫、砂の順に堆積しており、その上位を暗灰黄色の火山灰が覆っている。この火山灰の給源については不明であるが、発掘調査時の所見によれば平安時代頃の火山灰と考えられている。

### (2) 方 法

湿重30gの試料について、HF処理、重液分離(ZnBr2:比重2.2)、KOH処理、アセトリシス処理の順に物理・化学処理を施し、花粉・胞子化石を分離濃集する。得られた残渣をグリセリンで封入しプレパラートを作成した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作しながら出現する種類(Taxa)の同定・計数を行う。結果は、同定結果の一覧表として示す。なお、複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

料

导

**a** 1

黑褐色土(耕作土)

番 黒褐色土(水田床土)

黒褐色土

暗緑灰色土

緑黑色砂

暗灰黄色火山灰

河川坦積物

標高(m)

32.0 —

31.0 -

種類(Taxa) 試料番号 1 2 3 木本花粉 マツ属 1 スギ属 2 ハンノキ属 3 ブナ属 1 コナラ亜属 5 2 クリ属 1 1 ニレ属ーケヤキ属 1 トチノキ属 2 草本花粉 イネ科 3 3 カヤツリグサ科 1 1 1 アカザ科 1 1 1 ヨモギ属 3 不明花粉 1 \_\_\_\_ シダ類胞子 1 計 木本花粉 0 13 8 草本花粉 2 11 8 不明花粉

1

2

0

6

30

0

1

17

第3表 花粉分析結果

河川埋積物の模式柱状図および 第64図 花粉分析試料採取層準

**2** 

**a** 3

砂利

暗緑灰色粘土

(河川底の地山)

### (3)結 果

花粉分析の結果を第3表に示す。花粉分析を行った全試料で花粉化石が少なかった。検出さ れた種類は、木本花粉8種類、草本花粉4種類、シダ類胞子1種類であり、これらの化石の保 存状態は良いものと悪いものとが混在していた。

シダ類胞子

総花粉·胞子数

このように今回の河川埋積物中の花粉化石数は極めて少なかったが、この原因としては河川 埋積物の層相が砂・礫といった粗粒堆積物であり、花粉・胞子がシルト以下の粒子と挙動を共 にすることから、堆積時あるいは堆積後に流失した可能性がある。したがって、検出された種 類は淘汰されて残った化石である可能性が強く、当時の植生について考察することは控える。 なお、検出された種類は本遺跡のこれまでの花粉分析結果で検出されている種類でもあり、当 時の植生を構成する要素であった可能性がある。

# 2 柱材の用材選択に関する検討

### (1) 試 料

試料は、奈良時代の払田柵跡外郭南門の12本ある門柱(1列4本で3列)のうち、北側の列で最も西寄りの柱(試料4)、中央の列で最も西寄りの柱(試料8)、南側の列で東から2番目の柱(試料10)の3点である。

### (2) 方 法

剃刀の刃を用いて、試料の木口(横断面)・柾目(放射断面)・(接線断面)の3断面の徒手切片を作製、ガム・クロラール(抱水クロラール50g,アラビアゴム粉末40g,グリセリン20ml,蒸留水50mlk混合液)で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。

# (3) 結果

3点の試料は、試料4がクリ、試料8がトネリコ属の一種、試料10がハリギリに同定された。同定根拠とした主な解剖学的特徴や一般的な性質を以下に記す。なお、一般的性質については『木の事典 第1,3,4巻』(平井,1979-1980)を参考にした。

# ・クリ (Castanea crenata Sieb. et Zucc.) ブナ科

環孔材で孔圏部は $1\sim4$ 列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。 大道管は単独、横断面では円形~楕円形、小道管は単独および $2\sim3$  個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った楕円形~多角形、ともに管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状~網目状となる。放射組織は同性、単列、 $1\sim15$ 細胞高。 柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。 材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・ 家具・薪炭材、榾木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ、果 実は食用となる。各地の遺跡からの出土例の多い樹種の一つである。

# • ハリギリ (kalopanax pictus(Thunb.) Nakai) ウコギ科

環孔材で孔圏部は $1\sim3$ 列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は管壁厚は中庸、横断面では円形~楕円形、単独、小道管は管壁厚は中庸~薄く、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状または対列状に配列する。放射組織は異性 $\mathbb{H}$ ~同性、 $1\sim5$  細胞幅、 $1\sim30$ 細胞高。柔組織は $9\sim5$  ナル状および周囲状。年輪界は明瞭。ニレ属とよく似た材組織を持つが、ハリギリの小道管にはらせん肥厚がないことで分けられる。

ハリギリは、北海道から九州の肥沃な適潤地に生育する落葉高木で、大きいものは高さ25m、 直径1m程になる。材の硬さは中程度で、加工は容易であるが耐朽性は高くない。比較的欠点

の少ない材で、木理が鮮明であるため家具材として古くから利用されてきた。また、材が白色 に近く、板目面で年輪が明瞭な模様になって現れるため、装飾材として用いられる。その他に も器具材・下駄材・彫刻材等幅広い用途に用いられる。

# ・トネリコ属の一種 (Fraximus sp) モクセイ科

環孔材で孔圏部は2~3列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形~楕円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列、放射組織との間では網目状~篩状となる。放射組織は同性(~異性III型)、1~3(5)細胞幅、1~40細胞高であるが、時に20細胞高前後のものが多い。柔組織は周囲状およびターミナル状、時に階層状の配列を示す。年輪界は明瞭。

トネリコ属には、シオジ(Faximus spaethiana Lingelsh.)、トネリコ(F. jponica Blume)、アオダモ(F. serrata(Nakai)Murata)など8種が自生する。このうちヤマトアオダモ(F. Longicuspis Sieb.et Zucc)・マルバアオダモ(F. sieboldiana Blume)・アオダモは北海道・本州・四国・九州に、ヤチダモ(F. mandshurica Rupr. var. jponica Maxim.)は北海道・本州(中部地方以北)に、トネリコは本州(中部地方以北)に、シオジは本州(関東地方以西)・四国・九州に分布する。いずれも落葉高木である。材の性質は種によって異なるが、一般には中庸~やや重硬で、靱性があり、加工は容易で、建築・器具・家具・旋作・薪炭材などの用途が知られる。

### (4) 考察

ハリギリとトネリコ属の出土位置をみると、ハリギリは中央の列の最も西寄りでトネリコ属は南側の列の東から2番目である。これらが門の中でどのような位置を占めるのか充分には理解できないが、いずれにしても上屋の荷重がかかった場所であろう。今後建築史的な研究成果を含めて検討を行う必要があろうし、類例にこのような用材がみとめられるのかどうか検索する必要があろう。

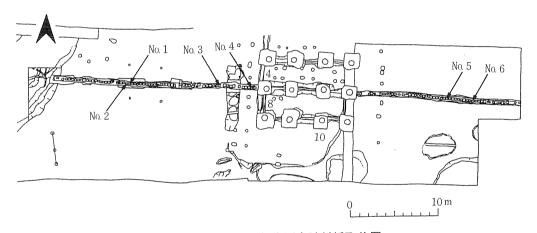
### 猫文

平井信二『木の事典』第1,3,4巻.かなえ書房.1979(昭和54)-1980(昭和55)年 古池 博「木柱根その他木材ならびに大型堅果類の植物学的検討」『金沢市新保町チカモリ遺跡―第 4次発掘調査兼土器編―』p.203-226,金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会・金沢市 新保町第一土地区画整理組合.1986(昭和61)年

能登町教育委員会「巨大木柱」『真脇遺跡 発掘調査概報』p.28-30, 1984(昭和59)年

# 第2節 年輪年代測定と樹種鑑定

7月30日、光谷拓実氏より、角材列の中から適切な材を選んでいただき、試料採取を行った。 同時に門柱3本の試料採取も行った。試料4は角材の木口面に虫食いによる孔があいており、 既に成長が停止していたものを伐採、使用したと判断されるので、試料4の示す最外年輪年代 は伐採年代ではない。



第65図 年輪年代測定試料採取位置

第 4 表 外郭線角材年代測定結果

***************************************			The Colonia Co			
試料	形 状タイプ	計 測年輪数	最外年輪 形 成 年			
1	А	109	800			
2	A	104	801			
3	Α	41	801			
4	Α	293	788			
5	A	184	801			
6	A	224	801			

第5表 門柱樹種鑑定結果

試料	樹	種
4	ク	リ
8	トネリ	コ属
10	ケャ	キ

# 第6章 調査成果の普及と関連活動

# 1 現地説明会の開催

平成4年8月22日 第92次調査について

# 2 諸団体主催行事への協力活動

政庁跡や発掘調査現場において、西仙北町立土川小学校、大曲生活改善実行グループ、雄物 川町役場の方々や、各種団体主催の郷土学習会、見学会などに対し、払田柵跡の概要説明を行っ た。

# 3 払田柵跡環境整備審議会への出席

第1回 平成4年7月23・24日

第2回 平成5年3月9・10日

# 4 顧問会議の開催

第35回 平成4年8月18日

第36回 平成5年2月26日

# 5 報 告

児玉 準「払田柵跡-第92・93次調査の概要-」

『第19回古代城柵官衙遺跡検討会資料』平成5年3月20・21日

児玉 準「払田柵跡第92・93次調査の概要」秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料 平成5年3月13・14日



1 調査前の状況(北から)



2 同 上(東から)



外郭南門と角材列 (西から)



1 外郭南門(北から)



2 外郭南門発掘作業 (西から)

図版 4 第92次調査



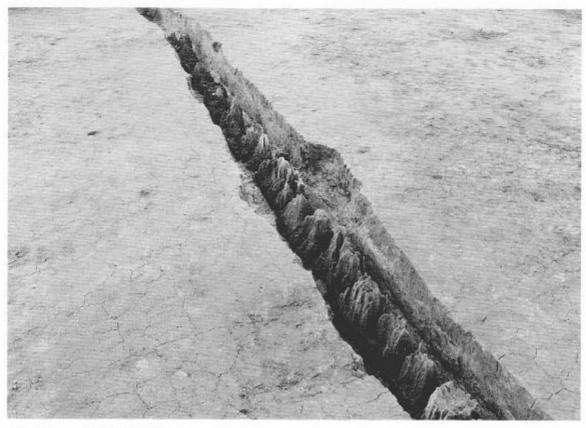
1 外郭南門北側東2柱



2 外郭南門棟通り東2柱

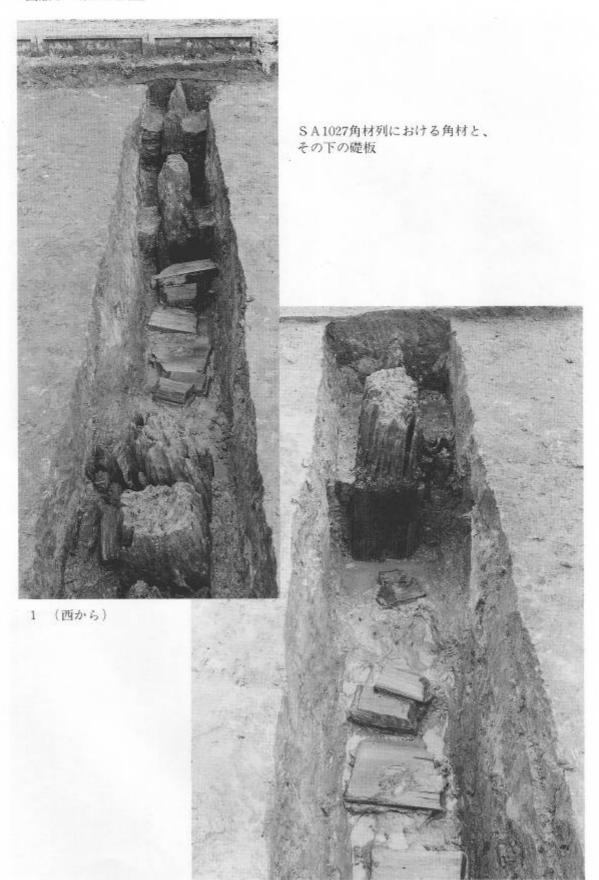


1 S A 1027角材列(南西から)

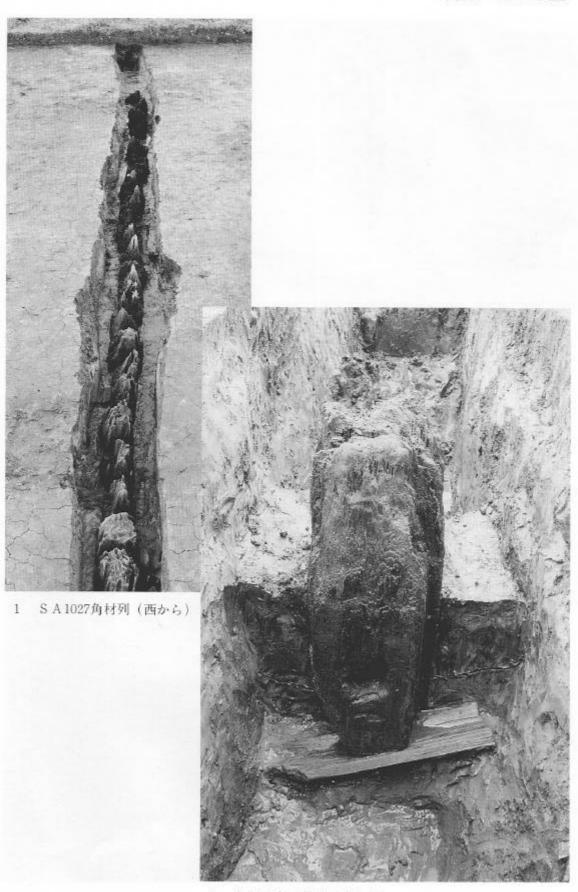


2 同 上(南東から)

図版 6 第92次調査

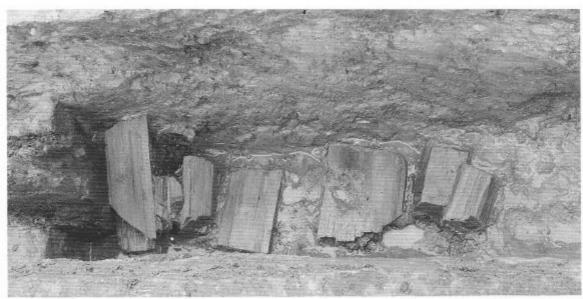


2 (東から)



2 布掘り内の角材(西から)

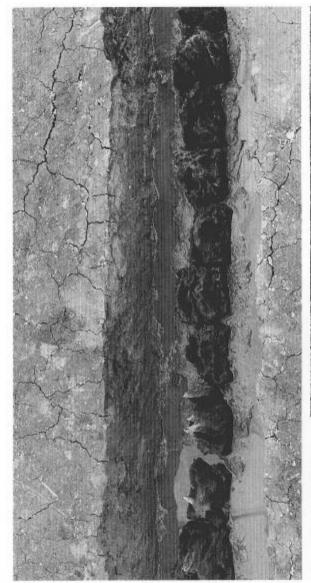
図版8 第92次調査



1 SA1027角材列 角材の下の礎板



2 SA1028角材列 (西から)



S A 1032角材列



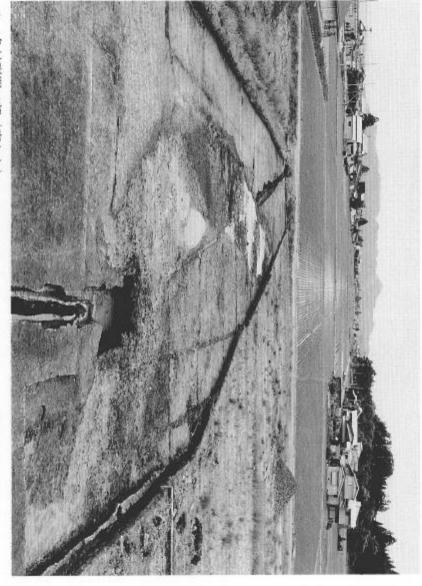
2 SA1032角材列(東から)



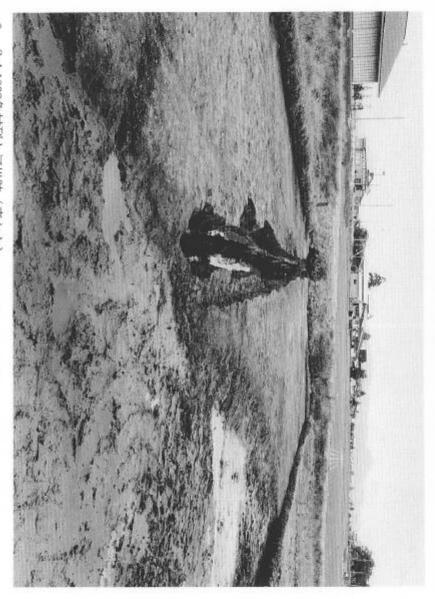
1 SA1028角材列西端部と河川跡(東から)



2 SA1032角材列東端部(南から)



1 角材列開口部(東から)

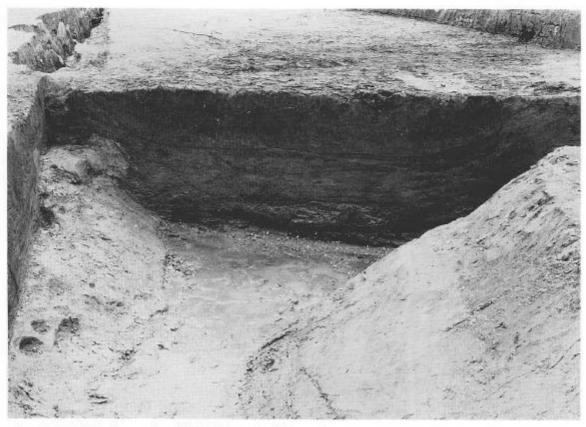


S A1032角材列と河川跡(東から)

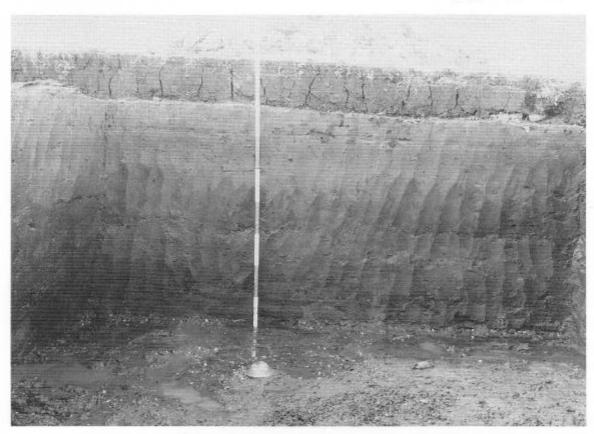
図版12 第92次調査



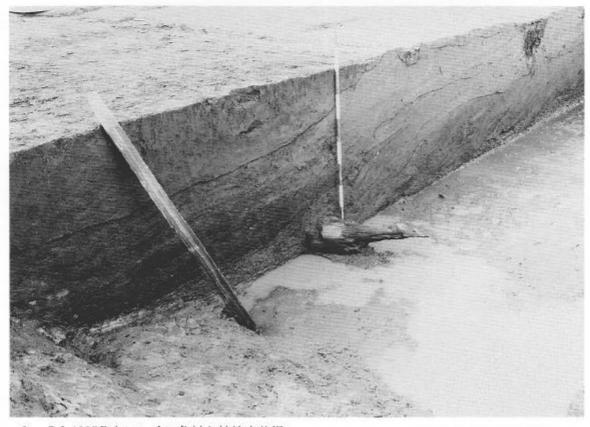
1 S L1035河川跡の土層



2 S L1035Dトレンチの最終段階河川跡(東から)



1 S L 1035 Dトレンチの遺物出土状態



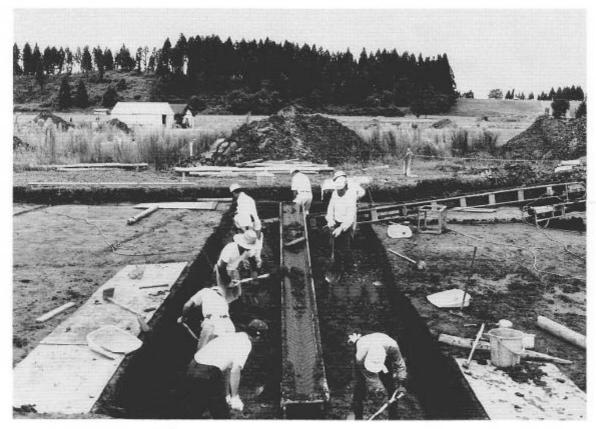
2 SL1035Dトレンチの角材と杭検出状況



1 年輪年代測定試料の採取を行う光谷氏



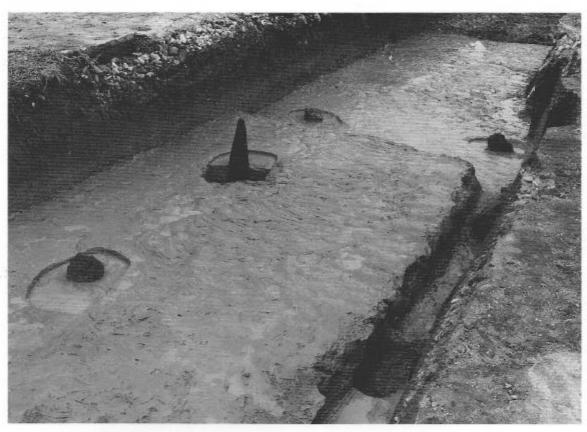
2 西暦788年の角材木口面



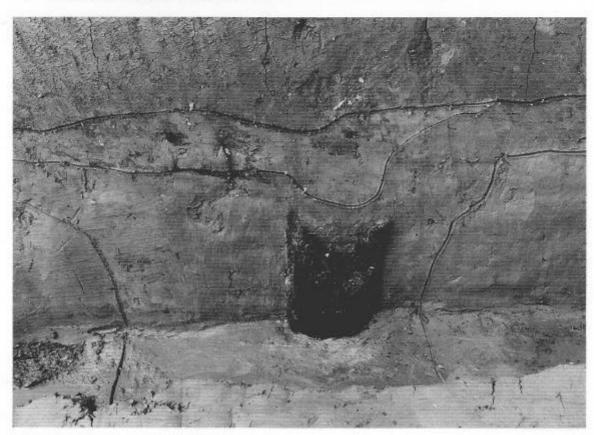
1 S L1035河川跡の調査



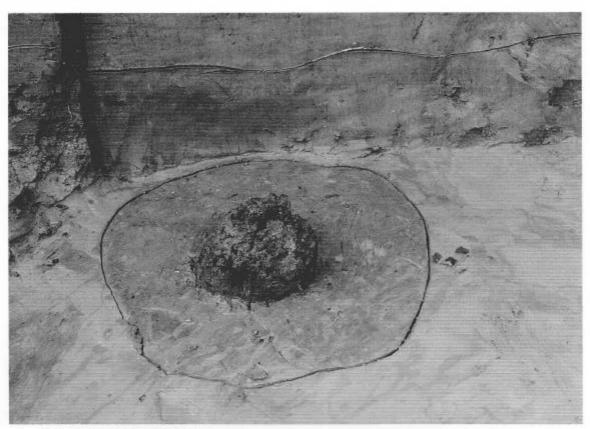
2 同 上



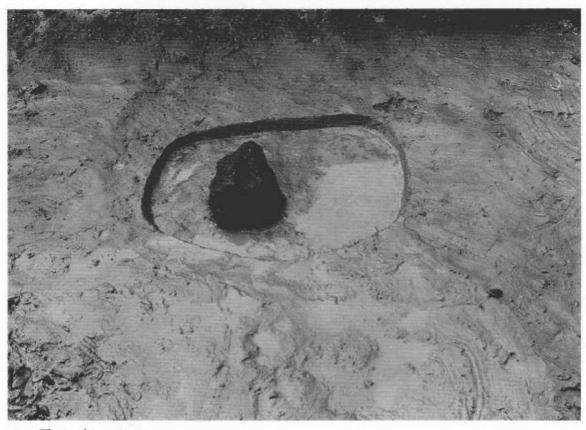
1 SB1048掘立柱建物跡(東から)



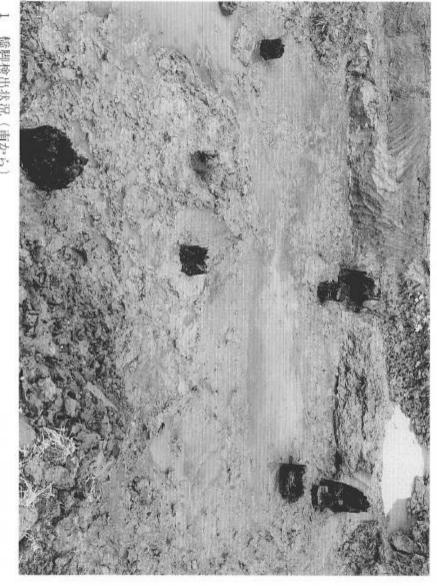
2 同 上トレンチ壁面の柱



1 SB1048掘立柱建物跡の柱



2 同 上



橋脚検出状況 (南から



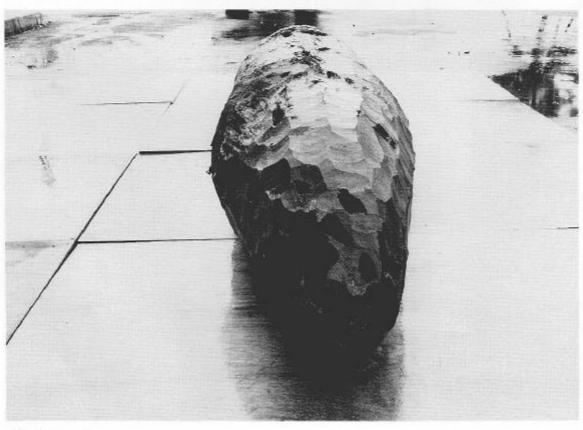
上 (西から)



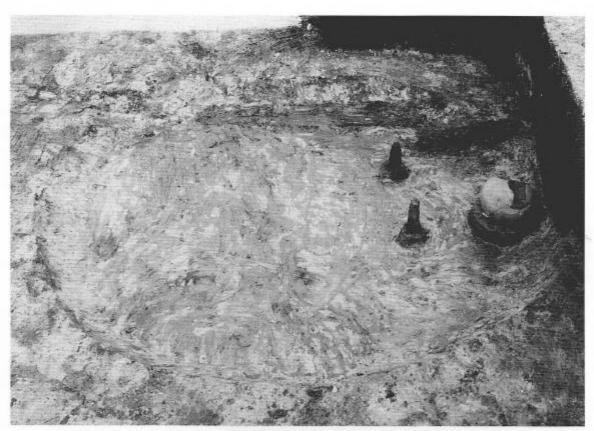
橋脚(北から)



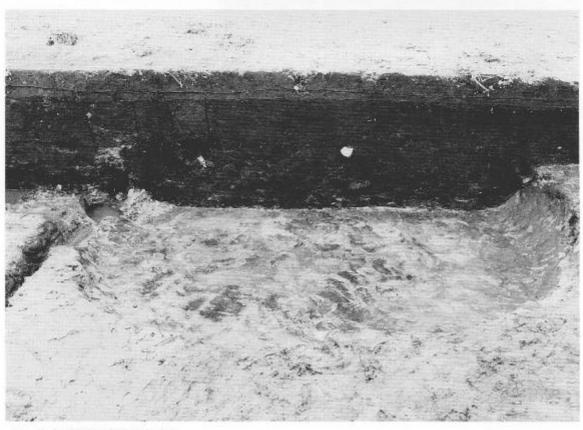
1 抜き上げた橋脚



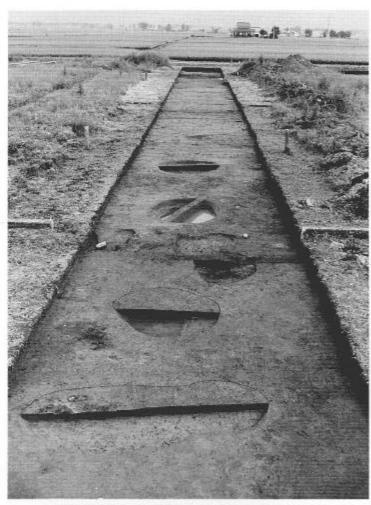
2 同 上



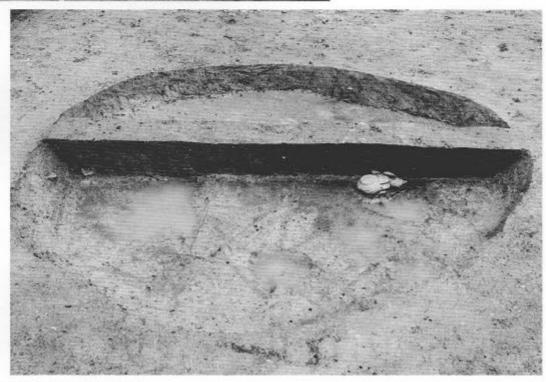
1 S K 1033土坑(南から)



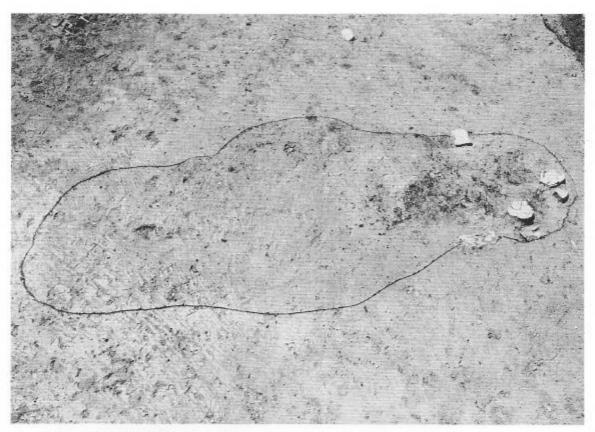
2 S K 1034土坑 (南から)



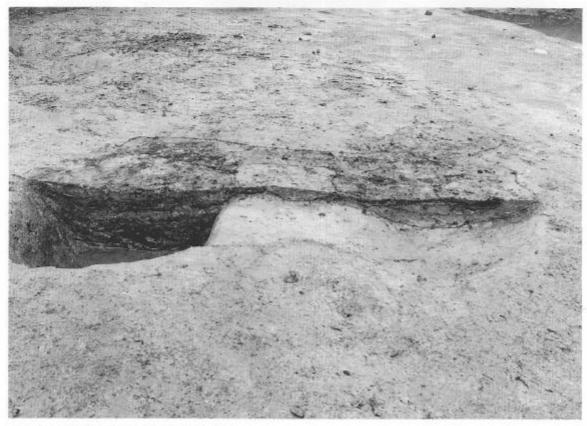
1 F N ライントレンチの土坑・ その他の遺構 (西から)



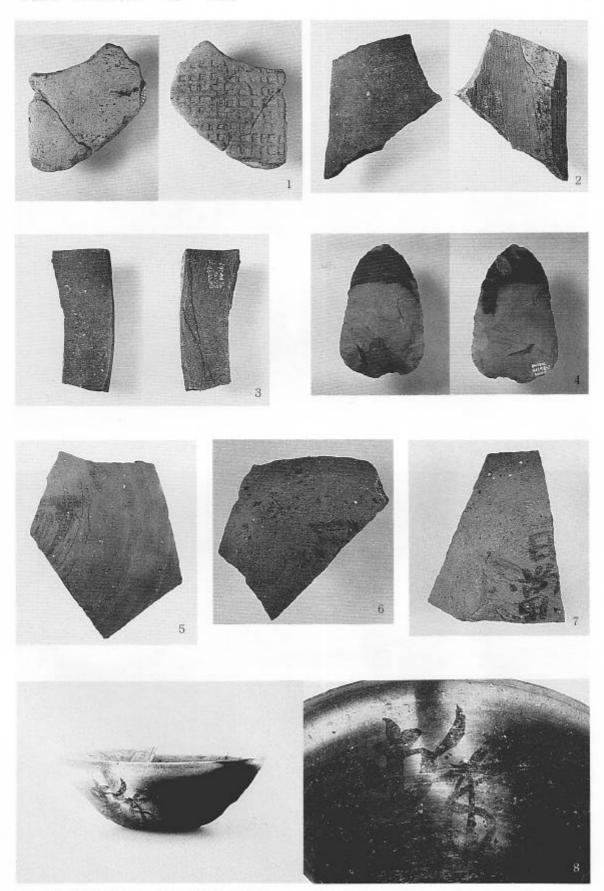
2 S K1042土坑 (西から)



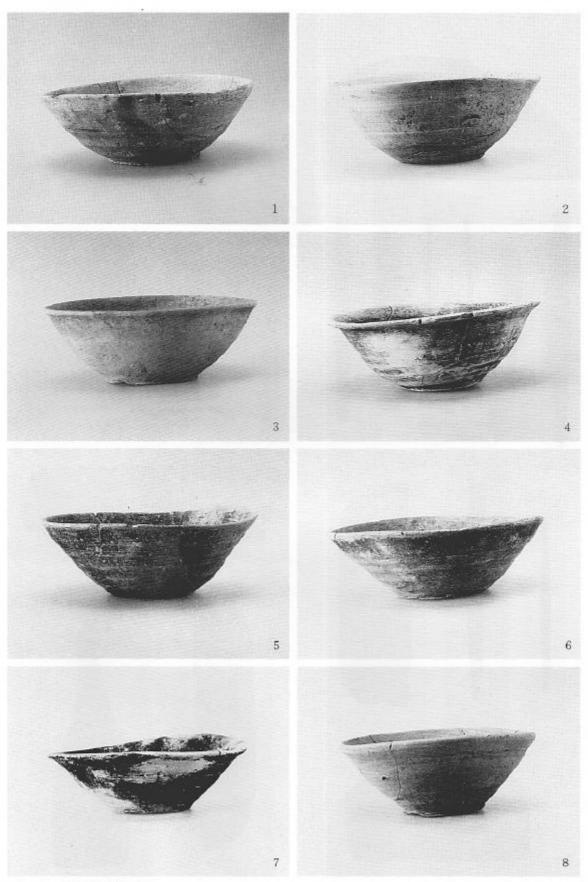
1 S X 1040その他の遺構(東から)



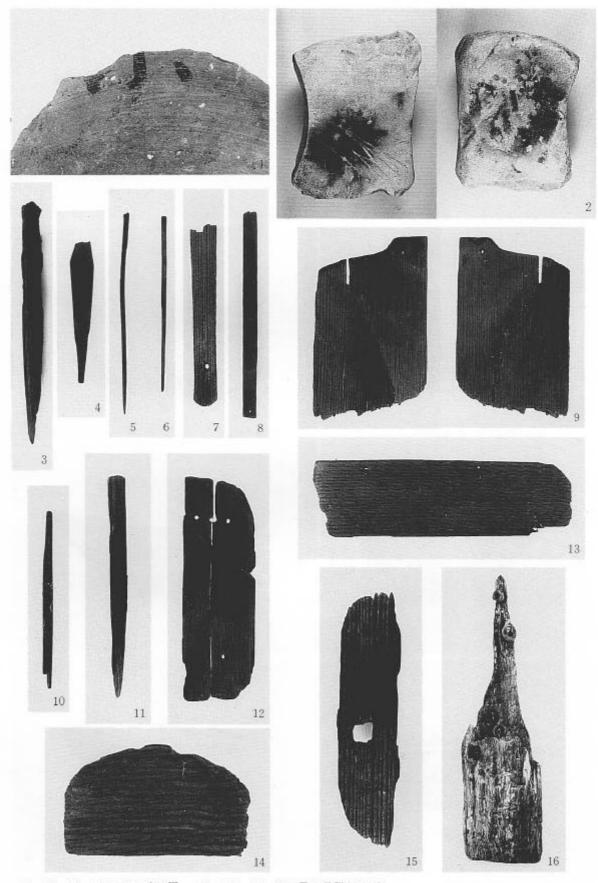
2 S X 1045その他の遺構 (東から)



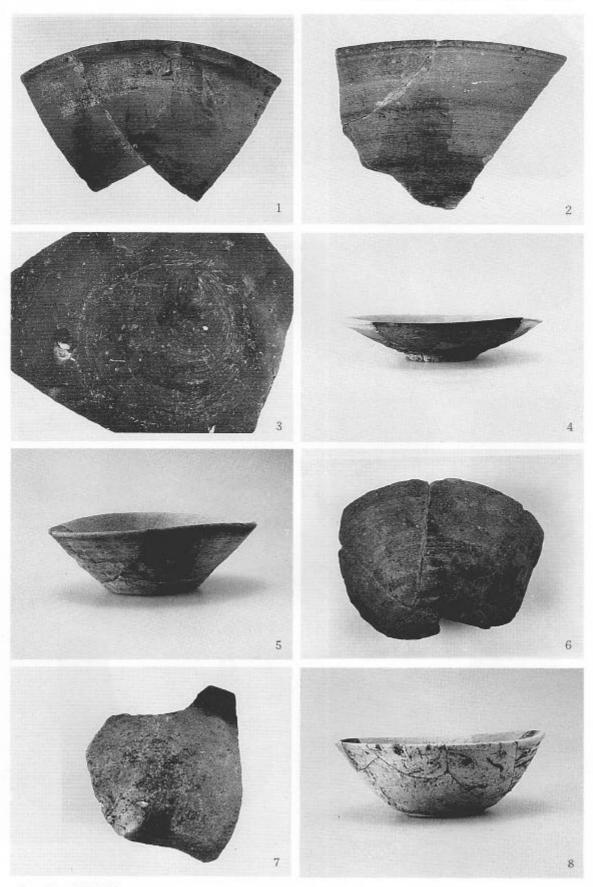
1~4 SA1027 5~8 SL1035砂礫層



1~8 S L 1035砂礫層

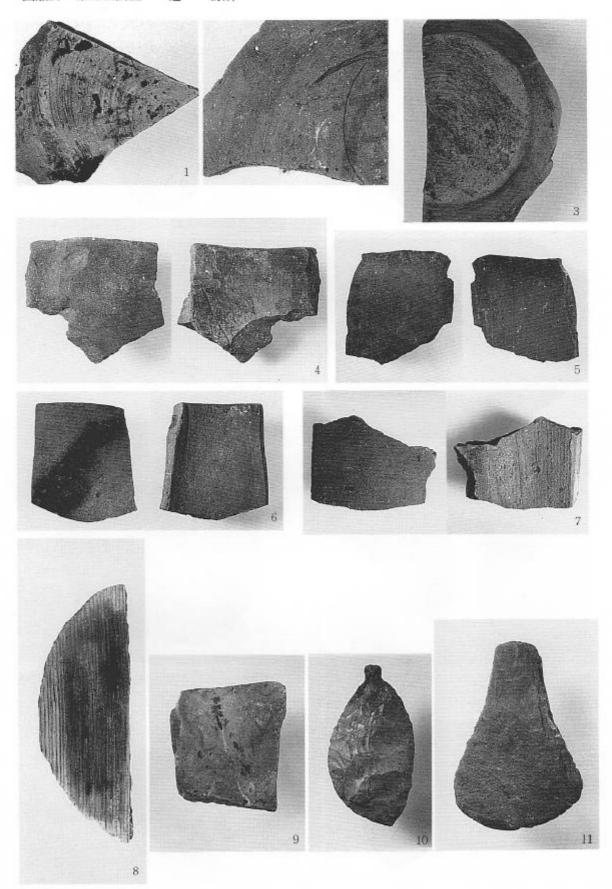


1 ~ 9 ⋅ 16 S L 1035砂礫層 10 ~ 15 S L 1035最終段階河川跡

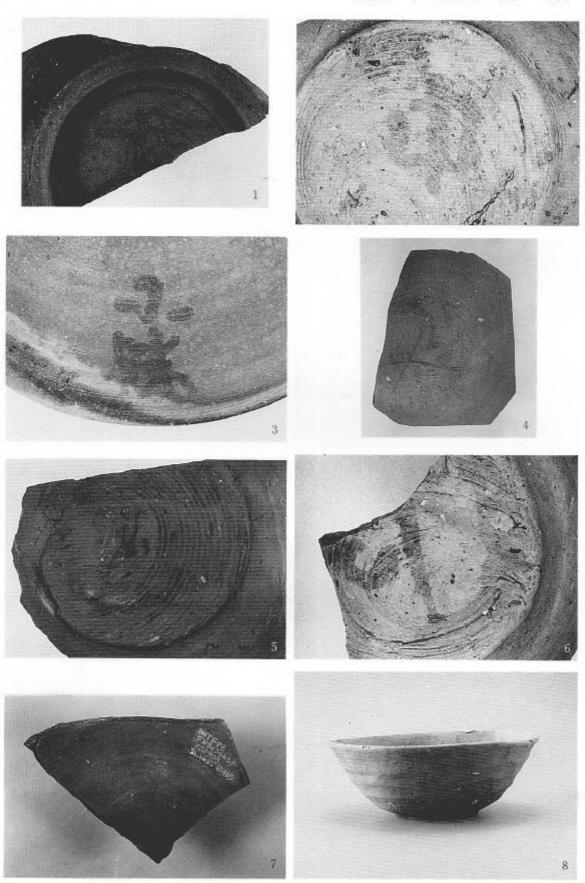


1 ~ 8 . S K 1029

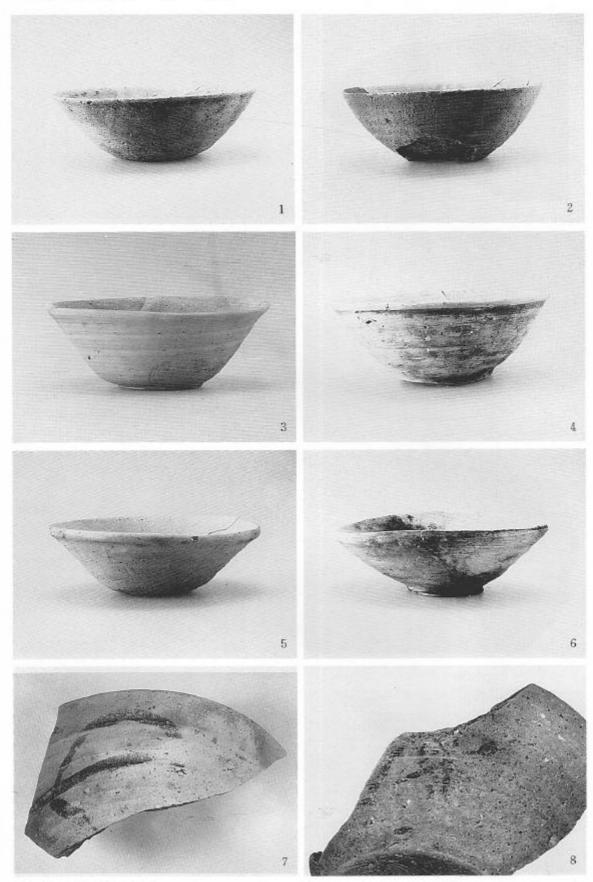
図版28 第92次調査 遺 物/5



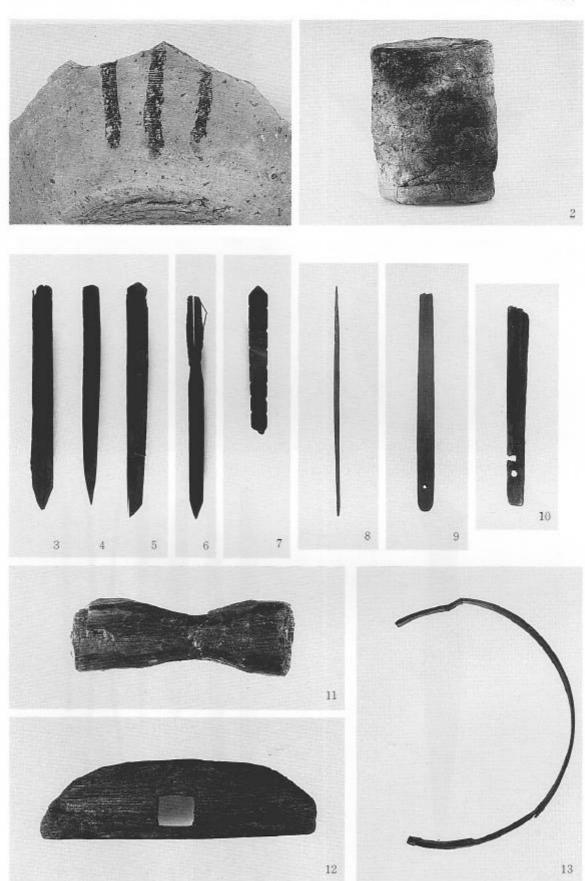
1~11 遺構外



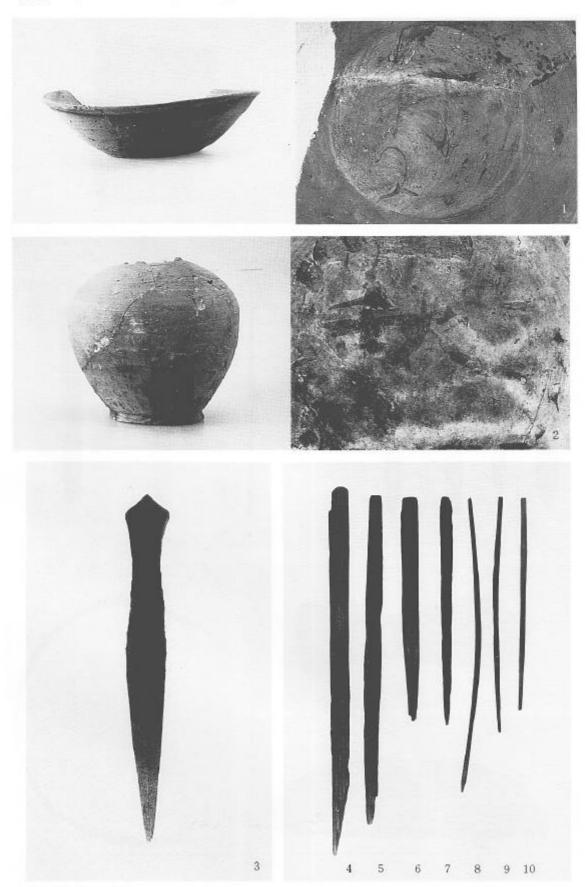
1~8 S L1035砂礫層



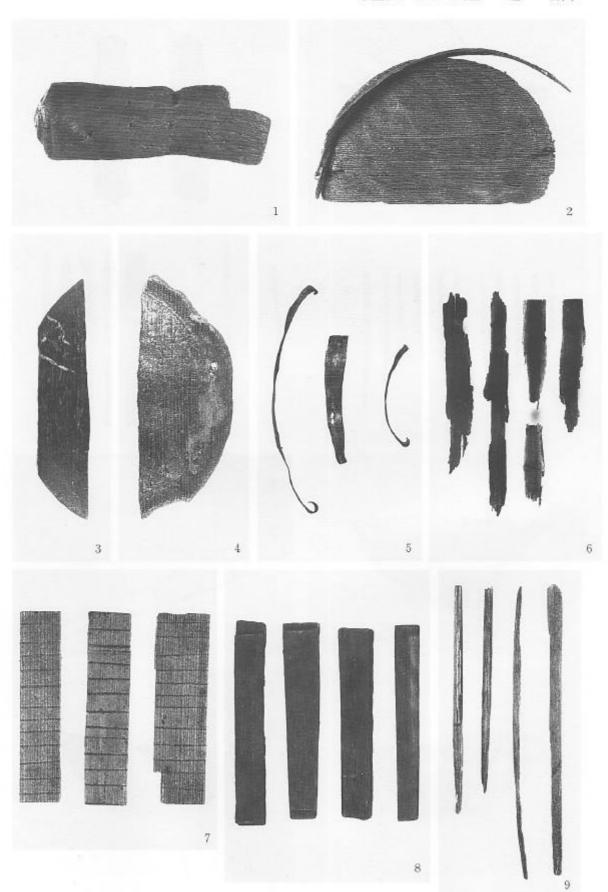
1~8 S L 1035砂礫層



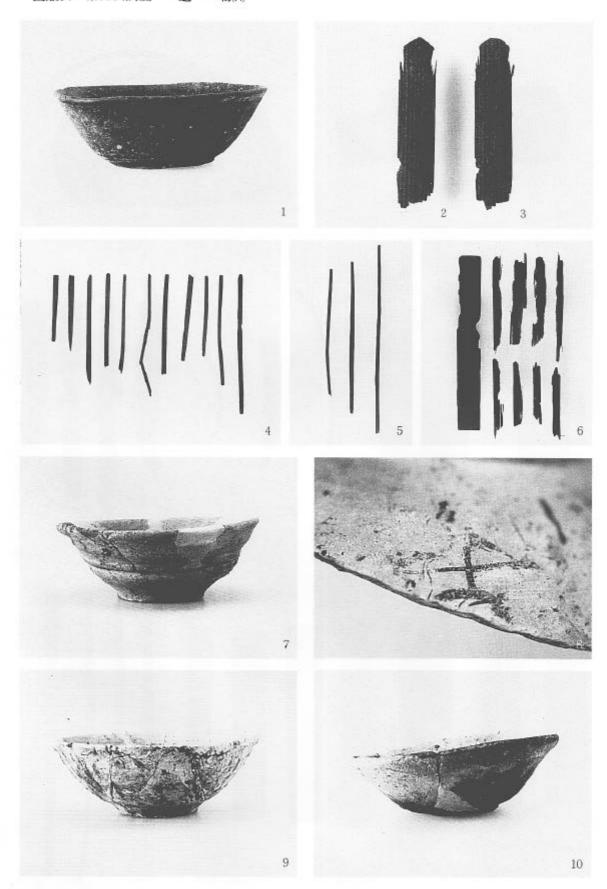
1~13 S L1035砂礫層



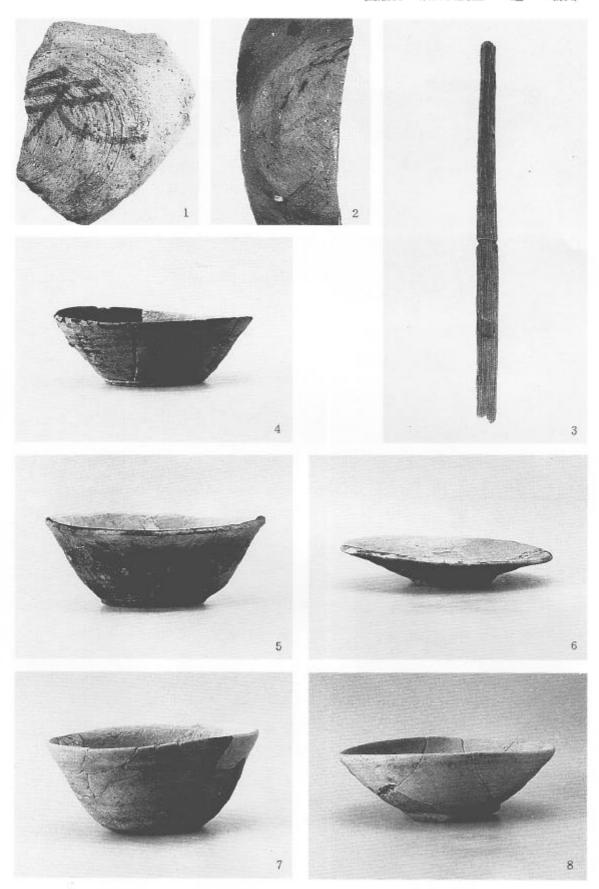
1~10 S K1033



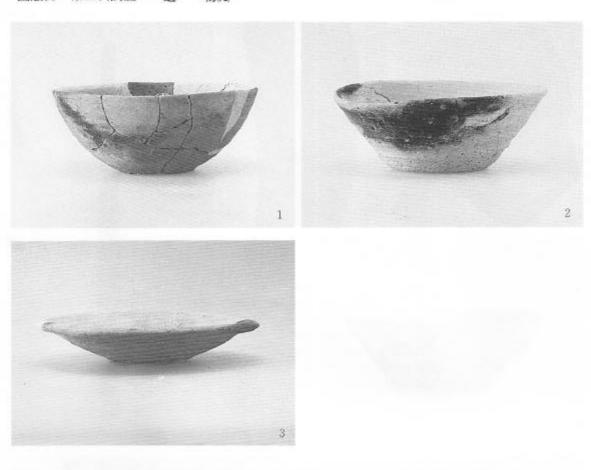
1 ~ 9 S K1033

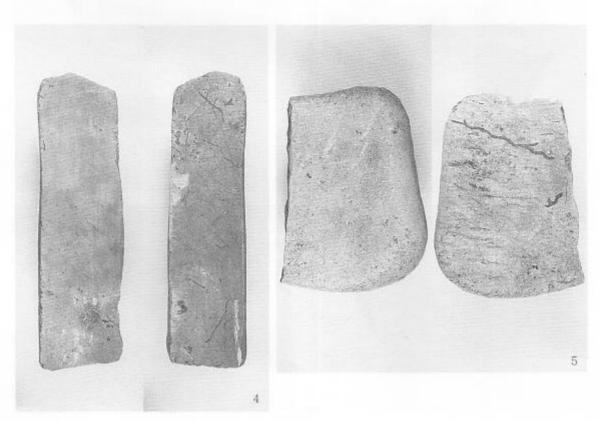


 $1 \sim 6 \quad \text{S K1034} \qquad 7 \, \cdot \, 8 \quad \text{S K1042} \qquad 9 \quad \text{S K1043} \qquad 10 \quad \text{S X1046}$ 

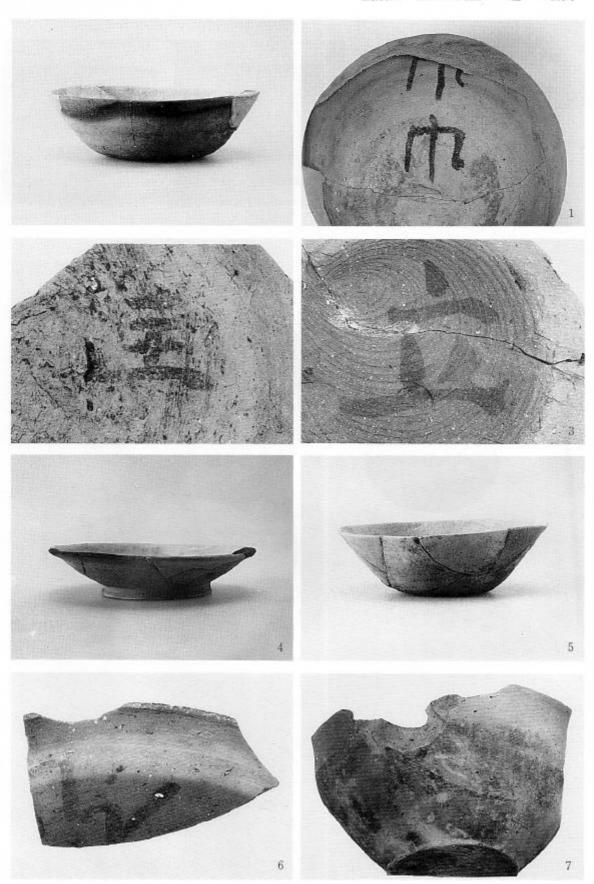


1~4 EHライントレンチ 5·6 ENライントレンチ 7·8 HCライントレンチ

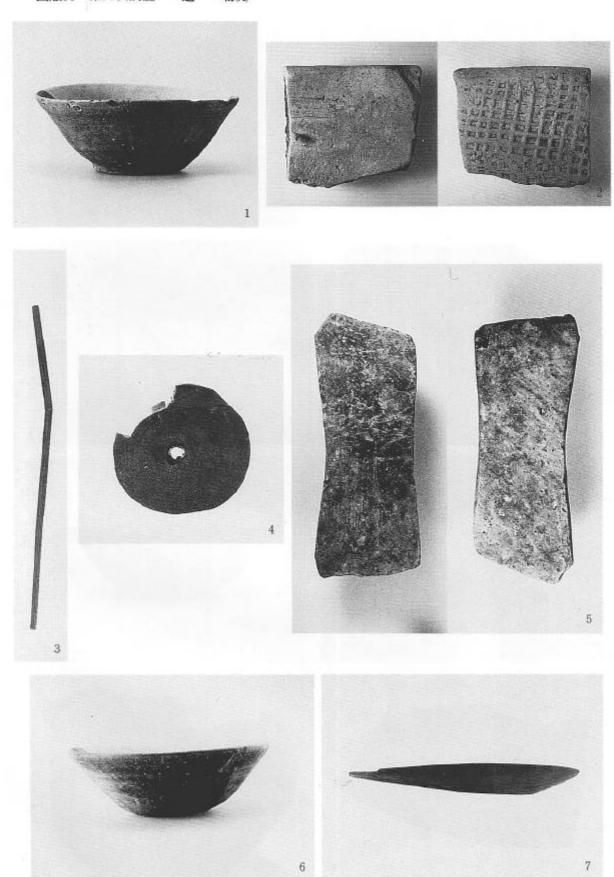


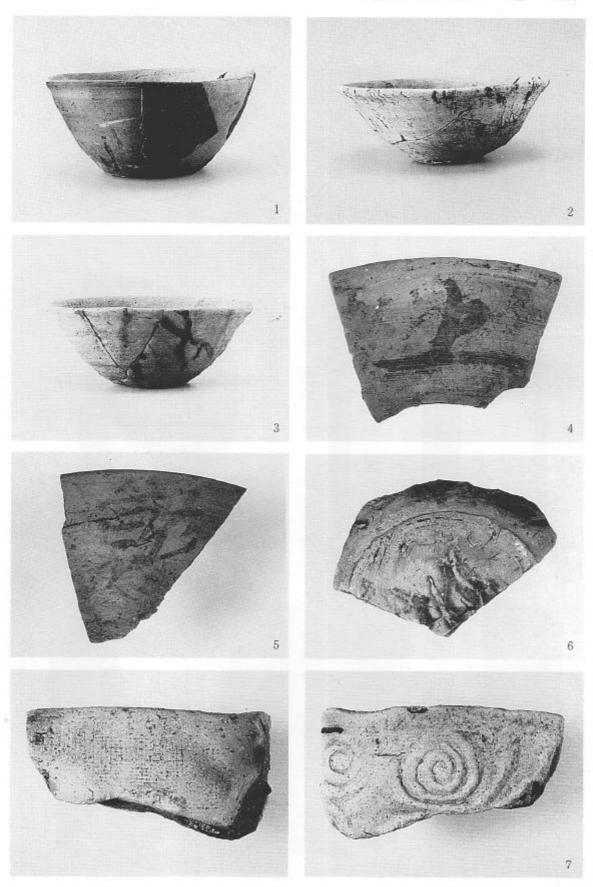


1~5 HCライントレンチ

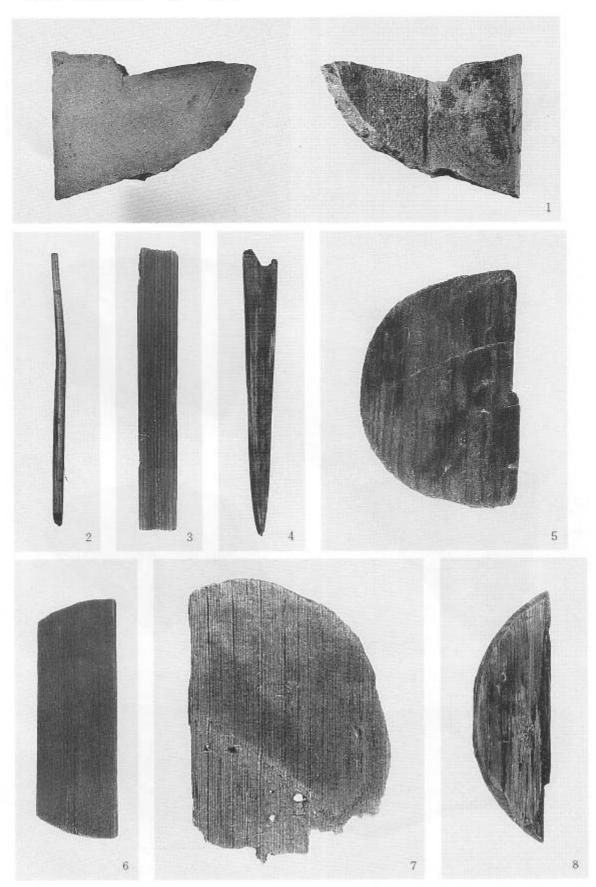


 $1 \sim 7$  HCライントレンチ

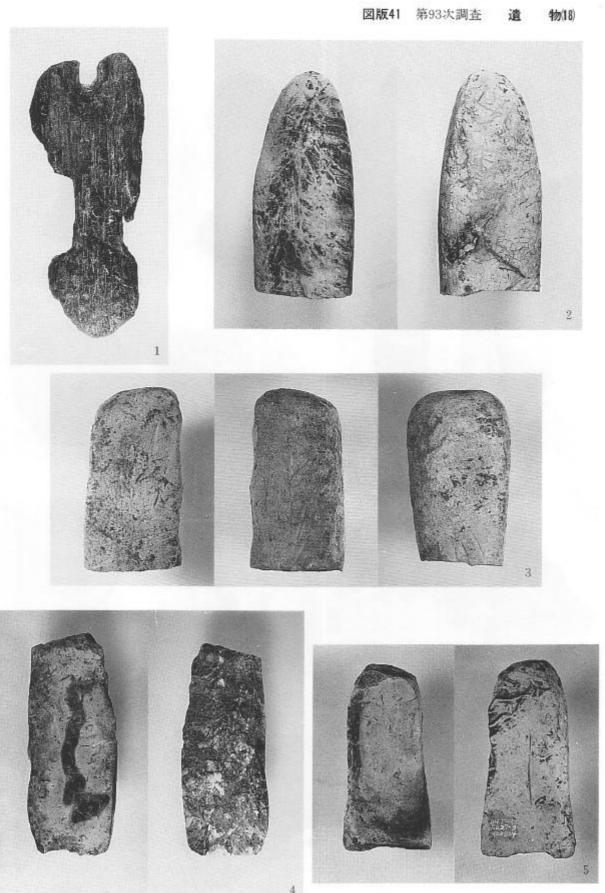




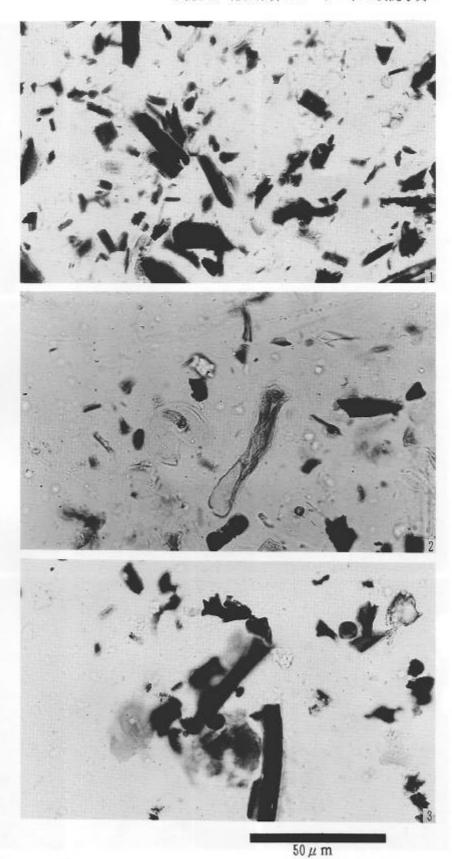
1~7 遺構外



1~8 遺構外

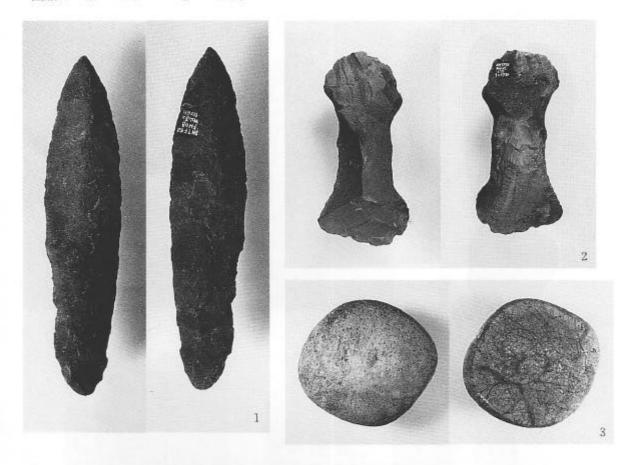


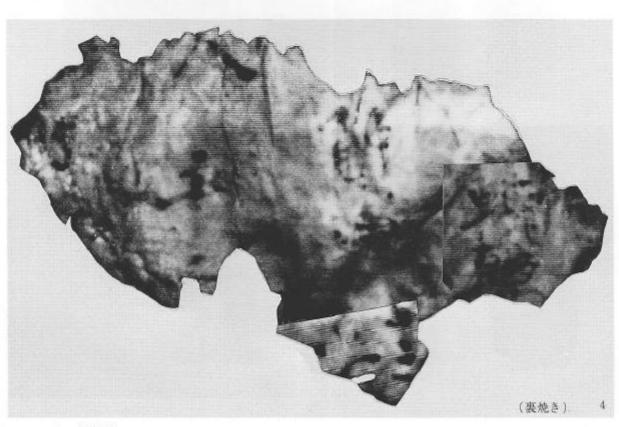
1~5 遺構外



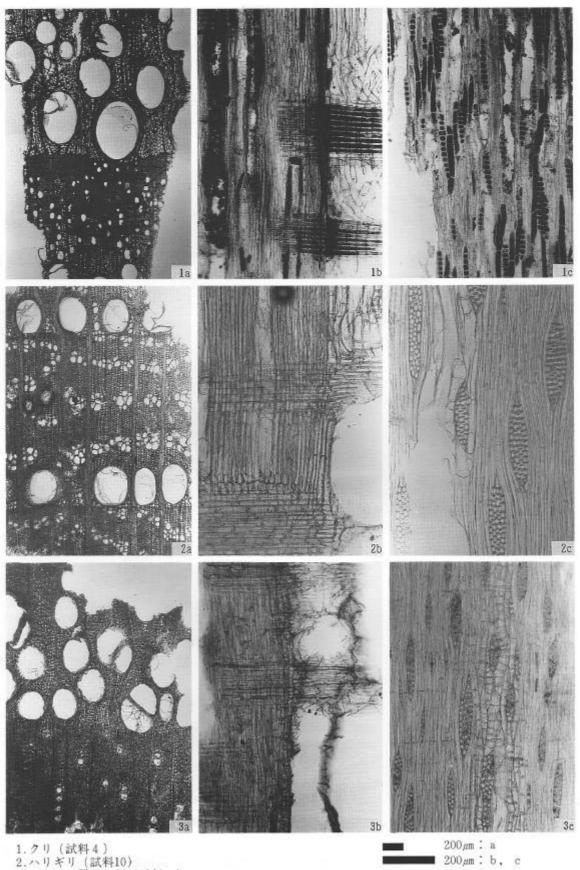
1. 試料番号 1 2. 試料番号 2 3. 試料番号 3

図版42 第93次調査 遺 物(19)





1~4 遺構外



1.クリ(試料4) 2.ハリギリ(試料10) 3.トネリコ属の一種(試料8) a:木口, b:柾目, c:板目